

朝鮮の物産

年次	数量	價額
大正五年	1斤	8,464円
同六年	1斤	3,640円
同七年	1斤	6,741円
同八年	1斤	1,746円
同九年	1斤	1,317円
同十年	1斤	1,090円
大正五年	366斤	8,375円
同六年	363斤	14,448円
同七年	546,366斤	55,605円
同八年	1,745,742斤	67,489円
同九年	2,323,486斤	67,489円
同十年	2,323,486斤	67,489円
同十一年	2,323,486斤	67,489円
同十二年	2,323,486斤	67,489円
同十三年	2,323,486斤	67,489円
同十四年	2,323,486斤	67,489円
同十五年	2,323,486斤	67,489円
昭和元年	2,323,486斤	67,489円

牛骨 (肥料)

年次	数量	價額
明治四十三年	16,226百斤	3,376円
同四十四年	32,850百斤	6,232円
大正元年	18,837百斤	3,451円
同二年	32,553百斤	7,237円
同三年	33,646百斤	6,487円
同四年	35,704百斤	5,847円
同五年	36,451百斤	5,453円
同六年	36,018百斤	6,711円
同七年	17,537百斤	5,267円
大正八年	26,732百斤	7,575円
同九年	25,233百斤	15,745円
同十年	33,096百斤	23,610円
同十一年	36,934百斤	14,853円
同十二年	33,426百斤	12,540円
同十三年	29,557百斤	16,960円
同十四年	26,691百斤	10,377円
同十五年	26,691百斤	10,377円
昭和元年	26,691百斤	10,377円

葉 吹

年次	数量	價額
大正十一年	65,166枚	18,236円
同十二年	80,941枚	16,559円
同十三年	1,277,487枚	33,483円
大正十四年	1,652,096枚	38,461円
同十五年	1,652,096枚	38,461円
昭和元年	1,652,096枚	38,461円

糠 (肥料)

年次	数量	價額
明治四十三年	16,697百斤	9,233円
同四十四年	35,370百斤	19,749円
大正元年	36,233百斤	15,741円
同二年	36,451百斤	10,164円
同三年	37,000百斤	11,133円
同四年	45,851百斤	16,304円
同五年	49,749百斤	15,801円
同六年	46,691百斤	16,653円
同七年	45,105百斤	15,144円
大正八年	65,579百斤	11,133円
同九年	48,975百斤	10,537円
同十年	66,464百斤	9,755円
同十一年	69,009百斤	9,506円
同十二年	74,935百斤	10,743円
同十三年	85,696百斤	13,780円
同十四年	70,533百斤	14,575円
同十五年	70,533百斤	14,575円
昭和元年	70,533百斤	14,575円

第六章 農産物

農産物輸移入統計

米

年次	数量 (百斤)	金額 (円)	年次	数量 (百斤)	金額 (円)
明治四十三年	三、六三五	三三、七八	大正八年	四、四〇〇	一、三三、八三五
同四十四年	三、六三〇	二四、五二七	同九年	五、九三二	二、六二、二七一
大正元年	三、五三三	一五、三四三	同十年	一、八八四〇	五二、三三三
同二年	六、〇七九	二、九七、九一九	同十一年	四、五、一八一	三、一八六、三三〇
同三年	二、六七、七六四	二、七三、三五六	同十二年	二、九九、三七〇	二、九〇、四三〇
同四年	三、〇九三	三、六、五七七	同十三年	一、一〇九、六六四	二、〇〇九、六五五
同五年	一、八、五五四	三、五、三三二	同十四年	二、三三、九六六	二、四、四六一
同六年	六、五、三五五	九元、七八	昭和十五年		
同七年	七、五、〇九五	一、五、一〇、三七七	昭和十六年		
大正元年	六九、九六	二七、三三三	大正九年	六五、五五六	一八、〇九三、〇八七
同二年	七、九、八〇六	二、八九七、七五五	同十年	八八、三三七	九、七四、九七五
同三年	一、六、五〇〇	一、四、七、六三〇	同十一年	一、七、八、六八九	八、八六六、八六〇

粟

年次	数量 (百斤)	金額 (円)	年次	数量 (百斤)	金額 (円)
同四年	一〇一、六三九	七六、〇五四	大正十二年	二、六九、九八〇	一三、三三、八一〇
同五年	一〇、〇〇九	九三、一八四	同十三年	三、二五、九六〇	一九、六七九、〇〇九
同六年	一三三、九〇三	一、三、四、一四一	同十四年	四、一、四〇、〇六	二六、七、七九、六五九
同七年	三三、六七七	三、一〇〇、一三三	昭和十五年		
同八年	九五、六九九	一五、四、四〇、一〇〇	昭和十六年		

小

麥

年次	数量 (百斤)	金額 (円)	年次	数量 (百斤)	金額 (円)
大正七年	?	三、〇〇〇	大正十二年	二八、七七	七二、四九六
同八年	?	一、三、五、〇〇〇	同十三年	四三〇、四六	三、二九、五三七
同九年	四八、一〇八	一、〇〇六、一八七	同十四年	七九三	六、八、八三三
同十年	三九、七五一	四、五、一〇〇	昭和十五年		
同十一年	一、四、五、九五	一、〇、四、三三〇	昭和十六年		

大

豆

年次	数量 (百斤)	金額 (円)	年次	数量 (百斤)	金額 (円)
大正十年	三、四、四八〇	二、四九、三七	大正十二年	二、五三、〇六六	一、三、四〇、五三二
同十一年	二、六、四九七	一、四一、四三六	同十三年	五、一、八八三	二、八六六、四八三

第六章 農産物

朝鮮の物産

大正十四年

一五、三七一

一、〇二六、四六一

大正十五年
昭和元年

三七〇

小

豆

年次
大正七年
同八年
同九年
同十年
同十一年

數量
一五、六七石
二七、〇三〇
二五、四三二
二四、九七三
一三〇、九二〇

價額
一九一、三六三
六〇四、七三三
七六三、九七七
三二二、三四〇
七五、〇五九

年次
大正十二年
同十三年
同十四年
昭和十五年

數量
二四〇、九九
一九三、〇七三
二九、四五六

價額
一、四一八、三六
一、四三四、七六
一、八二七、三〇

胡

麻

子

年次
明治四十三年
同四十四年
大正元年
同二年
同三年
同四年

數量
四〇四百斤
七、〇一一
四、八七六
五、三三八
二、五五六
六、九五〇

價額
二、二五一
五九、七七七
二七、七五五
三、七三〇
七、〇七三
四、五九五

年次
大正八年
同九年
同十年
同十一年
同十二年
同十三年

數量
三、四〇〇、四七七
一、三三四、〇四三
四、六六一、七四〇
四、六九四、六八三
四、八七〇、二一六
三、二九九、〇七九

價額
四九三、九五九
二二、七四六
五三、一三三
五四七、四一九
五三、〇七一
四〇二、五二五

柑

橘

類

年次
同五年
同六年
同七年

數量
九、九五七
二七、九〇〇
二五、三〇〇

價額
六、九六一
二七、七三三
四一、七九四

同十四年
昭和十五年

四、〇三三、六四九

六三七、四六八

年次
明治四十三年
同四十四年
大正元年
同二年
同三年
同四年
同五年
同六年
同七年

數量
二、五六三、一九三
三、三三四、二六一
四、四〇一、八三四
五、四〇八、九二二
四、二七六、八四四
四、九九〇、九七八
六、五三八、九七三
五、三三三、六三四
四、四三三、一四三

價額
一一、二六三
一五六、三四〇
三二、四三三
二七、一八一
一六、七〇〇
二二、二五四
二九一、八六五
二五六、九七一
三三五、八三二

年次
大正八年
同九年
同十年
同十一年
同十二年
同十三年
同十四年
昭和十五年

數量
七、一八〇、三四九
七、二一九、八三三
七、六八三、八二五
二、五六五、五六七
一〇、五九三、七三三
二、九九二、〇〇五
二四、〇六九、七三二

價額
五九八、八六九
六一九、三六
六五一、四八四
八五、五七七
八四五、八一七
一、二八四、〇五七
一、三六七、三元

葉

煙

草

年次
明治四十三年

數量
九〇、二六斤

價額
一五、一九

年次
明治四十四年

數量
一、五三二、五六斤

價額
二〇五、七六

朝鮮の物産

大正元年	二、三九、〇九〇	三七、九〇四	大正九年	三、五〇、六四八	一、六五、六〇四
同二年	二、三六、七九七	四三、九〇七	同十年	二、九三、四二六	一、七〇、一八七
同三年	一、二四七、九五四	二九、一八三	同十一年	二、六六、八七七	二、六六、四三三
同四年	二、四九七、〇七〇	三四二、六六三	同十二年	一、三六、二四四	五八五、九三九
同五年	三、二九九、一五九	四〇〇、四四四	同十三年	四、八七、九〇五	二、四六七、二六六
同六年	二、五九四、八八八	五二九、〇九七	同十四年	三、一八〇、四九三	二、九二六、三六八
同七年	二、九一、一六九	六九、四一五	昭和十五年		
同八年	二、〇〇三、一〇五	九四、六七			

線

綿

年次	數量	價額	年次	數量	價額
明治四十三年	七五五、〇〇〇斤	七、五七三	大正八年	一、五〇、九〇〇斤	一、一六三、〇九三
同四十四年	三〇八、〇〇〇	七〇、九七六	同九年	四六六、四〇〇	二六二、八二五
大正元年	三三三、七〇〇	九五、六三三	同十年	一、四七八、八〇〇	五二、三三七
同二年	三三六、七〇〇	一〇三、六五九	同十一年	三、三三三、一〇〇	一、六八八、一〇〇
同三年	二〇六、八〇〇	五七、八八九	同十二年	四、五五三、〇〇〇	二、五一一、〇三九
同四年	五九九、九〇〇	一五九、〇七五	同十三年	五六、五〇〇	四〇六、六六六
同五年	三五一、六〇〇	一〇六、六〇八	同十四年	二、四三三、五〇〇	一、七六〇、七三三
同六年	三五八、三〇〇	一三三、八〇三	昭和十五年		

同七年

五三三、〇〇〇

三七、一七

打

綿

年次	數量	價額	年次	數量	價額
明治四十三年	一一、一〇六	二九〇、六七	大正八年	三二、二五四	一、七四三、〇三八
同四十四年	一四、六三三	三九八、一八八	同九年	一四、一三〇	一、〇六六、四七三
大正元年	一九、六四八	五八六、八六六	同十年	二九、六六九	一、七六八、六六四
同二年	一九、一七五	六〇七、三五八	同十一年	三〇、六六五	一、九四一、六七七
同三年	一五、六〇六	四七九、四三三	同十二年	三二、二九七	一、九四九、五四一
同四年	一八、六五四	五二五、四六四	同十三年	二六、〇二七	一、九四八、〇九一
同五年	一九、三三七	六〇〇、八六二	同十四年	二九、四七七	二、〇八五、五三四
同六年	一四、〇五六	七〇、六七八	昭和十五年		
同七年	一六、六七五	一、三三、四六一			

藁

吹

年次	數量	價額	年次	數量	價額
明治四十三年	六、三三七、〇八八	七〇七、九四九	大正元年	四、四三三、五七三	四九二、〇七
同四十四年	四、七三三、九七五	五三〇、六一〇	同二年	五、六四四、六〇八	五六二、二五一

第六章 農産物

朝鮮の物産

年次	数量	金額	年次	数量	金額
大正三年	六、四七、一九〇	七、五、七、七八	大正十年	三、四〇、八四〇	八、七、一、七〇
同四年	七、三三、三三八	七、九、六、二五	同十一年	一、三九、一、六六	三、九、二、九六
同五年	五、七五、七三三	六、四、八、九七	同十二年	五、四、二、五三	一、五、三、七三
同六年	五、八〇、六四四	七、一、三、四〇	同十三年	四、七、四、六三	一、六、七、四六
同七年	三、四三、七六六	六、七、二、〇〇	同十四年	四、〇、三、四四	一、二、九、五三
同八年	五、九四、四八三	一、四、八、五、五三	昭和十五年		
同九年	二、九八、三三〇	一、〇〇、一、三三七	昭和十六年		
明治四十三年	七、四〇、七、五三	三、八、三、三三	大正八年	七、八、三、二二	四、五、四、三二
同四十四年	六、五五、六二八	一、九、三、三六	同九年	四、七、五、六三〇	三、九、五、二二
大正元年	七、九三、六九二	?	同十年	四、八、九、七五	二、六、二、六九
同二年	八、五八、三三七	二、六、二、九四	同十一年	五、一、七、九三九	二、九、一、二四
同三年	一〇、八四、七、七三	三、五、五、六三	同十二年	四、七、〇、三、八九三	二、六、〇、〇八
同四年	一〇、四一、一、七元	三、五、五、五元	同十三年	五、一、五、三、四一七	二、八、二、五五七
同五年	一	二、九、六、七五	同十四年	六、三、五、八、四四	三、四、三、三〇〇
同六年	一	二、七、一、〇七	昭和十五年		
同七年	一	二、五、九、九六	昭和十六年		

第七章 林産物

第一節 主要林産品

朝鮮の總面積は一萬四千三百二十方里にして、内林野面積約一萬二百一十一方里、約一千五百八十八萬町歩を算し、實に總面積の七割一分を掩有して居る。而して朝鮮の林業上の位置は、これを植物地帯上より水平的に觀察するときは、その大部分即ち北緯三十五度乃至四十一度に亘る區域は、溫帯林に屬し、アカマツ・ビヤクシン、テウセンマツ、テウセンモミ、コノテカシハ、エノキ類、ナラ類、ケヤキ、クヌギ、アベマキ、クリ類、トネリコ類、サクラ類、白楊類、シデ類、ニレ類、カヘデ類、ハンノキ類、ハリギリ等を産し、その北方鴨綠、豆滿兩江上流地帯は寒帯林にして、タウヒ類、タウシラベ類、カラマツ類、カンバ類、ヤマナラシ類、ドロノキ類、クルミ類、ナラ類等を産し、北緯三十五度以南は暖帯林にして、濟州島、莞島、大黒山群島の森林はこれに屬し、クロマツ、アカマツ、カヤ、カシ類、シヒ、アキニレ、エノキ、ムクエノキ、ツバキ、コナラ、シデ類、タブ、クス類等を産する。若し夫れ垂直的に觀察するときには濟州島漢翠山には暖帯、溫帯、寒帯林の森林景を、また智異山脈、金剛山脈には溫帯寒帯林の森林景を併備して居る。然るに古來林政不備にして、封山の如き特殊の保護林を除くの外は、公山と稱し一般人民の

自由樵採に委して顧みなかつた結果、到る處濫伐を肆にし、或は火田を起し、或は急斜地を開墾し、その大部分は荒廢に歸して、僅に陵園墓附屬の地、及び鴨綠、豆滿兩江の流域等に於て見るべき林相を保つて居るに過ぎない。斯くの如き森林の荒廢が、産業の發達を妨げ、國土の保安を害することは實に甚だしきを以て、舊韓國政府は明治四十一年一月森林法を發布し、一般山野の保護整理増殖を圖り、盛んに殖林を獎勵し、次いで同四十四年六月總督府は新に森林令を布き、從來の森林法を廢して、國土の保安、危害の防止、水源の涵養、公衆衛生、及び魚附又は風致上、必要ありと認むるものは之れを保安林に編入して自由の施業を爲すことを得ざらしめ、また永年禁養林讓與の途を開き以て愛林の美風を助長するに努め、或は造林貸付の制度を設けて造林事業促進の策を講じて居る。その結果、明治四十三年度末には、成林地五百十二萬町歩、稚樹發生地六百六十二萬町歩、未立木地四百十五萬町歩であつたものが、大正十三年度末には左の如くなつて居る。

林相別面積表 (大正十三年度末)

道名	林相別			合計	全面積に對する割合
	成林地	稚樹發生地	無立木地		
京畿道	三七, 千町	四二五, 千町	六三, 千町	七五, 千町	五・五割
忠北清道	九	三九六	一三	五三	七・一割
平安南道	二四三	六二	九	九六	六・〇割
平安北道	八九	一〇八五	四三	一二二七	八・四割
江原道	六七	九〇	二七	一八四	七・二割
咸鏡南道	一, 四六	五三	五五	一, 五五	七・九割
咸鏡北道	八〇	三〇	四〇	一五〇	七・九割
合 計	五, 四六三	七, 三六五	三, 二六	一五, 八八三	七・一割

即ち朝鮮林野の現況を見るに、その總面積は約一千五百八十八萬町歩に達するが、成林地(疎生又は散生地を含む)は僅に三分の一約五百四十八萬町歩に過ぎず、その内約三百六十八萬町歩は國有林に屬し、鴨綠江及び豆滿江の兩流域又は脊梁山脈に偏在し、交通運搬不便にして大半未利用林の状態を呈し、その他の約一千四十萬町歩の内には約三分の二約七百二十八萬町歩の稚樹發生地があるけれども、その大部分は地力衰退減耗して充分の生育を期待し難く、殘地三百一十一萬町歩は全く生産に與らざる未立木地又は荒廢地に屬して居る。試みにこれを所有別に表示すれば左の通りである。

所有別林相表

林況	國有林		民有林(及び將來民有たるべき林野)		合計
	成林地	稚樹發生地	成林地	稚樹發生地	
成林地	三, 六八〇, 千町	一, 八〇二, 千町	一, 八〇二, 千町	五, 四八二, 千町	七, 二八五, 千町
稚樹發生地	一, 〇九〇, 千町	六, 一九五, 千町	七, 二八五, 千町	一三, 四七五, 千町	一四, 五六五, 千町

無立木地	六六〇	二、四五六	三、一一六
計	五、四三〇	一〇、四五三	一五、八八三

由來半島の氣候は南北に於て差等あるを以て、北寒帯より南暖帯に到る迄各種の樹木を生じ、その分布も亦地方により同じからず、北部鴨綠江及び豆滿江の兩流域上流地方、その他の高山に於ては、タウヒ、テウセンカラマツ、テウセンハリモミ、タウシラベ、テウセンマツ、シラカンバ等を主とする鬱蒼たる樹林を形成し、中部より南部に亘り到る處に、アカマツ多く、またクロマツ、ナラ、クヌギ、ケヤキ、ハンノキ、クリ等を生じ、最南部に到れば、カシ、シヒ等の常緑樹及び竹木の存在するを見るが、概して森林樹木の種類に富み、樹數七百種の多きに達し、その中喬木に屬するもの針葉樹十九種、闊葉樹百三十六種、外に竹類三種あり。試みに朝鮮總督府林業試驗場の發表に係る、朝鮮産主要樹木分布狀況調査書に基き、樹木名及び分布狀況を見ると左の如くなつて居る。

朝鮮産主要樹木分布表 (本府林業試驗場發行林業試驗場時報第五號に據り本表を作成す)

樹木名	分布	狀況
イ	チ	キ
カ	ヤ	
ア	マ	ツ
マン	シ	ウ
ク	ロ	マ
テ	ウ	セン
エ	ゾ	マ
テ	ウ	セン
サ	イ	シ
タ	ウ	シ
ビ	ヤ	ク

全羅南道漢拿山より、咸鏡北道長白山に至る各地の高山及鬱陵島に分布し、江原道金剛山附近に最も多し。
 全羅南道漢拿山より、全羅北道白羊山に至る各地に分布し、濟州島に最も多く、白羊山に於ては自生状態なし大木あり。
 咸鏡北道白頭山地方の高原地帯を除く外各地の山野に廣く分布し、樹木の大部分を占領するも、北部に進むに従ひ其の數を減じ奥地に至れば僅に村落附近に點々散生せるを見るのみなり。
 平安南道孟山郡孟山面堂浦里孔子廟構内に在り、傳説に由れば二百年前山東省より苗木を移植せりと、面積約十四町歩の純林にして生長旺盛なり。朝鮮にては未だ本所以外には其の分布を見せず。
 全羅南道漢拿山より東海岸に在りては江原道蔚珍、西海岸に在りては京畿道水原郡松山面に至る各島嶼及海岸地帯に分布す。南海岸に在りては釜山より蔚珍に至る海岸に沿ひ、山脈を界として恰も帶狀をなし、北進するに伴ひ、幅狭まり慶北盈徳邊に至れば殆ど絶ゆる。西海岸に在りては木浦より水原に至る海岸に沿ひ、所々飛離れて部分的に生じ、珍島に在りては純林をなす所多きも大木は稀なり。
 全羅北道智異山より咸鏡北道車輪山に至る各地の山野に廣く産し、江原道金剛山に多く純林狀を呈し、鴨綠江上流地方に在りては他の樹種と混淆して大木あり。
 江原道金剛山より咸鏡北道車輪山に至る各高山に分布し、白頭山高原に最も多く純林を形成す。
 全羅北道智異山より咸鏡北道車輪山に至る各高山に分布し、咸鏡北道小白山附近に最も多し。
 咸鏡南道厚峙嶺より咸鏡北道白頭山に至る間に分布し、其の數多からず。
 全羅北道智異山より咸鏡北道松真山に至る各地に分布し中部五臺山附近に大木多し。
 全羅南道漢拿山より全羅北道徳裕山に至る間に分布し、漢拿山に最も多し。
 全羅北道智異山より咸鏡北道車輪山に至る間に分布し、小白山附近に最も多し。
 全羅南道黒山島より平安北道定州に至る各地に分布し、鬱陵島に最も多し。

- マ ダ ケ 全羅南道濟州島より西海岸に在りては忠清南道瑞山、東海岸に在りては江原道高城、内陸に在りては忠清北道沃川に至る各地に分布し、南より北に、平野より山間に進むに従ひ分布稀薄となれり。
- ハ チ ク 慶尙南道南海より東海岸に在りては慶尙北道盈徳、西海岸に在りては京畿道水原郡南陽、内陸に在りては慶尙北道尙州に至る各地に分布す、本種はマダケに反し南より北、平野部より山間部に多く分布す。
- ヤ タ ケ 全羅南道漢拏山より西海岸に在りては黃海道長淵郡、東海岸に在りては江原道高城、内陸に在りては慶尙北道金泉に至る各地及び黒山島、鬱陵島に廣く分布す。本竹は從來軍用として獎勵したる結果最も廣く栽培せらる。
- コウライヤナギ 白頭山地方の高原を除く以南は全羅南道濟州島より北は咸鏡北道穩城に至る各地に分布し、中部地方に最も多し。
- コウライシダレヤナギ 全羅南道無等山より咸鏡北道穩城に至る各地に分布し、中部地方に最も多し。
- エゾヤナギ 慶尙北道日月山より咸鏡北道穩城に至る間に分布し、金剛山附近、大同江、鴨綠江、豆滿江の流域に最も多く純林をなす處あり。
- テウセンヤマナラシ 慶尙南道加智山より咸鏡北道穩城に至る各地に分布し、小白山附近に最も多し。
- ドロノキ 江原道雪岳山より咸鏡北道甑山に至る各地に分布し、長白山附近に最も多し。
- テリハノドロノキ 全羅南道大苞山より咸鏡北道萬塔山に至る各地に分布し、中部に最も多し。
- ケシヤウヤナギ 朝鮮の特産にして、平安北道小白山より咸鏡北道松眞山に至る各地に分布し、萬塔山附近に最も多し、但し白頭山高原には産せず。
- マンシウグルミ 慶尙北道慶山より咸鏡北道甑山に至る各地に分布し、咸鏡南道泗水山附近に最も多し。
- サハシバ 全羅南道漢拏山より咸鏡北道長白山に至る各地に分布し、南部に最も多く、中部は普通にして、北部長白山附近には稀なり。
- イヌシデ 全羅南道漢拏山より慶尙南道加智山に至る間に分布し、南原、長水附近に多し。

- ア カ シ デ 全羅南道漢拏山より江原道金剛山に至る各地に分布し、漢拏山及智異山附近に最も多し。
- エゾノタケカンバ 全羅南道漢拏山より咸鏡北道松眞山に至る各地高山に分布し、長白山附近に最も多し。
- ヲノヲレカンバ 全羅南道智異山より咸鏡北道松眞山に至る各地に分布し、雪岳山、妙香山附近に最も多し。
- コヲノヲレカンバ 慶尙南道加智山より咸鏡北道甑山に至る各地に分布し、五臺山附近に多し。
- テウセンミネバリ 全羅北道智異山より咸鏡北道松眞山に至る各山地に分布し、鷲峯附近に多し。
- シベリアハンノキ 全羅北道智異山より咸鏡北道七寶山に至る各地に分布し、智異山に最も多く大木あり。
- ハンノキ 全羅南道大苞山より咸鏡北道松眞山に至る各地に分布し、中部地方に最も多し。
- テウセンダリ 全羅南道漢拏山より平安北道飛來峯に至る各地に産し、京畿道揚州附近に最も多し。
- シナダリ 黃海江長壽山より平安北道飛來峯に至る各地に分布し、平安南道江西附近に最も多し。
- シヒノキ 全羅南道漢拏山より全羅北道於青島に至る間に分布し、濟州島に最も多し。
- アカガシ 全羅南道濟州島より全羅北道於青島に至る間に分布し、濟州島に最も多し。
- クヌギ 全羅南道漢拏山より咸鏡南道泗水山に至る各地に分布し、中部地方に最も多し。
- アベマキ 全羅南道莞島より平安北道妙香山に至る各地に分布し、南部、中部に最も多し。
- モンゴリナラ 全羅南道大苞山より咸鏡北道甑山に至る各地に分布し、北部に最も多し。

- ミヅナラ 全羅南道漢拏山より全羅北道智異山に至る各地に分布し、漢拏山に最も多く、智異山附近には稀なり。
- カシハラ 全羅南道漢拏山より咸鏡北道甑山に至る各地に分布し、黃海道に最も多く、大木稀なり。
- コナラ 全羅南道漢拏山より咸鏡北道七寶山に至る各地に分布し、金剛山附近に最も多く大木あり。
- ナラガシハラ 全羅南道大苞山より咸鏡北道萬塔山に至る各地に分布し、中部地方に最も多し。
- ノニレ 平安北道妙香山より咸鏡北道甑山に至る各地に分布す。
- ハルニレ 全羅南道大苞山より咸鏡北道車輪山に至る各地に廣く分布す。
- ハリゲヤキ 全羅南道無等山より平安北道飛來峯に至る各地に分布し、南部地方に最も多し。
- ケヤキ 全羅南道漢拏山より平安南道海州に至る各地に分布し、南部に最も多く北部に進むに従ひ漸次其の数を減ず。
- エノキ 全羅南道漢拏山より咸鏡北道七寶山に至る各地に分布し、全羅、慶尙道に最も多く大木あり。
- タウナナカマド 慶尙南道加智山より咸鏡北道甑山に至る各山地に分布し、北部に最も多く、大木稀なり。
- エゾノウハミヅクラ 全羅南道漢拏山より咸鏡北道甑山に至る各地に分布し北部に最も多し。
- ヤマザクラ 全羅南道漢拏山より咸鏡北道七寶山に至る各地に分布し、中部に最も多く京畿道牛耳洞は其の名所として知らる。
- テウセンキハダ 全羅南道莞島より平安北道飛來峯に至る各地に分布し、江原道金剛山附近に最も多し。
- ミヤマハギ 全羅南道大苞山より咸鏡北道甑山に至る各地に分布し、北部の高山に最も多し。

- テウセンヤマハギ 全羅南道漢拏山より咸鏡北道甑山に至る各地に分布し、中部地方に最も多し。
- テウセンサイカチ 朝鮮の特産にして、全羅南道大苞山より平安北道飛來峯に至る各地に分布し、長壽山に最も多し。
- カライヌエンジュ 全羅南道大苞山より咸鏡北道甑山に至る各地に分布す。
- エンジュ 全羅南道無等山より咸鏡北道萬塔山に至る各地に分布し、慶尙南北道に最も多し。
- キハダ 全羅南道漢拏山より咸鏡北道甑山に至る各地に分布し、北部に最も多し。
- テロセンゴシユ 全羅南道無等山より黃海道長壽山に至る各地に分布し、南部に最も多し。
- シシユ 慶尙南道南海より黃海道長壽山に至る間に分布し、黃海道に多し。
- チヤンチン 全羅南道漢拏山より咸鏡北道萬塔山に至る間に分布し、黃海道に多し。
- テロセンヒメツゲ 全羅南道漢拏山より平安北道妙香山に至る各地に分布し、咸鏡南道文川及び江原道平康郡后坪里附近に最も多く大木あり。
- ウルシ 全羅南道德裕山より平安北道避難德山に至る各地に分布し、平安北道泰川は其の名産地なり。
- マンシウカヘテ 全羅北道智異山より咸鏡北道長白山に至る間に分布し、北部に最も多し。
- オニメグスリ 全羅南道白羊山より咸鏡北道長白山に至る各地に分布し、中部地方は普通なり。
- タウハウチハカヘテ 全羅南道大苞山より咸鏡北道車輪山に至る各地に廣く分布す。
- イタヤカヘテ 全羅南道漢拏山より咸鏡北道甑山に至る各地に廣く分布し、北部に最も多し。

カラコギカヘデ 全羅南道無等山より咸鏡北道甑山に至る各地に分布し、中部地方に最も多し。
 アムウルシナノキ 全羅北道徳裕山より咸鏡北道甑山に至る各地に分布し、北部に最も多し。
 ツバキ 全羅南道濟州島より西海岸に在りては全羅北道沃溝郡於青島、東側に在りては慶尙北道鬱陵島に至る間に分布し、全羅南道特に黒山島に最も多し。
 ハリギリ 全羅南道漢拿山より咸鏡北道長白山に至る各地に分布し、中部に多し。
 ミヅギ 全羅南道漢拿山より咸鏡北道長白山に至る間に分布し、咸鏡南道泗水山附近に最も多し。
 ヤチダモ 全羅南道大范山より咸鏡北道甑山に至る各地に分布し、雪岳山附近に最も多し。
 テウセントネリコ 全羅南道大范山より咸鏡北道甑山に至る各地に分布し、雪岳山附近に最も多し。
 シナギリ 南部の海岸より西海岸に在りては黄海道殷栗、東海岸に在りては咸鏡南道端川に至る各地に分布し、慶尙南道に最も多し。

朝鮮に於ける林業の大勢を叙述し、また主要樹木の分布状況を明かにしたから、以下少しく主要林産品に就いて説明して見やう。

木材

朝鮮に於ける林野面積は約一千五百餘萬町歩に達するが、多年濫伐せられたる結果、その大部分は荒廢し、只鴨綠、豆滿兩江の流域等に於て見るに足るべき林相を保つて居るに過ぎない。總督府に於ては兩江

流域地方森林經營の爲め營林廠を設けて之に當らしめたが、大正十五年に至り營林署(主として營林廠の事業に於て引繼ぎ經營してゐる)を設置するに至つた。元營林廠の所管林野面積は約二百一十一萬町歩あり、その中成林地は凡そ八割四分にして、主に寒帶樹種を以て蔽はれ、全面積に對して針葉樹約七割、闊葉樹約三割を占めて居る。目下廠材として利用する、主なる樹種は針葉樹にして、紅松、杉松及び落葉松の三種、闊葉樹にてはテウセンヤマナラシ、シナノキ類、ドロノキ類等である。今最近の見込に係る主要樹種の材積を表示すると左の如くである。

成林地材積

種別	鴨綠江流域 万尺積	豆滿江流域 万尺積	合計 万尺積
針葉樹			
紅松	三、五九八	三〇	三、六二八
杉松	一、三三三	五、六三三	二、八八五
落葉松	九、一一二	一、一〇四	一、一七六
闊葉樹	二、四六五	四、四一八	二、九一〇
合計	六、〇六八	二、二一四	八、二八二

鴨綠江流域に在りては咸南甲山、三水、長津、平北厚昌、慈城、江界の各郡内、豆滿江流域に在りては茂山郡内の森林より主としてテウセンカラマツ、テウセンマツ、タウヒ、タウシラベ、テウセンハリモミ

等の丸材、角材、電柱、丸太、小丸太、鴨綠江流域よりはテウセンヤマナラシ、ドロノキ類、シナノキ類を伐採する。此等の伐採は秋冬の兩季節に行はれ、運材は一部は輕鐵に依り、大部は冬季地上の積雪及び結氷を利用して牛曳、木馬、修羅等に依りて江岸に搬出し、流筏は通例五月より開始するも、六月より九月に至る四箇月の間は最も盛んにして、十月下旬に止む。水流急速にして作業の困難なる上流にては内地人筏夫を使用し、流勢緩なる下流にては主に朝鮮人筏夫を使役し、少數の内地人筏夫にこれを監督せしめて居る。

伐木、運材、及び著筏三年對照

年	伐木	運材	著筏
大正十二年度	四五四、六九四 <small>尺餘</small>	六〇五、八九一 <small>尺餘</small>	三五二、七六 <small>尺餘</small>
同 十三年度	四九四、六九一	六八、六四六	四四三、四七一
同 十四年度	六四四、三三三	八五九、七二四	四九八、一〇五

製材は第一、第二の二工場に於て、各種建築用材、函材等を製作し、大正六年度に製材法に一大改善を加へて以來、著しく製材歩留及び製材能力を増進し、一日の製材能力約五百三十尺縮となつた。

製材及び資材

年	製材	資材	歩合
大正十二年度	一九三、九〇〇 <small>尺餘</small>	三〇九、一九四 <small>尺餘</small>	六三%
同 十三年度	一八八、二四九	三〇二、二九五	六二
同 十四年度	一九一、〇二九	三三四、九九五	五七

歐洲戰爭以來一般財界の好況は、諸事業の勃興と共に建築界未曾有の活況を呈し、加ふるに朝鮮二個師團増設用材、及び土木部用材の大部分は廠材を使用せる結果、枕木、板類、その他木材の需要益々増加し、廠材の生産力を以てこれが需要を満足せしむることは出来なかつたが、近時財界不況の影響を受けその需要は減退した。立木拂下出願及びその拂下許可に關しては、歐洲戰爭後一般に木材の需要激増し、従つて立木の拂下を出願する者も亦頓に増加した。然しながら一面廠直營の事業力、輸送力、勞力等の關係上拂下出願の全部を許可し難き事情あるを以て、鮮外は勿論、鮮内に於ける需要の出願と雖も慎重なる調査を行ひ、これが拂下許可を爲して來たが、近時財界不況の影響を蒙り此等の出願も漸次減少して居る。

木製品

朝鮮に於ける木工品中主要なるものを木器とし、全羅北道南原及び江原道麟蹄地方はその産地として著名である。南原の木器は智異山より出づるもので、隣接慶尙南道内に於て製作せらるゝものが、その大部分を占むるけれども、製品の多くは南原に出づるを以て特に南原の木器と稱せられて居る。

南原の木器は、今やその生産額一箇年二萬圓に達し、この地方山間部落に於ける重要な生業である。今その種類を示すと、

- (一) 鉢 孟 一名雲峰碗と稱し、髹漆を施せる椀様のものにして五個乃至十個を一組とす。従來僧侶の食器に使用せられたるものなるも、近來一般家庭に於て菓子器等に需用せらる。用材には「ヤマハンノキ」、「カヘテ」類等を用ふ。
- (二) 祭器 葬祭に用ひらるゝ食器にして、髹漆を施せるもの多く壺盃共三十二個を一組とす。「エゴノキ」、「カンバ」、「カヘテ」等多種の潤葉樹を用ひ製作せらる。
- (三) 食桶 朝鮮在來の飯櫃にして用材は祭器に同じ。
- (四) 盤上器 食器にして七個を一組となす。用材は祭器に同じ。
- (五) 饌盒 菓子容器にして二個乃至數個を重ね合せたるものを一組となす。用材は祭器に同じ。
- (六) 灰板 灰落にして圓盆の中央部に凸起を有せるものなり。用材は祭器に同じ。
- (七) 木履 朝鮮人専用の下駄にして用材は「ハンノキ」、「ヤチダモ」等を用ふ。
- (八) 小軍 尿樽にして竹を以て箍を嵌め、胴の中央部に孔を穿ちたるものなり。用材は主として「モミ」類その他の針葉樹を使用す。
- (九) 瓢子 一方に柄を有し水等の汲取に使用せらる。用材は「ヤマハンノキ」及び「アカマツ」等を用ふ。
- (十) 杓子 「ヤチダモ」を用ふ。
- (十一) 水桶及び負桶 水桶にして用材は小軍に同じ。
- (十二) 函 朴 米浙ぎに用ふる器具にして、内面に深き二分位の螺旋狀の溝を刻めり。用材は祭器に同じ。
- (十三) 洗濯棒 洗濯に使用する叩き棒にして、用材は専ら「ヲノチレカンバ」を使用す。
- (十四) 枯 砧に使用する叩き棒にして、用材は洗濯棒に同じ。

以上は用材の重なるものを列記せるに過ぎず、この外智異山に産する諸種の樹木にして加工容易なるものは殆んど使用せられざるものなく、總督府施政前に於ては智異山に於ける用材の伐採は極めて自由なりしも、大正元年東京、京都及び九州三大學の演習林を本山に設置せられ、これが取締嚴重となるに従ひ、また往時の如く自由に伐採する能はず、現在に於ては大學より拂下を受くることとなり、稀には寺有林中より用材を仰ぐものもある。

江原道麟蹄は漢江の一水源に當り水運の便あるが爲め、木材は原木の儘京城方面に流筏利用せられ、その「アカマツ」材は長幹良材を以て有名である。古くより木器の製作行はれ、製品は廣く鮮内各地に供給されて居る。その産額は近年國有林の取締嚴重なるに伴ひ多少減少の傾向あるも、年産約四萬個、價額一萬餘圓を下らないやうである。麟蹄に於ける木器の種類は南原に於ける木器と異なり、原始的の器具類を主とし、その種類は、

- (一) 齒南朴 徑一尺乃至一尺五寸、深き四寸乃至六寸にして、内面に螺旋形の溝を存し、主として米浙用に使用せらる。
- (二) 南朴 大き及び形狀齒南朴に同じきも、内面に溝齒を有せず。用途は前記齒南朴に同じ。
- (三) 白骨朴 徑一尺五寸乃至二尺、深き一尺乃至一尺五寸、主に米の容器又は洗濯用に使用せらる。

- (四) 民斗里 徑一尺五寸乃至二尺五寸、深さ一尺二寸乃至一尺五寸、主として米の容器又は織糸の糊付用に供せらる。
- (五) 咸之朴 一名龍太朴とも稱し、徑一尺二寸乃至二尺、深さ五寸乃至一尺、主として牛馬飼桶に使用せらる。
- (六) 斗加里 徑五寸、深さ三寸主として汁腕に使用せらる。
- (七) 西斗里 大き及び形状は白骨朴と略ぼ同様なるが、製作に當り轆轤を使用せず、主として洗濯用として使用せらるゝも、大形のものには沐浴にも亦これを使用す。

- (八) 剪菜朴 口徑一尺二寸、深さ五寸乃至一尺にして、牛馬の飼桶又は容器に使用せらる。
- (九) 九朴 徑七寸深さ五寸一方に柄を有す。主として牛馬の飼料を糞釜より掬取る場合に用ひらる。
- (十) 小盤 擗物の膳にして臺の形状は普通圓形をなし、徑一尺二寸、高さ一尺五寸とす。
- (十一) 五盒 五重の鉢にして最大なるものは徑九寸深さ七寸、最小なるものは徑五寸深さ三寸とす。大小に應じ菓子器、飯器洗濯物入又は漬物用等各種の容器に使用せらる。
- (十二) 祭器 小盤、酒盃、盞臺、盞盤等祭時に於ける飲食物の容器なり。
- (十三) 粥柳 杓子
- (十四) 木履 鮮人用の下駄
- (十五) 飾遠里 南朴に似て底に小孔を有し、酒類、醬油等を醸造する際漏斗用に供せらる。
- (十六) 鼎 釜 釜の蓋
- (十七) 道 每 鍋の蓋

各種の器物は「アカマツ」、「トネリコ」、「ハリギリ」、「シナノキ」、「カヘデ」、「ヤマナラシ」等を以て製作される。これ等の樹種はこの附近の國有林に於ける主要樹種にして、總督府施政以前に在りては、自

由に入山伐採して各種の器具に製作せられしも、近來取締が嚴重となつたので、漸く正規の手續を経て拂下を受くるに至つた。鱗蹄に於ける木器の製作に従事するものは、大抵專業者にして、農家の副業として製作するものは殆んど稀である。彼等專業者は終年山中に在りて、製作に従事し、木器の販賣業者より資金の供給を受け、山中適當の場所に轆轤臺を据付け、必要に依り人夫を雇入れて、伐木より荒削までの作業に當らしめ、自ら荒物を轆轤にかけ仕上を爲し、製品は一定の價格を以て資本主に提供する。これを要するに鱗蹄に於ける木器の製作は、彼等永年の製作法を襲踏し毫も改良進歩の跡なく、従つて其の製品も南原の木器に比して遜色がある。

桐

朝鮮に於ける桐の分布狀況は、氣候の關係上南鮮地方に濃密にして、北に進むに従つて漸次粗となり、平安南北道及び咸鏡北道を除く他の各道に跨つてゐる。就中分布の濃密なるは京仁、京釜、湖南線等の鐵道沿線で、海拔高き山間部に入つては殆んどその影を留めない。元來桐は溫暖兩帶を郷土とするが故に、攝氏零下二十五度以下の寒冷地にては造林成功の見込なく、現在の分布區域を以て略ぼ桐の造林區域とすべきであらう。最近の調査に依ると朝鮮に於ける桐の總立木本數は約百萬本で、その内利用期に達したも

のは二十有餘萬本である。桐材の需給関係を見るに、大體に於て鮮内の生産はその需要を充たし、年々内地へ移出するものも相當の數量に達して居る。桐材の大部分は内地人の製品に消費せられ、鮮人向として消費さるゝは極めて少量であるから、現在の需給関係より見るときは、縱令今後の消費量多少増加するとも、當分の間生産不足を告ぐるが如きことはあるまい。然しながら内地に於ける桐材は非常に不足し、毎年支那方面よりの輸入が少くないから、單に内地の不足を補ふ點より見るも、朝鮮に於ける桐材の造林は前途有望で、相當奨励する必要がある。

桐はその用途頗る廣く、細根は苗木を仕立つるに用ひ、細枝は木炭となして、畫筆用、火藥の原料、染料、磨用料と爲し、種子及び樹皮は藥料とし、葉も亦藥料となり、殆ど利用し得ざる部分なく、材は總ての工作に對し容易なるを以て、その用途甚だ廣きも、現在朝鮮に於ける桐の利用状況は、殆んど材の利用に止まり、その他に至りては未だ利用の域に達して居ない。桐材としての用途は、下駄、箆筒、火鉢、浮子、箱類、琴、机等に用ひらるゝもの大部分を占め最近の生産總額七十餘萬圓に上つて居る。

朝鮮に於ける桐の造林は、往古は固よりこれを詳かにすることが出来ないが、日露戰爭後内地人の移住漸増に伴ひ、最初は内地苗木を移入して、その屋敷の空地に少數の試植をなし、その後次第に増植して今日に至つた關係より、斯業従事者は内地人が多い。さればその造林方法の如きも内地に於ける方法と大同

小異であつて、地方に依り多少の差はあるが、概して手入が行届かぬものが多い。桐はその植栽容易にして、生育頗る速く、造林費割安なるに反して材價高きを以て、収益の多きことは他の樹木と同一の比でない。殊に宅地畦畔等の閑地を利用して植ゆるときは、十年を出でずして意外の収益を擧げ得る特長があり、一般林業と異り収益を擧ぐることに早きを以て、桐の造林は農家に於ける好個の副業である。

檀 木

檀木とは和名「ヲノヲレカンバ」にして、朝鮮に於ては通常「박달나무」と呼ばれて居るものである。植物學上では樺木科「カバ」屬に屬し、落葉喬木であり、樹皮は帶緑赭黒色にして鱗狀をなし、葉は卵形にして尖り、材質は極めて堅緻である。本樹は平安南北道、咸鏡南北道、江原道の脊梁山脈中に多く、更に南下して智異山に迄及んで居り、他のカバ類、ナラ類等の潤葉樹と混生するを普通とするも、稀には純林狀をなして居る所もある。鮮内に於て最も蓄積の豊富なるは平北熙川、寧邊方面である。内地では普通盆、木硯、傘柄、杖、梭、杼等、小器具材に利用され、朝鮮に於ける如く甚だしくその材を重要視せぬ。これは内地に於てはカシ、ケヤキ等の堅材が多く、檀木の蓄積量豊富ならざるに因るものと思はれる。朝鮮に於ける木材の用途は主に棒椎、舞麵棍、硯石、車輛、杆、櫛、靴型等である。木材は古くより支那人

に依り鴨綠江岸の各地より對岸支那へ輸出されたが、多量の輸出を見るに至つたのは最近のことである。輸出材としては軸子及び王子の二種に區分することが出來、軸子は車輛用材に、王子は車輛中輻材に使用される。朝鮮に於ては從來比較的木材の重用せられたるに拘らず、加工用具の發達せぬ關係上その用途が割合に狭少であつた。木材は將來有望なる樹種であるから、現在これを濫伐し、原木の儘で支那に輸出し、利益の大部分を彼等に壟斷せらるゝは、國家經濟上より見るも將又林政上より見るも、看過し難き状態なるを以て、大正十二年四月一日より檀木輸出取締に關する規則が發布さるゝに至つた。

煙 竹

朝鮮に産する煙竹には加工の方法に依り、漆塗、烙刻、着色の三種がある。漆塗は主として京城、及び慶尙南道、烙刻は京城、及び全羅南道、着色は慶尙南道より産するが、玆に全羅南道産烙竹の状況を少しく述べる。烙竹は全羅南道及び全羅北道に多産するが、加工地としては南原郡が最も著はれ、年産額五十萬本に達する。用材は全部苦竹及び矢竹の一年生竹を用ひ、根元徑三、四分、長七尺のものを、十月より翌年三月迄に伐採し、一本三尺四寸の長さに小切し、百本乃至五百本を一束として市場に出すのである。これを以て煙竹を製するには先づ原料を日光に晒し、充分水洗ひしたる後火に炙りて彎曲部を矯め、それ

を二尺八寸の長さに切詰め烙印を施すのである。製品は全部煙竹業者に販賣するのであるが、價格は百本當平均三圓乃至五圓である。

楮

朝鮮に於ては高麗朝時代既に製紙事業の發達せる事實あるを以て、その原料たる楮の栽培に關しては古き歴史を有する。而して現今各道共多少これが栽培を行ひつゝ、在るも、主として南鮮地方の山間部に多く、山麓の沃土又は涇流の堤塘等に粗放的に栽培される。従つて肥培管理不十分にして、樹枝の發育は良好でなく、纖維の品質も亦粗硬である。而して慶尙南道及び全羅北道は、全鮮中最もその栽培の盛んなる地方である。

漆

漆樹は朝鮮内何れの地方に於てもその生育に適し、栽培極めて容易なるのみならず、路傍畦畔又は河川沿岸等の空闲地を利用栽培し得るを以て、農家の副業として極めて有利の事業である。ところが朝鮮に於けるこれが栽培は美術工藝の衰微と共に漸く廢れ、現在に於ては往時美術工藝の隆盛なりし高麗朝時代の

遺物として、平安北道泰川、江原道原州、慶尙南道咸陽、咸鏡南道新興等の地方に於て、僅かに栽培せらるゝに過ぎず、消費量の過半は内地よりする支那漆の移入に俟つの現状である。然るに支那漆は偽交物を混入し品質甚だ粗悪なるを以て、優良なる漆器の製作に適しない。總督府中央試験所は大正五年慶尙南道咸陽に於て、翌六年江原道原州に於て採液法の試験と共に其の傳習を行ひたるも、希望者尠く充分の効果を擧ぐるに至らなかつたが、近年平安北道泰川に於て大阪の齋藤喜兵衛に依り、内地式採液法に依る採漆事業を開始せらるゝに及び、この地方では漸く發達の氣運に向ひ、地方廳に於ても亦大に指導獎勵に努めた結果、漸くその産額品質共に全鮮に冠たるに至つた。即ち泰川郡内に於ては漆樹は各面到處に生育するが、最も多きは東面にして、長林、江東、江西、南面これに亞ぐ。漆樹は概ね山麓、堤塘、畦畔、路傍、家屋の周圍等にして、山麓には所々赤松と混淆せる箇所あるも、山腹以上には絶対に生育するものなく、本郡は土地一般に肥沃なるが爲め、漆樹の生長旺盛にして一株より數本乃至十數本を萌芽せるもの尠からず、最大なるものは六、七年生にして胸高幹圍八寸高さ三間餘に達するものあり、孰れも甚しく密生し一坪五六本を下らない。漆樹の繁殖法は専ら分根分蘗に依りて行はれて來たが、現在は主として萌芽樹を伐採利用して居る。泰川産漆液の品質は漆酸の含量に於て、内地産漆液より稍少き感あるも、漆液を粘稠ならしむる護膜質の含量少く、加ふるに漆液に重要な乾燥性を與ふる含窒物の優位なる爲め、その品質

は殆んど内地産と異ならぬ。これを當業者の言に徴するに、透明の度に於ては内地産上等品に比し遜色なきも、光澤に於て少しく缺くる所ありと言ふ。泰川は至る所漆樹の生育に適し、古來漆樹栽培の素地あるを以て、地方廳に於てもこれが獎勵の必要を認め、漆樹の増殖と採漆事業の改良發達の爲め、特に補助金を下附して泰川漆組合を組織せしめ、また地方費苗圃に於て漆樹の養苗を行ひ苗木の供給を圖る等、専らその指導獎勵に努めつゝあるを以て、將來有利なる農家の副業として發達するに至るであらう。

木 炭

朝鮮に於ける木炭の種類には根炭、白炭、黒炭の三種あり、根炭はナラ、又はカシワ等の根株を掘起し製炭せるものにして、火持よく一般家庭にて歓迎せられ、黃海道及び平安南道地方は根炭の産地として名あり、白炭、黒炭はナラ、カシワ、その他の雜木を原料として製炭され、江原道地方をその主要産地とする。在來の製炭法は甚だ幼稚劣拙にして、優良なる製品を得難きのみならず製炭歩止甚だ少く、内地改良竈の小壺二割内外に比し僅かに八分乃至一割に過ぎない。製炭法の改良は將來朝鮮に於ける製炭事業の盛衰に影響する所が尠くない。左に黃海道に於ける根炭製造狀況と江原道に於ける白炭、黒炭の製造概況を述べて見る。根炭は黃海道各郡に産するも、最も多きは平山、瑞興、金川、鳳山の四郡である。製炭業の

經營には他人の山林を買収するものと、山主と利益を分配するものと二種ある。山代金は通例木炭仲買人より融通を受け、漸次製品を以て償却するを例とする。この方法は仲買人に於ては一方資金を高利に運轉し得るのみならず、製品を確實廉價に仕入れ得るの便あるも、製炭業者は必ずしも有利ではない。山主と利益を分配する焼分けの方法には、製炭業者の所有を二分の一乃至三分の一、場合に依り當事者間に於て契約するもの、如くにして、此の方法は製炭業者の爲めに有利なるも、近時餘り行はれぬ。炭窯は石窯にして山麓の斜面を掘下げて築くのであつて、窯の大きさには二俵(十貫)窯、三俵(十五貫)窯等あり、内地窯に比し甚だ小さい。これは原料掘採の關係に依るのである。原料たる根株の詰込及び焼木方法は略ぼ内地石窯に於ける製炭方法と同一である。原料の掘採は山地の荒廢を招く虞れあるを以て、近來地方廳にて取締を嚴にし、土地崩壞の虞なき傾斜緩なる個所に於てのみその採掘を許し、跡地は坪三四本の稚樹を残さしむることゝして居る。江原道は由來森林豊富にして、資材潤澤なる爲め、木炭の製産多く、製品は道内の消費に充つるのみならず、京城、元山、其他各地に供給して居る。朝鮮在來の製炭法は前述の如く幼稚にして製炭歩合少く、資材の消費量多きを以て、同道に於ては夙に製炭法改善の必要を認め、明治四十四年恩賜授産事業として春川郡西上面華岳山國有林内に製炭傳習所を設け、白炭、黒炭の改良製炭の傳習を開始した。爾來傳習を受けたるもの數百名の多きに達し、傳習終了者は道内各方面に發在して製

炭改良の實漸く舉らんとして居る。尙ほ製炭傳習所に於て製炭歩合實驗の結果は、白炭一割六分、黒炭二割の成績を擧げるに至つた。

椎 茸

朝鮮に於ける椎茸の栽培は、氣候、風土、資本等の關係に依り未だ一般に普及するに至らないが、全羅南道濟州島は椎茸の唯一の産地にして、近時相當の産額あり、將來副業としても有望なる事業である。濟州島は木浦を距る南方九十五海里に存する朝鮮最大の島嶼にして、椎茸の資木に富み古來より天然生椎茸を産し、明治三十八年藤田某東瀛社なるもの、設立を計畫して、翌三十九年より椎茸の栽培を試みたところ、結果良好にして前途有望なることを確めたので、明治四十三年韓國政府より資材の拂下を受け、本事業を組織的に開始した。爾來本業に着目するもの相次いで生じ、現在に於ては斯業を經營する者十數名の多きに達した。其の創業當初は、(一)事業に對する經驗乏しく、(二)事業の着實味を缺き、(三)支那に於ける日貨排斥の影響に依る椎茸相場の暴落等の原因の爲め、一時本事業をして悲境に陥らしめたが、其の後相場の回復と事業の堅實なる經營とは、將來極めて有望なる事業たることを確めらるゝに至つた。同島には椎茸資木豊富にして一定區域内に多數集團し、氣候溫暖適潤にして適當の天然笠木を有し、傾斜緩にして作

業の容易なると勞銀の低廉なる等、椎茸栽培上極めて有利なる條件を具備するが故に、堅實なる事業の經營方法を以て進まば、椎茸は同島物産として聲價を博するのみならず、朝鮮の移出品として重要な地位を占むるに至るであらう。同島に於ける椎茸資木は、その殆んど全部は「シデ」類を用ひて來たが、大正十年頃より「ナラ」類も亦資木として使用するに至つた。伐木は十月中旬より下旬頃に於て、樹葉の約三分の一紅葉し、樹液の甘味を帶ぶるに至りたる時を以て最良の伐期とし伐採せられる。椎茸の栽培は資木の豊富な關係上、概して事業粗放的にして、資木を伐採してその儘一箇月位乾燥し、枝條の皮部に小皺を生じたるを度として枝條を切拂ひ、鉋目を入れ、場所の乾燥度に應じて一尺乃至二尺の枕木を以て支持し、翌春二、三月頃枝條を以て笠木覆をなし、伐採後三年目の七、八月の候笠木の覆を除去するときは、其の年十月頃「走子」の發生を見るを得る。伐木後四年目の春茸を採取したる後、八、九月の候寢込資木の内、肉皮白色を帶び稍粘氣を帶び菌絲の充分蔓延せるものを選び、長さ三尺乃至五尺に小切し運搬する。長木作の儘のものは秋季驟雨を利用して打木を行ひ、楷寄せをなしたものはこれを約一晝夜水中に浸漬し、然る後木口に強打を加へ椎茸の發生を促進する。椎茸は伐木後四年目の春秋二季に最も多量に發生し、その後年を経るに従ひ漸次減少し、大抵六、七年に終り、稀には十年に及ぶものもある。茸の發生量は尺締當一斤内外を普通とするが、採取せる椎茸は大小に選別し、籠に擴げて二三時間日乾したる後、夕刻より室内に搬入し炭火を以て乾燥する。同島産椎茸は今や其の産額約一萬餘斤、價額三萬五千圓に及び、従前は長崎を経て上海、香港及び廣東地方に輸出せられたが、相場の關係上近來は主として大阪方面と取引が行はるゝに至つた。

栗

栗は従來果樹として栽培するよりも、寧ろ用材の目的を以て栽培され、栗實は派生的收穫の如くになつてゐるが、古くより全鮮各地産出を見ざる處なく、殊に京畿道、及び平安南道には集團地が少くない。就中楊州、始興、咸從、成川、順安、江西、龍岡等に産するものは著名で、一般に害蟲少く品質優良である。

栗は大別して楊州栗及び平壤栗の二種となすことが出來、平壤栗は元來咸從栗と稱せられしも、平壤に於て集まり取引される結果、その名を冠するに至つたものであつて、その形小さく澁皮容易に剝離し味頗る美味である。楊州栗は形大きく味は稍々平壤栗に劣つて居る。

生品は自家用を除くの外は最寄の市場に於て現金にて取引されるか、又は仲買人が農家を戸毎に巡廻して買纏め、問屋へ賣渡すものもある。平壤栗は前述の如くその味佳なるを以て頗る好評を博し、近來内地

方面への移出も亦尠くない。内地に於て支那栗と稱して販賣されて居るものには、この平壤栗が多く、その移出高は近來益々増加して居る。

松の實

松の實は、朝鮮五葉松の種實であつて、古來製菓料理用として、又は油を搾り香料として、朝鮮人、支那人間に最も歓迎せられ、冠婚葬祭、その他宴席等には必須の果實とされて居る。近來内地人間にも製菓用として多く利用せらるゝやうになつた。本品は朝鮮の特産品であり、需要も年々増加しつゝあるのであるから、母樹の保護を圖るは勿論本樹を増植して生産の増加を圖るの要がある。本樹は主として中部以北の山地に多生し、特に江原道金剛山麓一圓に亘り多く産出する。毬果は圓筒形で長さ四寸五分、長徑二寸五分位、種實は翅なく不正三角形をなし、長さ五分、幅三分五厘、一毬果に八、九十粒の種實を包んで居る。これを採取するには九、十月頃毬果成熟して自然に落下するを待ちて掻き集め、十數日間陽乾した後棒を以て叩き落すのである。斯くして得たる種實は尙ほ二三日乾燥して貯藏するのである。本品の取引は商人と直接取引をなすものもあるも、少量のものは最寄の市場に於て仲買人に賣却するを常とする。価格は年に依り地方に依つて一定せぬが、石當り五十圓内外より百圓内外に及ぶのである。

銀杏

銀杏は各道の官衙構内、社寺又は人家附近に栽植せられて居り、その巨大なるものには周圍四十八尺、樹の高さ三十間に達するものがある。種實は食用として珍重せられ朝鮮内の年産額は四百五十石位で、主産地は京畿道約百五十石、忠清南道約九十石、全羅北道約三十八石、忠清北道約三十六石等である。九、十月頃種實の成熟を待ち竿を以て打落し、これを一箇所に堆積した上に青草を覆ひ果肉を腐敗せしめた後水で洗滌し、肉を去つて充分乾燥したものを貯藏するのである。

銀杏は大抵地元で消費せらるゝが、一部は京城その他の市場に供給されて居る。価格は産地とか豊凶につれて一定して居ないが、京城では石當り五十圓内外である。

山人蔘

山人蔘は山蔘とも稱し、支那、朝鮮に於ては古來靈藥として珍重せられ、その價格も極めて高いのである。山人蔘の産地は平安北道を主とし、平安南道、咸鏡南道よりも産するが、特に鴨綠江に面する平安北道慈城、厚昌、江界の三郡よりは多く産出する。生地は人跡稀れなる深山幽谷の腐植性に富める壤土地

で、針濶混濬林内に最も多く、濶葉樹林これに亞ぎ、針葉樹林には産しない。山蔘採取季節は地方に依り多少の差異あるも、通例七月下旬より九月中旬に至る夏季六十日間である。この期間は莖葉既に發育して固有の形態を示し、花莖を長く抽出してその頂に數箇の果實を簇生し、果實は八月中旬になれば成熟して珊瑚珠の如き紅朱色を呈し、その葉も一種特有の黃褐色を帯びて來るから、發見が極めて容易である。これに反し七月以前は發育不充分であり、九月以後は莖葉凋落して發見困難である。採取早きに過ぐるときは組織軟弱にして調製保存に適せぬのみならず、有效成分に乏しく、また遲きに失するときは硬化して粗惡となり品質を大に損する。山蔘の採取は普通隊伍を組み入山するを普通とするが、江界、慈城方面では支那人より資金を借り受け採蔘をなす者もある。

山蔘はこれを清水にて洗滌し、その儘陰乾するか、又は蒸熱したる上日光か炭火を以て徐々に乾燥する。遠隔の地に運搬するものは箱詰とするのである。山蔘は大抵仲買人の手を経て賣買されるものであつて、その一部は京城、平壤、義州、安州、元山、咸興等に於て販賣されるが、大部分は支那へ輸出される。支那に於ては先づ營口市場に集り、此處に於て調製、改装、精選せられて、更に北京、天津、上海等に供給せられる。價格は年に依り或は品質に依り一定せぬが、普通一匁平均二十圓位であるから、食糧漸く缺乏の季節に於て、その生産あるは山地住民にとつて實に天恵である。

葛 芋

葛芋は葛蔓より精製した纖維の稱にして、全鮮各地の林野より産出する葛蔓より製せられるが、特に忠清北道、永同地方に於ては盛んである。その用途は主として製鞋用に供せられるものである。葛芋はその質頗る強靱にして弾力性に富み、雨濕に觸れざる限り殆んど永久に變色することなく、内地に於ては襖地として賞用せられ、近年これを以て布を織り、所謂葛布として外國に輸出せらるゝやうになつたさうである。葛蔓は柔軟にして、少くとも一間半乃至二間の長さを有するものを最良とする。採取の季節は原料の品質に大に影響し、早きに失するときは質軟弱に過ぎて收益少く、晩きに失するときは剥皮困難なるばかりでなく、纖維固硬して著しくその質を損する。その好期は六月初旬より八月下旬迄であるが、就中七月下旬より八月下旬迄が最も適當である。

本品の製造場所は原料の浸水又は洗滌に便なる溪流に面し、適當な乾燥場を有する場所を選びて竈を据え、煮桶に生蔓を入れ充分煮沸し、約十二時間水に浸け、その後青草に包みて一晝夜位醱酵させる。剥皮は數本宛束ねたものを流水中にて表皮を剝取り、更に髓部を引抜き流水中に軽く打振り充分洗滌する。その後一夜水に浸し、草又は石上に擴げて日乾し、七分通り乾きたるとき纖維の纏れたるものを取揃へ、更

に充分に乾し、三尺置きに打疊み普通十貫を一梱包とするのである。運搬の際は特に雨濕に觸れしめないやうに注意を要する。永同産の製品は全部靜岡方面へ移出され、価格は年々に依り異なるも大抵五圓内外である。

檨皮

檨皮は専ら單寧材料として鞣皮用に供せらるゝもので、京畿道永登浦に在る朝鮮皮革株式会社工場に於ては、毎年約十萬貫の檨皮を消費すると云ふことである。本品は主として朝鮮の中部以北に産するも、運搬の關係上これが供給地は江原道、黃海道方面に限られて居る。剥皮の季節は五月より十月迄にして、六、七月頃が最も適當して居る。その方法は先づ立木を伐採し、斧又は鋸を以て三尺毎に切目を入れ、槌にて斜に叩き、金挺子を以て剥取り、直ちに乾燥貯蔵するものである。価格は品質に依り年に依つて變動があるが、等級は左の如くに分類されて居る。

特等品	本效單寧含量 一〇・一%以上
一等品	九・一—一〇・〇%

二等品	八・一—九・〇%
三等品	七・〇—八・〇%

楓葉及びエツキス

カラコギカヘデの葉は、朝鮮支那に於ては早くより皮革の黑色染料として用ひられて居たのであるが、歐洲戰爭以來支那方面の需要激増し、鴨綠江流域より安東縣に輸出せらるゝ數量毎年數十萬斤に達し、同市場に於て取引せらるゝ數量百萬斤の多量に上つたので、漸く内地人の注意する所となり、朝鮮總督府中央試験所に於て研究の結果、木綿、絹絲、柞蠶絲、羊毛等の黒、紺、鐵、鼠、「カーキ」色等を染むるに好適することが判明し、大正七年新義州にエツキスの製造工場が設立された。最近財界の變動に依り多少の打撃を受けて居るやうだが、原料が豊富であり且つ生産費低廉なる爲め甚だしい影響はあるまい。楓葉は鴨綠江岸平安北道義州より昌城、朔州、碧潼、楚山、渭原の各郡に亘り河岸、溪谷、路傍、山楚等に叢生して居る。採取時季は毎年七月上旬より九月上旬迄で、これを採取するには葉を抜き取るか、又は枝の儘刈取つて五尺内外に結束し、牛背等に依り搬出する。取引前に加工せられ、その方法は枝の儘なるものは、小枝を抜き取り、日光又は火力に依り乾燥したる後、一寸位に截斷して蘆製の蓆を以て包装するので

ある。

エツキスを製する法は、一釜に楓葉二百五十斤を入れ、これに水四石を加へ、加熱したる後蒸發釜に移し、尙ほ一回釜を替へて水分を蒸發し、次に仕上釜に於て仕上げをなすもので、加熱より仕上までに十六時間を要する。而して楓葉一萬斤に對する、エツキスの得量は四千封度である。

楓葉は全部支那に輸出せられ、エツキスは内地及び支那に供給せられるのであるが、楓葉は運送上不利であるばかりでなく、使用者に於ても不便尠からざるが爲め、その需要は逐年減少の傾向あるに反し、エツキスは却つて増加の趨勢を示してゐる。

漢 藥

古來朝鮮は各種漢藥用劑に富み、中には人蔘の如き世界にその名高きものもある。近時最新醫術の傳來を見なければ、蓼茸、唐草、乾材等の漢法醫藥の需要は今尙ほ盛んにして、鮮内に於ける消費額は尠からず、その種類も亦四百餘種に達して居る。さればそれ等の販賣に従事する者は、大正十三年末には實に四萬五千人に及んで居る。

朝鮮に於ける藥材の取引は藥令市に於て行はれるが、近時交通の發達に伴ひ、採藥者は直接に京城又は大邱の藥業者と取引する者もある。著名なる藥令市としては、古來大邱、公州、忠州、晋州、原州等を有せしが、近來は大邱を除くの外は廢止に歸し、新に全州、大田、開城の各地にて開市されて居る。大邱に於ては今を距る二百六十餘年前、李朝孝宗の時代に、國産を支那に貢上する爲め、各地の特産品を調査し、春秋二期これを京城へ納めさせることにして居た。その當時既に南鮮地方に於ては多く藥材を産出して居たので、慶尙道よりは、漢藥、及び迎日郡の礪石、慶州の玉石等を獻納することとなり、大邱には觀察使が居たところから、是等の物産は先づ大邱に集められ、その中から優良なるものを選択して貢獻し、貢獻物の餘剰を以て相互に交換又は賣買するに至つたのが藥令市の始まりである。これが次第に發達して極めて大規模の取引が行はるゝに至り、慶尙道を始め朝鮮内の特産物のみならず、遠く支那、滿洲、及び内地よりの藥材が出品取引され、従つて此等の方面より多數の商人が入り込み、それが各地方へ移出さるゝやうになつたのである。時勢の變遷によりてその取引高にも消長あり、開市日も亦變更され、大正三年に至り從來春秋二回開市したものを秋期一回に改められ、現在では毎年十二月一日から翌年一月末日迄開市されて居る。その繁盛期に入ると、市場たる大邱府京町、南城町、東城町の街道は往來も困難な程に雑踏し約百三十戸の常設店舗は勿論、街路をも取引に使用し、藥令市目當に地方より來る藥商は約三百人と稱せられ、近郷よりの藥材を賣買に來る鮮人は毎市一萬人を下らないと云ふことである。最近に於ける取引高

は年々四十萬圓近くに達し、この藥令市に伴ふ人出により各種雜貨の賣上も尠くないから、藥令市の盛衰は大邱の經濟界に取つて重大なる關係がある。今試みに朝鮮に産する主要藥材名を示して見やう。

人蔘、鹿茸、茯苓、貫衆、木賊、卷栢、銀杏、樞實、海松子、側柏葉、蒲黃、澤瀉、茅根、竹茹、三稜、香附子、天南星、半夏、石菖蒲、浮萍、穀精草、燈心草、知母、土茯苓、麥門冬、黃精、桑皮、天門冬、藜蘆、山慈菴、射干、山藥、天麻、白朮、胡桃肉、桑椹子、橡實、榆皮、夏枯草、馬兜鈴、細辛、梨木寄生、蕭萐、虎杖根、大黃、何首烏、牛膝、商陸、馬齒莧、瞿麥、王不留行、五味子、狼毒、升麻、草烏、赤芍藥、牡丹、黃蓮、葳靈仙、淫羊藿、木通、通草、黃梅木、厚朴、玄胡索、葶藶子、郁李仁、山查肉、地榆、覆盆子、丁公藤、樺皮、常山、槐角、槐花、葛根、皂刺子、皂莢、苦參、骨擔草、黃蘗、白茯苓、白蘘皮、黃蘗皮、黃柏實、川椒、枳殼、樗根白皮、遠志根、靈神草、鬼剪羽、乾漆、五味子、酸棗、白蘇、紫草、地丁、石榴、五加皮、海桐皮、山蔘、柴胡、蛇床子、羌活、獨活、當歸、川芎、防風、白芷、前胡、山茱萸、草龍膽、白薇、兔糸子、紫草、蔓荊子、益母草、菟藪子、澤蘭、香薷、黃芩、荆芥、續斷、薄荷、連翹、女貞實、秦皮、枸杞子、地骨皮、地黃、女蔘、秦艽、車前、梔子、忍冬、金銀花、瓜蒌仁、蔓蔘、桔梗、沙蔘、茵陳、藥艾、金仙草、稀莨、蒲公英、山菊、白朮、蒼耳子、千日草、鶴虱、地膚子、烏梅、杏仁、紫蘇、蘇子、百合、壽箱子、紅花、鼠粘子、鳳仙子、牽牛、棟穀、生薑、

芥子、萊菔子、青黛、鴛東角、蓖麻子、酸漿、蓮實、蓮藥、木瓜、甘草、巴戟、田參、三七、唐黃蓮、貝母、木香、藿香、大茴、款花、厚朴、大戟、甘遂、續隨子、莞花、胡椒、百部、防己、石斛、肉桂、桂皮、葶藶、吳茱、蘇子等

毛皮

朝鮮に於ては古くより毛皮を防寒具として用ひられて居り、現在産出する主なる毛皮の種類は、虎、豹、熊、羆、狼、猪、山猫、獾、狸、狐、獺、獐、鹿、羚羊、貂、栗鼠、鼬、犬、兔の十九種に及び、その産額の如きも年々多量に上り、大正十四年中には實に四十八萬餘斤、七十七萬餘圓の輸移出をなして居る。今各種毛皮原皮の價格、産地及び用途を示すと、左表の通りになつて居る。

毛皮に関する調査表

種類	原皮價格	産地	用途
虎	五百圓内外 三〇〇—五〇〇	咸南北、平南北、黄海、江原、全南、慶北	敷皮用
豹	六十圓内外 五〇—一五〇	咸南北、平南北、黄海、江原、全南、慶南北	同
熊	二十五圓内外 三〇—八〇	咸南北、平南北、黄海、江原	同
羆	七十圓内外	咸南北	同

朝鮮の物産

狼	二十五圓	咸南北、平南北、黄海、江原
猪	二圓内外	各道
山猫	三圓内外	同
狸	二圓内外	同
狐	十圓内外	同
獺	十五圓内外	同
獾	五十圓内外	咸南北、平北
鹿	百斤三十五圓	各道
羚羊	五圓内外	平南北、咸南北、黄海
貂	十圓内外	平南北、咸南北、黄海、江原
栗鼠	五十圓内外	咸南北、平北
鼯	一圓内外	各道
犬	五圓	同
兔	一圓内外	同
野兔	十圓	同
家兔	十五圓	同

防寒裝飾用

毛は上等の刷子用又は靴縫用

防寒用

毛は齒刷子、鬃刷子、皮は種々に加工主に防寒用に加工するも粗品中毛は筆等に使用され皮は鞣用に供す

防寒用に加工す

防寒裝飾用

鞣用に鹿皮代用として加工す

鞣皮用

敷皮用又は防寒用

防寒裝飾用

防寒用に加工す

防寒裝飾用として輸出す

巡查外套襟其他の防寒用

防寒用に加工す

救荒植物

朝鮮に於ては古來凶歲饑饉多く、これ等の年は勿論平年に於ても、窮民は主食物たる穀物の不足に際して、田野山林等に自生せる各種の植物の種實、芽、葉、莖、根、樹皮などを食用に供し、以て餓死を免れて居る。これ等の救荒植物を、林産品として擧ぐるは當を得ぬかも知れぬが、生活必需品たる關係上、茲にその種類と名稱を示して置くのは無用のことであるまい。

一、煮付、浸物又は汁として食するもの

椎茸、松茸、栗茸、青頭菌、天花茸、松露、纒耳、ハハキダケ、ムラサキハハキダケ、キクラケ、シロキクラゲ、石茸、カレハダケ、コアンズダケ、アキタケ、カラカサダケ、タマゴダケ、マツオブシ、若布、搗布、荒布、昆布、鹿尾菜、馬尾藻、天花菜、イギス、蕨、シヨリマ、薇、スギナ、エビモ、澤瀉、ミツオホバコ、苦竹、ハチク、ゴマダケ、クログワキ、ツユクサ、キバウシ、ワスレグサ、ユウスゲ、オニユリ、アカヒメユリ、コマユリ、ノヒメユリ、エゾスカシユリ、ノヒメユリ、テフセンカサユリ、ホソバユリ、ハカタユリ、車前葉、ツルボ、スズラン、クサギカヅラ、チゴユリ、ホウチヤクサウ、アマドコロ、クルマバツクバネサウ、シホデ、サルトリイバラ、ヤマカシユウ、ヤマノイモ、オニドコロ、ニガカシユウ、スカンボ、ヒメスイバ、ギシギシ、ホソバナイタドリ、オホケタデ、ボンドクダデ、ニハヤナギ、ツルドクダミ、イブキトラノヲ、藜、ハハキギ、イヌビユ、キノコヅチ、ヤマゴボウ、ツルナ、

スベリヒユ、ノミノフスマ、ミミナダサ、ノミノツヅリ、フシグロ、石竹、ハコベ、ジュンサイ、オホバ
 ボタンヅル、センニンサウ、キツネノボタン、キンバウダ、コキツネノボタン、オトコゼリ、アキカラ
 マツ、木通、イカリサウ、クサノワウ、ダンバインヅナ、イヌガラシ、テフセンタマイヌガラシ、ツルマ
 ンネンサウ、キリンサウ、ペンケイサウ、山梅花、タンテフサウ、ヲヘビイチビ、カハラサイコ、ワレ
 モカウ、シロバナワレモカウ、ヤブマメ、イタチササデ、ヤハズサウ、ツルフジバカマ、ウマゴヤシ、
 サイカチ、エンジュ、カタバミ、山椒、イヌザンセウ、白鮮、ヒメハギ、タウゴマ、漆の嫩葉、山漆の
 嫩芽、ヌルデ、アヲハダ、ニシキギ、マユミ、コマユミ、テフセンマユミ、ミツバウツギ、サルナシ、ト
 モエサウ、蕪、オトギリサウ、シナオトギリサウ、エゾノタチツボスミレ、アケボノスミレ、キスミレ、
 キカシグサ、マンシユウタラノキ、ハリギリ、ウコギ、マンシユウウコギ、獨活、ミツバゼリ、芹、ミツ
 バヒカゲゼリ、フキヤミツバ、ウマノミツバ、エゾニウ、ノダケ、ムカゴニンジン、トウヌマゼリ、當
 歸、防風、ミシマサイコ、ヲカトラノヲ、コケリンダウ、フデリンダウ、フナバラサウ、タビラコ、イ
 ヌムラサキ、クサギ、ウツボグサ、シロネ、メハジキ、ルリカコサウ、ホトケノザ、枸杞、シラガマギ
 ク、カハヂサ、クガイサウ、キバナノカハラマツバ、茜根、梔子の花、ニハトコ、ヲトコヘシ、女郎花
 マツムシサウ、烏瓜の芽、薺尼、ホタルブクロ、ヒメツルニンジン、シデシヤジン、カハラヨモギ、ヲ

トコヨモギ、シラヤマギク、ヲグルマ、コンギク、オホハナアザミ、ヲケラ、蓴、ノコギリサウ、ヤス
 ノコギリサウ、テウセンノコギリサウ、ノブキ、ホソバナヤブレガサ、ヤブレガサ、ユウガキク、ヨメ
 ナ、カラノアザミ、アレチザミ、タウコギ、センダングサ、キツネアザミ、ミヤコアザミ、ヤハズシラ
 ネアザミ、オニタビラコ、ヒヨトリバナ、サハヒヨドリ、タカサブロウ、センボンヤリ、メナモシ、ヲ
 ナモシ、ガンクビサウ、タカサゴサウ、デリバリ、ニガナ、ノニガナ、ヤクシサウ、テウセンヤクシサ
 ウ、アキノゲシ、サハラグルマ、カハラオグルマ、イハラグルマ、蒲公英、シロバナタンポポ、カウラ
 イタカラカウ、メダカラカウ、ヤマヂヒゴタヒ、ヤナギタンポポ、テウセンスイラン、アキノキリンサ
 ウ、チチコグサ、ハハコグサ、ハルノゲシ、ハチジャウナ、カウヅリナ、牛蒡、テウセンバラモンジ
 ン、コバラモンジン、ホソバイラクサ、エゾイラクサ

二、生、乾又は漬物として食するもの

ミル、イチキ、樺、海松、コガマ、白茅、菲、ヤマラツキヨ、ヤマモモ、マンシユウグルミ、テウセンダ
 ルミ、エゾノタケカンバ、榎、ムクエノキ、山桑、カヂノキの實、楮の實、ハリグハ、イヌビハ、イタビ
 カヅラ、イタドリ、オニバスの實、テフセンゴミシ、タネツケバナ、オホモミヂ、スグリ、ザリコミ、
 ハヒスグリ、ハリスグリ、ハリヤマスグリ、エゾノコリンゴ、シベリヤリンゴ、テフヘンズミ、テフセン

ヤマナシ、ボウズナシ、オホサンザシ、ベニサンザシ、エゾサンザシ、ウスバサンザシ、アツキナシ、ナハシロイチゴ、クマイチゴ、トツクリイチゴ、ベニバナサナギイチゴ、ウラジロイチゴ、ヘビイチゴ、ノイバラ、テフセンヤマザクラ、エゾノウハミザクラ、テウセンニハウメ、李、ガンカウラン、サネヅトナツメ、ケンボナシ、テウセンヤマブドウ、エビヅル、サンカクヅル、木天蓼、ミヤマタタビ、アキグミ、菱、ヒメビシ、ヤマバウシ、コヤマバウシ、サンシユユ、コケモモ、クロマメノキ、ナツハゼ、オホバスノキ、スノキ、シヤシヤンボ、アクシバ、アカミノクマコケモモ、柿、ゲンカイツツジ、トキハゲンカイツツジ、マメガキ、マクラマメ、クロミノウグイスカグラ、ヒロハヘウタンボク、ツシマヘウタンボク

三、粥、餅となし又はそれに湿じて食するもの

ミヅビエ、タビエ、稻の莖、粟の莖、樺、アベマキ、楷、アラカン、テフセンミヅナラ、モウコナラ、ナラガシハ、カシハ、アカガシ、シラカシ、ウラジロガシ、楡、刺楡、ハママツナ、マツナ、カラマツサウ、シキンカラマツ、ナヅナ、イヌナヅナ、グジラグサ、葛の根、ヒルガホ、オホバコ、烏瓜の根、桔梗、沙蔘、サハギキヨウ、ハナシヤジン、ツルニンジン、バーソブ、ヒカゲツルニンジン、蓬、ヤマボクチ、ハバヤマボクチ、ヒゴタイ

四、焼き、焙り、又は炒りて食するもの

海苔、青苔、アヲサ、銀杏、スズタケ、オホハシバミ、栗、椎、カハラケツメイ、ヒトツバハギ、無患子の仁、梧桐の仁、茶、ホソバインツツジ、イボタノキ、ネズミモチ、スヒカヅラ

五、蒸し又は揚物として食するもの

アカマツ、ノビル、ナルコユリ、クワリン、テフセンボケ、チャンチ、タウゴマ、ネナシカヅラ、荏

第二節 林産品産額

朝鮮の林産品産額に就いては正確なる資料を得ることが困難であるが、大正十一年に於ては、用材二百八十五萬六千尺縮、薪材一千二百四十三萬五千尺縮、木炭一千八百九十七萬三千貫、竹材二十八萬束、枝葉六百二十五萬七千尺縮、柴草八百八十三萬一千尺縮、副産物六百八十萬四千圓となつて居るが、明治四十三年以降の林産品産額を示すと左表の如くなつて居る。

林産物生産額表

(一) 數量

朝鮮の物産

種別	年次	年次									
		明治四十年	同四十年	同四十年	同四十年	同四十年	同四十年	同四十年	同四十年	同四十年	同四十年
用材	千尺締	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇
薪材	千尺締	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇
木炭	千尺締	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇
竹	千尺締	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇
枝	千尺締	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇
柴	千尺締	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇
副産物	千尺締	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇	三、八四〇

(二) 價額 (單位千圓)

種別	年次	年次									
		明治四十年	同四十年	同四十年	同四十年	同四十年	同四十年	同四十年	同四十年	同四十年	同四十年
用材	千尺締	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三
薪材	千尺締	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三
木炭	千尺締	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三
竹	千尺締	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三
枝	千尺締	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三
柴	千尺締	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三
副産物	千尺締	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三
計		一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三

備考 一、國有林野より生産したる用材の數量は本府統計表に依る。

二、その他は大正八年、大正六年、大正五年、大正二年及び明治四十四年特別調査を基礎として推定せり。

三、副産物は樹皮、樹實、干膜、桔梗根、菌茸、藥料、五倍子、樹液、土石等を含む。

四、大正十年度分は道に照會生産價額のみを調査せるものとす。

明治四十三年以降大正十一年迄の林産物の累年の産額は右の統計に依りて窺ふことが出来るが、遺憾ながらその後の資料はこれを手に入れることが出来ない。試みに大正十一年に就いて見るに、主要林産物は六千四百五萬六千餘圓、副産物九百四十一萬四千餘圓、總計七千三百四十七萬一千餘圓となつて居るが、その内譯は即ち左の通りである。

林産物生産額一覽 大正十一年

區別	林野所管別			山林課出張所		計
	國有	私有	計	(國有)	(林廠)	
主産物	三四七四一	六、八六、七五一	六、八六、七五一	五、三九、八二七	六、五五、四八二	六、四〇、五六、八〇一
副産物	六、九四	八、八七、三三〇	八、八七、三三〇	四、一七、五七九	二、三三、〇四七	九、四一、四六五〇
合計	三五、四四五	七、七、〇〇八二	七、七、〇〇八二	九五、七、四〇六	七、七、五二九	七、三、四七、二四五

朝鮮に於ける林野の面積は約千五百八十八萬町歩であつて、此等の林野から生ずる林産物はその種類多く用途も亦頗る廣汎に亘り、用材、燃料、食料、工藝用、又は藥用等として重要せられて居る。是等林産

物の中主なるものに付調査した處に依ると、大正十一年の總産額は七千三百四十七萬一千圓にして、平均一町歩當生産額は四圓六十三錢となり、これが概況は左の如くなつて居る。

林産額及び主要産地表 大正十一年

種別	生産額		主要産地
	數量	價額	
用材	二、八五、二四〇 <small>八割</small>	二、九七、一九三 <small>四</small>	各道に産するけれども、黄海、平北、江原、咸南、咸北の各道が最も多い。
薪材	一、二、四四、九三〇	一、三〇、七、五五〇	各道
主産物 枝葉及柴草	一、七三、六五五、九七四 <small>實</small>	四八、六四八、二四八	各道
竹材	二八〇、一六〇 <small>東</small>	四七三、八〇一	全南、慶南
計	一、八九七、三〇三 <small>實</small>	六四〇、五八〇 <small>三</small>	
木炭	一、八九七、三〇三 <small>石</small>	二、六〇、九六六	各道に産するが、年産額十萬圓以上に達する道は京畿、慶南、黄海、平南、平北、江原、咸南、咸北である。
樹皮	七三、四〇三 <small>實</small>	一、〇七、一四五	各道に産するが、年産額十萬圓以上に達する道は京畿、黄海、平南、江原の四道である。
樹皮	一、〇〇九、五五五 <small>實</small>	二七三、六三三	樹皮は各道に産するが、京畿、慶北、黄海、平南、平北、江原、咸南が最も多く、竹皮は全南、慶南が最も多い。
樹皮	五三、三五六	三二、五二九	各道に産するが、全北、全南、慶南、江原、咸北の各道が最も多い。
菌草	一、四四、二五〇	三七、〇九三	咸南北兩道を除く外各道に産するが、忠南、全北、江原の三道が最も多い。
藥草	一、四四、二五〇	三七、〇九三	各道に産するが、京畿、忠北、慶北、平南、平北、江原、咸南、咸北の各道が最も多い。
五倍子	二六、七七八	七、二二二	各道に産するが、京畿、忠北、慶北、平南、平北、江原、咸南、咸北の各道が最も多い。

物産	生産額		備考
	數量	價額	
漆液	一、三三三	三六、三三〇	咸北を除く各道に産するが、産額の最も多いのは忠南、全北、慶南、平北四道である。
松脂	二、六二六	三、一八七	各道に産するが、産額の最も多いのは忠南、全北、慶南、平北の四道である。
天然蔬菜	四、三三八、八二四	四六四、九七七	各道
蔓莖類	一、〇八六、六八〇	六、八八七	各道に産するが、産額の最も多いのは全北、平南、江原の三道である。
石類	一三、九四四、七〇〇 <small>オ</small>	四四七、七九六	各道に産するが、産額の最も多いのは京畿、全北、平南の各道である。
土類	二、六五〇	一四二、〇〇七	各道に産するが、京畿、全北、黄海、平北、江原、咸南の各道が最も多い。
獸皮類	二四九、一九七 <small>立坪</small>	一一、〇六八	各道に産するが、京畿、慶南、平南、江原の各道が最も多い。
其他	三三、四二四 <small>枚</small>	一、二〇、六八	
計	二六、八七五、四八五 <small>實</small>	三、四八、〇四〇	
合計	一	九、四四、六五〇	

備考 用材及び薪材は林木伐採報告表に據つた。但し薪材は該表薪炭材の中から木炭資材道所管に屬する分一、〇四八、〇一〇尺締、此價額一、二五六、四〇四圓、山林課出張所々管の分二、三、四七七尺締、此價額九、三二九圓、營林廠所管の分二、二、六八八尺締、此價額三、八三七圓、計一、〇九四、一七五尺締、此價額一、二六九、五七〇圓を控除したものを示してある。木炭資材一尺締の重量を百貫と見積りこれより木炭十貫目を生産するものとして換算せるものである。

林野所管別生産額 大正十一年

所管別	種別	道		山林課出張所		管林廠		計
		數量	價額	數量	價額	數量	價額	
主産物	木炭	一六、七〇〇、四四四	三、三六八、九三二	二、四四七、七六六	三、六六五	三、三六〇	一八、九三三、〇三七	二、六二〇、九九八
	樹皮	六五、六九九	一、〇三三、二一七	五、四九九	三六、五六一	九七五	七、四〇三	一、〇七一、四九五
	樹竹	六九、四三三	三、四三三、九四四	一、四八、一〇五	一三、〇一六	九、〇六六	一八、五三三	二、七三三、六三三
	菌草	四、五〇、〇一九	三、九一九、七七一	六、四三〇	五、七九四	五、三〇元	二、七三三	五七、一五九
	藥子	一、三三三、三三三	三、八〇、〇三三	一、八四〇、〇六六	二、七六五	三、七、八四九	一、七、四四〇	一、七、四四〇
	五倍子	二五、八二四	七、〇〇三	八、九四	一〇八	—	二六、七六八	二、七一一
	漆液	一、二六八	二、〇八五	三	一四三	—	一、三三三	二、六二六
	松脂	一、一六四	二、九四四	一、四三三	一九三	—	二、六六六	三、一八七
	天然蔬菜	四、一九七、六四一	四、四五、五四四	二、八、六三三	一七、三六九	二、五三〇	一、七、四四	四、三、八四四
	蔓莖類	一、〇六七、七九二	六、三三九	二、八、八八八	六、五八	—	一、〇六、六〇〇	六、八八七
合計	一三、九四、七〇〇	—	—	—	—	—	—	

前表に依つて見ると、總生産額の九割八分は、道所管林野（主として民有林及び縁故林にして約千二百三十八萬町歩）の産出であつて、山林課出張所及び管林廠管區（要存國有林野にして約三百五十萬町歩）の林野生産額は、僅に總生産額の二分に過ぎない。

道別林産額（右行數量）大正十一年（其の一）

道名	用材	薪材	枝葉及柴草	竹材	樹實	樹竹皮	菌草	藥草	五倍子
京畿	三、五三三	一、三三、四三〇	一、四三、三三〇	—	一、七九七	四、七、六四五	三、三三三	六、三、〇九二	三、〇三三
忠北	一、五、四八八	八、八〇、五二〇	二、六〇、七二〇	—	三、四、四九五	一、三、四五六	一、七、六七	一、七、三七三	五、八三
合計	五、〇九一	一、四三、九五〇	四、〇四、〇五〇	—	三、六、九二二	六、一、一〇一	四、五、〇〇	八、〇、四八四	八、〇六六

種	類	數	量	價	額	主	要	産	地
朝鮮の物産									
慶北		五五、二二三	九	七五、二七	一〇、九六六	五、一六五〇	四、三六六	五七七	三、八三三、三六六
慶南		九一、四四三	八八二	一五、三六	一、三六六	二六、〇八六	四、九〇〇	二、四三三	一、五六、二七六
慶北		九一、四四三	八八二	一五、三六	一、三六六	二六、〇八六	四、九〇〇	二、四三三	一、五六、二七六
慶南		九六、七八六	九六	一三、九五	八、四八五	三、七〇〇	三、四六	七九	三、一〇一、四四〇
慶南		一九二、一五三	四、二六六	一五、一〇二	七、五	二、七七七	四、三三	一、七五三	一、三三、一〇七
黄海		二、九二七、九四九	一四五	一〇〇、〇〇〇	五三、八五九	一〇、五八六、六三〇	二、四、三五	一、八四二	三、四七六、七〇四
黄海		六、五五、四三三	二一七	一七、四六六	九、三六四	二、五〇〇斤	八、八四五	七、二五	一、九四、六六
平南		六、三三、三三一	三	一五、四三	五、五七	九七、五五	四、七五	八、〇四	二、二五、五三三
平南		五、五五、七〇五	三	七、六三三	二、〇〇四	五、〇九〇	三、六二五	一、四、六七三	五、五、三九
平北		二、四、五〇、九〇五	三三	四、三三三	一、三、六五五	六、三、〇〇〇	七、五、一三	三、三六	一、九二、七六一
平北		二、四、二、八〇七	七、四八八	二、六三三	二、五九八	六、三、三〇〇	七、〇六八	九、七七	一、五三、九〇〇
江原		八、九、八、二六	八三	一、六三三、八〇二	五八、九三〇	二、六、五〇〇	二、二、〇四三	五、八〇八	一、三、六五、八〇〇
江原		一、五五、四六六	一、五〇〇	五、二、七五	一七、四九七	四、八、九七七	一、四、六〇一	一、四、一九七	五、四、七〇
咸南		一、四、五、八、六三	六〇	一、四、〇、五三	五、九、九五	一、七、四九〇	二、五、八四一	三、一、五三	一〇、八、六六
咸南		一、九七、四八二	五〇	四、七、七三	九、〇、三	二、八、一〇	一、四、四〇〇	七、八、七〇	一〇、八、六六
咸北		一、〇、七三、三三	一	二、二、〇、〇、三三	一、〇〇〇	一、六、八〇〇	一〇、八、三	六、六	三、九、七、三五
咸北		一、四、七、八、六〇	一	一、九、六、五七	一〇〇	五、六	二、二、三	三、八、八九	四、九
計		八、九、七三、〇七〇	一、三三三	二、六、六、四、三、八、二、四、一、〇、六、六、六、〇	一、三、九、四、七、〇〇	二、四、九、一、九七	三、七、四、四	二、六、八、七、六、四、八、五	七、三、四、七、一、四、五、二
計		二、六、〇、九九	六、二、三〇	三、一、八七	四、六、四、五、七	七、六、八七	四、七、四、七、九六	一、四、二、〇〇七	二、二、〇、六
計		二、六、〇、九九	六、二、三〇	三、一、八七	四、六、四、五、七	七、六、八七	四、七、四、七、九六	一、四、二、〇〇七	二、二、〇、六

種類別林産額 大正十一年

主産物中、用材及び薪材種類別の産額が不明であるから、これを省略してその他のものに就いて記述してみると左の如くである。

(1) 枝葉及び柴草

種	類	數	量	價	額	主	要	産	地
枝葉	葉	六五、七四、八九七	各	二〇、八七一、四四	各	松の葉付にして燃料に供する。			
柴草	草	一、二四七、九一、〇七七	各	二七、七七六、八七〇	各	下草及び灌木の嫩芽にして燃料、肥料に供する。			
合計	計	一、七、七三、六五、九七四		四八、六四八、二八四					
竹	竹	二、二一、六二二		三七七、〇一九		全南、慶南、全北			
淡竹	竹	三五、七三二		六〇、四四		全南、慶南			
矢竹	竹	二九、六一九		三三、九五八		全南、忠南			
女竹	竹	三、一七八		二、二二五		慶南、慶北			
黒竹	竹	一〇		五四		全北			

種	木炭				合計	其他	合計
	白炭	黒炭	根炭	合計			
テウセンマツ	四、六八二、四三〇	一、六五三、八〇四	二、六三六、八〇三	一、八九七、三〇七	二、八〇、二六〇	一、一〇一、五六五	三三二
アカマツ	七四八、九九六	一、三三三、七二四	五二八、二七八	二、六〇〇、九九八	四七三、八〇一	一、一二七、七九九	慶南
イテウ	七四八、九九六	一、三三三、七二四	五二八、二七八	二、六〇〇、九九八	四七三、八〇一	一、一二七、七九九	京畿、慶北、黄海、平北、江原、咸南
カラマツ	一、三三三、七二四	五二八、二七八	二、六〇〇、九九八	四七三、八〇一	一、一二七、七九九	三三二	忠北、全南、慶南、黄海、平南、平北、江原、咸北
カヤ	一、三三三、七二四	五二八、二七八	二、六〇〇、九九八	四七三、八〇一	一、一二七、七九九	三三二	全南、慶南
其	一、三三三、七二四	五二八、二七八	二、六〇〇、九九八	四七三、八〇一	一、一二七、七九九	三三二	平南、江原
針	一、三三三、七二四	五二八、二七八	二、六〇〇、九九八	四七三、八〇一	一、一二七、七九九	三三二	京畿、平南、江原
葉	一、三三三、七二四	五二八、二七八	二、六〇〇、九九八	四七三、八〇一	一、一二七、七九九	三三二	京畿、慶北、慶南、江原
樹	一、三三三、七二四	五二八、二七八	二、六〇〇、九九八	四七三、八〇一	一、一二七、七九九	三三二	京畿、全北、江原
合計	一、三三三、七二四	五二八、二七八	二、六〇〇、九九八	四七三、八〇一	一、一二七、七九九	三三二	全南、慶北、咸南

種	樹				葉				瀾				合計
	テウセンマツ	アカマツ	イテウ	カラマツ	カヤ	ヤマハンノキ	ダンコウバイ	ナラ	クミ	クヌギ	クナギ	クナギ	
テウセンマツ	四、六八二、四三〇	一、六五三、八〇四	二、六三六、八〇三	一、八九七、三〇七	二、八〇、二六〇	一、一〇一、五六五	三三二	一、九九九	一、五八、五九九	七六、二二八	一〇〇、八〇五	三三、五九五	一、九九九
アカマツ	七四八、九九六	一、三三三、七二四	五二八、二七八	二、六〇〇、九九八	四七三、八〇一	一、一二七、七九九	三三二	七六、二二八	一〇〇、八〇五	三三、五九五	三三、五九五	三三、五九五	一、五八、五九九
イテウ	七四八、九九六	一、三三三、七二四	五二八、二七八	二、六〇〇、九九八	四七三、八〇一	一、一二七、七九九	三三二	七六、二二八	一〇〇、八〇五	三三、五九五	三三、五九五	三三、五九五	一、五八、五九九
カラマツ	一、三三三、七二四	五二八、二七八	二、六〇〇、九九八	四七三、八〇一	一、一二七、七九九	三三二	七六、二二八	一〇〇、八〇五	三三、五九五	三三、五九五	三三、五九五	三三、五九五	一、五八、五九九
カヤ	一、三三三、七二四	五二八、二七八	二、六〇〇、九九八	四七三、八〇一	一、一二七、七九九	三三二	七六、二二八	一〇〇、八〇五	三三、五九五	三三、五九五	三三、五九五	三三、五九五	一、五八、五九九
其	一、三三三、七二四	五二八、二七八	二、六〇〇、九九八	四七三、八〇一	一、一二七、七九九	三三二	七六、二二八	一〇〇、八〇五	三三、五九五	三三、五九五	三三、五九五	三三、五九五	一、五八、五九九
合計	一、三三三、七二四	五二八、二七八	二、六〇〇、九九八	四七三、八〇一	一、一二七、七九九	三三二	七六、二二八	一〇〇、八〇五	三三、五九五	三三、五九五	三三、五九五	三三、五九五	一、五八、五九九

備考 一、本表の内「クリ」、「クルミ」は従来農産物として取扱はれて居たのだが、實際は林産物と見做すべきものであるから茲にその全産額を掲記したのである。

二、樹實は造林種子として用ひられる以外に、「テウセンマツ」「イテウ」「カヤ」「クリ」「クルミ」の如きものは食用として重

朝鮮の物産

四三〇

用される、「クヌギ」、「ナラ」類は山間住民が食用としてゐるものが多い、「ダンコウバイ」及び「ツバキ」は搾油用として用ゐられその製油は頭髮油として賞用される。「クロマツノキ」樹實は「ツルチュク」酒醸造用に用ゐられて居る。

(ホ) 樹竹皮

種	類	數	量	價	額	主	要	産	地
ハ	ギ	五三,五三			八,七五九	京畿、忠北、黄海、平南、平北、江原、咸南			
シ	ナノキ	一八,九七八			一〇,九四九	平南、平北、江原、咸南、咸北			
ク	ルミ	三六,三〇〇			一八,三三五	平南、平北			
ノ	ブノキ	四八,七八三			一一,〇六四	慶北			
カ	シハ	二二,〇七八			六,三三三	京畿、黄海			
ア	ベマキ	三八,三〇七			四,三三四	江原			
カ	ンバ	三九,九三二			一五,四六七	咸南、咸北			
竹	他	四六,四五二			一〇,〇四八	全南、慶北、慶南			
其	他	三五,三二五			一六,九四八	平北、咸南			
合	計	一,〇〇九,五九五			二七,三六二				

備考 「ハギ」「シナノキ」「クルミ」、「ノブノキ」の樹皮は繩、草鞋を作り、又は木箱の繼手等に使用されて居る。「カシハ」の樹皮は單寧原料として重用されて居る。「アベマキ」の樹皮は従来朝鮮では漁網の浮子、屋根葺用に使用されるに過ぎず、未だ内地に於ける如く「コルク」粉板、瓶栓、船舶用救命器、浮游器、文房具等として利用せらるゝ程度に達して居ない。「カンバ」樹皮は主に屋根葺用に供されて居る。竹籜は包用、朝鮮蓆其他敷物の材料として使用され居る。

(ハ) 菌 草

種	類	數	量	價	額	主	要	産	地	備	考
松	茸	一四,一六一	斤		七〇,一六二	黄海、江原、咸南、咸北				生のもの	
椎	茸	九三,九七			一九,八五四	全南				乾燥したるもの	
木	耳	一三,一三三			一七,五〇一	慶北、平北、江原				同	
其	他	二二,〇四七			一五,三〇八	全北、江原					
合	計	五七,二五六			三〇,一五九						

(ト) 藥 草

種	類	數	量	價	額	主	要	産	地	用	途
五	味子	三六,六三四	斤		一〇,六〇一	平南、江原、咸南、咸北				強壯・鎮咳藥	
桔	梗の根	八二,九三七			二二,三五六	忠北、平北、江原、咸北				鎮咳・祛痰藥	
白	朮	八,九九二			二〇,六二二	慶北、江原				利尿・健胃消化藥	
蒼	朮	二九,七二一			二二,一八五	全南、慶北、江原				利尿・發汗・健胃消化藥	
蔓	蓼	一六,四九一			二四,八五一	慶南、平南、平北、咸南				虛勞・恢復藥	
細	辛	三八,二四七			一一,一七七	平南、平北、江原、咸南				頭痛・風邪・癩痢・咳嗽・腦疾藥	
何	首烏	九,五三三			四,三九八	全南、慶北、黄海、江原				強壯・心痛・帶下劑	
淫	羊藺	一八,九八七			三,一七一	黄海、江原、咸南				強壯藥	

第七章 林産物

四三一

朝鮮の物産

山人蔘	四七三	七八五二	平北、江原、咸南、咸北	同
山菜	五七五〇	九八三〇	京畿、全南	同
柴胡	七四八三	二三八四	全北、慶北	解熱藥
芍藥	三九六二九	四四六七	江原、咸南	鎮痙・鎮痛・通經・止渴藥
茯苓	一六九九三	九六一六	江原、全南	利尿藥
沙蔘	五九四八七	六六〇五	江原、慶北	鎮咳・祛痰藥
山查	四、八五四	五一〇	江原	消化藥
黃肉	一〇、五四五	二、〇五二	慶北	胃腸藥
黃芪	八五、五四七	二、九八一	咸南、咸北	強壯藥
當歸	一三三、九〇八	二、〇三四	江原、咸南、咸北、平南	婦人藥
柴草	三、六一〇	一、二四七	慶北	健胃・頭痛・祛痰・鎮咳・發汗藥
黃蓮	六、九九五	一、四七五	黃海、咸北	健胃・止渴藥
地黃	五、〇〇〇	一、〇〇〇	黃海	通經・解熱・強壯藥
羌活	三、四〇〇	一、七二〇	江原	溫性・脚氣藥
其他	七〇、〇五四	一三、四〇九		
合計	一、七四四、二五〇	三六七、〇九三		

(チ) 五倍子

備考 桔梗の根は藥用の外食用に供さるゝものゝ數量、價額は(ヌ)の天然蔬菜の項に掲載してある。

「ヌルデ」(別名フシノキ)の稚芽又は葉柄は、五倍子蟲と稱する寄生葉蝨の刺戟に依りて生ずる贅生物にして、毎年相當の生産があるが、その大部分は移輸出されて居る。大正十年には十二萬八千斤の輸移出額に達したが、翌十一年にはその産額が著しく減少して、僅に二萬七千斤、價額七千圓に過ぎなかつた爲めに輸移出は皆無であつた。五倍子は主に藥用となり收斂劑として應用されて居るが、また單寧酸の原料となり、工業用として「インキ」、黑色染料、鞣皮等に用ひ、その用途は極めて廣いのである。五倍子は咸鏡南道を除くの外各道に産出し、殊に忠清南道、全羅北道及び江原道が最も多い。

(リ) 漆

年産額は一千三百貫その價額二萬八千である。この外林野以外の土地から生産するものを合すると、鮮内に於ける年産額は千七百三十五貫、價額三萬三千四百圓に達する見込である。漆樹は到る處に生育するけれども、産額の最も多い地方は、忠清南道、全羅北道、慶尙北道、黃海道、平安北道、江原道である。漆液は塗料として他の追従を許さない特質を有し、その需要は極めて多いが、近年漆業は甚だ不振の状態に陥り、採漆法も拙劣である。従つて品質劣等のものが多いのは遺憾である。將來漆樹の増植と採漆法の改善を圖ることが緊要である。

(ヌ) 天然蔬菜

第七章 林産物

朝鮮の物産

種	類	數量	價額	主産地
干葛	根	二四〇九九	三六三〇五	各道に産するけれども江原・咸南・咸北道が最も多い。
山菜	根	一六二四五七	三〇、五二六	各道に産するけれども黄海・江原道が最も多い。
桔梗	根	一五〇三三	四、九三八	忠北・全南
タラの芽	芽	三五八五〇	一一、一五〇	各道に産し大部分は薬料に供されて居る、蔬菜として食料に用ゐるのは全南・平北道が最も多い。
ミツバ	芽	四、一五六	一、〇八一	平北道
其他	他	一〇、〇〇〇	二、〇〇〇	咸鏡南道
合計	計	四三、二八八	四六、四九七	全南・慶北・江原

備考 食用に供せられる、天然蔬菜類を示したるものである。

(ル) 石類

種	類	數量	價額	主産地
花崗岩	岩	一、三八九、四五六	三三〇、九四四	京畿・全北・慶北
石灰岩	岩	二、二三八、四六三	八三、二二六	忠南・平南・江原
大理石	石	九六、四二〇	四四、〇〇三	黄海・平南
大石	石	二〇、〇七五	二、四五〇	全南
磚	石	二、五〇〇	一、五〇〇	黄海

種	類	數量	價額	主産地
曲石	石	二、五〇〇	八、一五〇	黄海
其他	石	三、五〇〇	三、五〇〇	平北
合計	計	一三、九四七	一、〇五二	

(ヲ) 土類

種	類	數量	價額	主産地
陶土	土	二四一、三五八	一四〇、四五五	京畿・平北・江原・咸南
粘土	土	六、五三〇	一、四一〇	咸北
其他	土	一、三〇九	一、四二二	
合計	計	二四九、一九七	一四二、〇〇七	

(ワ) 雜類

種	類	數量	價額	主産地
松茸	脂	二、六一六	三、一八七	各道に産するけれども京畿・忠南・慶南・江原道が最も多い。
蔓莖	類	一、〇八六	七六、八八七	各道に産するけれども全北・平南・江原道が最も多い。
獸皮	類	三七、四一四	一一、〇六八	平北
楓葉	類	五、四九三	五二、七三二	平南・平北・江原・咸南
山桑	類	三、〇七九	三〇、八二七	各道

第七章 林産物

其	一三三,五六一〇	三三三,四九一
合	計	三六七,三二八二

第三節 林産品貿易

林産品の種類及び産額に就いては概説したから、主要林産品の貿易状況を統計に依りて示して見やう。

林産品輸出統計

年次	材	木	炭	薪
明治四十三年	一五,二四四〇	—	—	—
同 四十四年	一四,五七八八	—	—	—
大正元年	一五,五六二六	—	—	—
同 二年	一五,七〇七四	—	—	—
同 三年	一四,五八三六	—	—	—
同 四年	一七,五〇五一	—	—	—
同 五年	二四,七二二六	—	—	—
大正八年	七五,六三八五	—	—	—
同 九年	一,九五一,八三〇	—	—	—
同 十年	三五,八九五二七	—	—	—
同 十一年	四八,三〇,九三〇	—	—	—
同 十二年	七四,九四,八四〇	—	—	—
同 十三年	六二,六一,二二三	—	—	—
同 十四年	三七,五九,二九五	—	—	—

同 六年	二四八,一六〇
同 七年	四〇九,三四四

昭和十五年	—
昭和元	—

木

炭

年次

數量

價額

年次

數量

價額

明治四十三年	二五,三三六
同 四十四年	一一,九七五
大正元年	六〇〇三
同 二年	一八九三
同 三年	二六七四
同 四年	五七五六
同 五年	四九九七
同 六年	三〇四〇
同 七年	五九二七

大正八年	九,五二四
同 九年	一一,一九三
同 十年	五二,〇三三
同 十一年	八七,五三五
同 十二年	六五,四九二
同 十三年	一九,〇五六
同 十四年	二八,八六七
昭和十五年	—
昭和元	—

薪

材

年次

數量

價額

年次

數量

價額

明治四十三年

一〇,一三七

三五,四一九

明治四十四年

二五,一八二

六,七三三

第七章 林産物

四三七

朝鮮の物産

年次	数量	金額
大正元年	二,八八八	五,一九一
同二年	四四,二二二	一三,六九三
同三年	一六,六七二	四,六七九
同四年	三七,三三二	九,五四〇
同五年	一〇七,三四〇	二八,三三六
同六年	八三,五四五	二二,九〇一
同七年	八二,三六八	二六,七〇八
同八年	二〇,六五一	五四,五七一
大正九年	四三,八	四三,三五九
同十年	八七,八五三	六四,二〇六
同十一年	一一五,三三九	七二,七一九
同十二年	一三八,〇六九	八一,九〇六
同十三年	二〇〇,二八五	一三三,〇一五
同十四年	一七二,三三八	一〇八,〇四九
昭和十五年		

楓葉及びエッキス

年次	数量	金額
大正五年	—	三七,〇〇〇
同六年	—	一〇八,五〇八
同七年	—	二四,九〇三
同八年	—	一三,七六〇
同九年	—	三五,三七七
同十年	—	一五九,〇五〇
大正十一年	—	九七,六〇三
同十二年	—	一三六,六六一
同十三年	—	六二,八二四
同十四年	—	四九,六九六
昭和十五年	—	—

栗

年次	数量	金額
大正七年	一一九,三二八	九八,五七四
同八年	六〇,一四四	六六,〇五二
同九年	七八九,四〇四	一〇八,〇〇七
同十年	二二四,九一七	三三六,六六四
同十一年	一八九,二四二	二九一,七六〇
大正十二年	一八九,八〇五	二二九,三三六
同十三年	二五二,三四〇	三五五,四四四
同十四年	二九六,六六一	五九五,二二八
昭和十五年	—	—

林産品輸移入統計

鐵道枕木

年次	数量	金額
明治四十三年	七〇〇,九七五	六五,八二五
同四十四年	六七四,一九三	六〇,一八七
大正元年	八〇四,〇八四	七四七,一六七
同二年	五〇八,五五七	五三,九一〇
同三年	六一八,七一九	五二七,五三八
同四年	五九三,九五八	四九八,二五七
同五年	三六七,六三二	三〇一,八六九
同六年	四四一,七五四	三九四,三三八
大正七年	五六〇,三三二	六〇,一三三
同八年	三三四,三五八	五二六,一三七
同九年	三七五,三九五	七八二,三三三
同十年	五九九,〇四〇	九三,〇五〇
同十一年	九七〇,八七五	一,五八五,一四三
同十二年	四九二,九九一	九一八,〇二六
同十三年	一,二五八,二六	一,四〇九,四四一
同十四年	六二七,六三三	八六,六八〇
昭和十五年	四三九	—

第七章 林産物

大正十五年
昭和元年

木材及び板

年次	數量	價額
大正八年	一〇六,五二一 <small>尺</small>	二,七九〇,一四 <small>円</small>
同 九年	一,三四六,九七一	二,五三九,七八三
同 十年	一,五二六,七七五	七,〇二四,八〇七
同 十一年	一,三一九,一八七	一,五六二,〇七二
同 十二年	一,二六六,六九七	九,九八八,三三三
同 十三年	九三八,七三九	八,五三四,二〇一
同 十四年	一,〇二五,七九二	八,〇〇二,八六一
同 十五年	一,四一〇,九三二	
昭和元年	二,一三三,〇九一	
大正八年	四八,〇八三 <small>尺</small>	二七〇,八五九 <small>円</small>
大正九年	六二,九六四	三四二,七八三

薪材

年次	數量	價額
大正八年	一,九六六,八八 <small>百斤</small>	四八,〇八三 <small>円</small>
大正九年	二,六一六,一五	六二,九六四

年次	數量	價額
大正元年	二九五,三三〇	七三,二七七
同 二年	三八六,五七四	九八,四六四
同 三年	四二六,七九〇	一一,八四七
同 四年	四四九,四三七	一〇〇,六一〇
同 五年	三九一,六四七	八六,七七七
同 六年	三七四,七一	八六,七九五
同 七年	一,五六四,〇九三	一六六,四四一
大正十年	四六七,八九七	二二九,二〇五
同 十一年	四二九,一〇二	二二,二七九
同 十二年	四七五,八八七	二七,一六九
同 十三年	三四三,七三二	二〇,三四六
同 十四年	三三五,八七九	一九,二六六
昭和元年		

木炭

年次	數量	價額
明治四十三年	七〇,五四三 <small>百斤</small>	七,三二〇 <small>円</small>
同 四十四年	八二,七四四	八二,〇九五
大正元年	一一〇,七二五	一一,三五六
同 二年	一〇〇,六七七	一〇,六七二
同 三年	一一〇,四八七	一〇,七九九
同 四年	九四,四三九	九九,七三九
同 五年	九六,〇三三	九六,六五四
同 六年	九二,五八一	一五〇,九六五
大正七年	一〇一,五九六 <small>百斤</small>	二六〇,四九五 <small>円</small>
同 八年	一六三,八〇七	四八,二四二
同 九年	一一九,一五一	三八四,三五二
同 十年	一五七,五三六	四四四,九七三
同 十一年	一九一,八〇四	四七九,八二九
同 十二年	一三九,九五四	三九〇,三九七
同 十三年	八四,三〇一	二七,二八四
同 十四年	七七,二三三	二四,八四八

大正十五年
昭和元年

第八章 鑛産物

第一節 主要鑛産品

朝鮮に於ては諸種の鑛物に富み、鑛業の起源も亦頗る古きに拘らず、從來その事業の殆んど見るに足るものがなかつた。明治三十九年七月韓國政府が、新に鑛業法及び砂鑛採取法を發布してから、鑛業制度初めて備はり、爾來漸くその緒に就き、更に併合後に至り益々その歩を進めたのである。總督府は大正四年朝鮮鑛業令を制定し、次いで同五年四月より朝鮮鑛業令施行規則、及び朝鮮鑛業登録規則を施行した。同令は外國人の新に鑛業権を取得するを禁じ、新發見の重要鑛物を鑛業令の支配に屬せしめ、鑛業権を物權として不動産に關する規定を準用し、鑛業上必要なる土地の使用及び收用に付、土地收用令中の規定を準用する等、鑛業権の保障を確實にし、以て益々鑛業の發達を促進せしめむことを期し、その後更に數次の改正を加へ關係規則を公布した。而して世界大戰の影響を受けて大正七、八年頃には鑛業熱大に勃興し、各種鑛業の異常なる活躍を見たが、大正九年財界の反動により鑛物市價の暴落して以來、最近の鑛業界は概して不況沈滞の状態にあるも、大正十二年頃より聊か好轉の機運に向つて居るやうである。

朝鮮に於ける主要鑛物は金、鐵、石炭、黒鉛にして、銅、亞鉛、タングステン等これに亞ぎ、特に金、

鐵、石炭、黑鉛は四大鑛業となつて居る。その鑛業出願件数は大正元年中六百三十三件を算し、爾後年々増加して大正六年中の出願實に六千八百十九件を算したるも、歐洲戰亂後經濟界の變調に伴ひ漸次減少するに至り、大正十三年中には、出願件數内地人三百十六、朝鮮人二百八十四、計六百、許可件數内地人八十五、朝鮮人百十四、計百九十九となつて居る。而して大正十三年末現在許可鑛區は左の如く二千五十九に達して居る。

鑛種別鑛區數及び面積 (大正十三年末現在)

鑛種	鑛區數	面積	鑛種	鑛區數	面積
金	五六四	二,三二五,七四三 ^坪	水	七	八〇七,〇六〇 ^坪
銅	二八	九,二六〇,六五九	タングステン	七	一,二九四,九二一
鉛	一	四六,三五〇	金銀銅鉛亞鉛鑛	三七	一,一〇八,六五二 ^坪
水銀	五	一,六八,九四三	砒	五	一,一七九,三四四
亞鉛	六	八三,九〇四	燐	一	一
鐵	一九五	七六,二六,二二三	黑鉛	一七三	二,一九七,六三五
硫化鐵	二	二八,八七七	石	四八四	八五二,八九,四七〇
滿俺鐵	二	八九,二八二	雲母	一七	四一三,〇一五
タングステン	二	五,一〇〇,八三三	石	二	六七九,七六六
			綿	二	

高嶺土	砂	砂	鐵
五四	九,二四,六八三	砂	一
三五	七,三五,八二六	一切の鑛物	四
二八	三,四三,七九七	合計	二,〇五九
	× 七,三三,三五四		× 七,三三,三五四

備考 本表には雲山特許鑛區の一切鑛物一件は鑛區數のみを計上した。×印は河床の延長に依り許可したるものにして單位は里、町、間である。

更に鑛種別稼行鑛區數及び面積を見ると左表の如くなつて居り、鑛區數は金銀鑛の七十二最も多く、石炭の三十七これに亞ぎ、金銀銅鉛亞鉛鑛の三十六、鐵鑛の二十二、黑鉛の二十等は主要なるものである。

鑛種別稼行鑛區數及び面積 (大正十三年末現在)

鑛種	鑛區數	面積	鑛種	鑛區數	面積
金	七二	三,五七三,三二七 ^坪	雲母	一	五四七,二七五 ^坪
銅	一	九,九二,六七五	高嶺土	二	一,五七六,四六三
鐵	二二	九,七八九,二八七	砒	一	一五六,二五〇
タングステン	一	八四八,七〇〇	砂	五	九八五,九七八
金銀銅鉛亞鉛鑛	三六	二,一五六,五五八	砂	一三	八,九五七,三九九
黑鉛	二〇	五,二五三,二九八	一切の鑛物	一	× 二,一三三,三三一
石炭	三七	二,五七〇,五四七	合計	一	× 一,三五二,四七四
				二	× 二,一三三,三三一
				三	× 一,四六八,二五〇 ^坪

また鑛産物價額は、明治四十三年には僅に六百六萬餘圓に過ぎなかつたが、大正三年には八百五十二萬

餘圓に増加し、大正七年には一躍三千八十三萬餘圓の多きに達し、大正八年以降は減少したが、大正十二年頃より多少好轉の兆あり、大正十三年中に於ける鑛産物價額は千九百十七萬六千四百六十二圓となり、前年に比し百八十四萬九千五百六十八圓（一割七厘弱）を増加した。鑛産額を國人別にすれば、その割合は内地人六割八分九厘強、朝鮮人六分五厘弱、外國人二割四分六厘弱となつて居る。

種別	鑛	種別	鑛
數量	價額	數量	價額
金	二,一〇三,四三二 <small>匁</small>	鐵	三〇九,四四三 <small>噸</small>
砂	七,八一八 <small>匁</small>	銑	九,九七九 <small>匁</small>
金	四二,二七〇	鐵	五,五六五 <small>匁</small>
銀	三,九三三,三八八 <small>匁</small>	亞比	一,四七,四五〇
汰	一,五五四,七〇二 <small>匁</small>	砒	二,九七四 <small>匁</small>
銀	四,五三三,八二二 <small>匁</small>	雲母	三,七五〇 <small>匁</small>
鉛	一,七四三,七三二 <small>匁</small>	金銀銅鉛亞鉛鑛	六五,〇一八 <small>匁</small>
銅	一,七四三,七三二 <small>匁</small>	黑鉛	二四,九一三,〇六〇 <small>匁</small>
亞鉛	二,八〇三,七四 <small>匁</small>	石炭	三,九九四,二五 <small>噸</small>
高嶺土	二,四九二 <small>噸</small>	合計	一,九一七,六四六 <small>匁</small>
砂	二,二二七,四一五 <small>匁</small>		

試みに朝鮮の鑛産額を内地及び臺灣と比較すると左表の通りにして、殊に金及び鐵に於ては、朝鮮の産額は最も重要な關係にあり、また石炭に於ても無煙炭の供給は、國防上及び工業上頗る重視すべきものである。

鑛産額比較表（大正十二年）

鑛種	朝鮮	内地	臺灣
	千匁	千匁	千匁
金	四,二五一	一〇,二〇九	五,四八
鐵	七,四九〇	七,八六一	—
石炭	二,七五〇	二,五六,六九四	一,一四,一五
其他	二,八三五	九,九四七 <small>八</small>	九,五六
計	一七,三二六	三七,四,二四二	一一,九二〇

以上は朝鮮に於ける鑛業の概況であるが、朝鮮には内地人、朝鮮人の經營の鑛山のみならず、外國人經營の鑛山がある。即ち明治二十七八年戰役後、外國人にして朝鮮半島の利權に注目する者頗る増加し、米國人ゼームス・アール・モールスは、明治二十九年四月、雲山郡一圓に於ける一切の鑛物採掘權を韓國政府より特許されたのである。是れ實に外國人の鑛山の採掘權を許可せられたる嚆矢にして、在留外韓使臣をして、最惠國條款を名とし、時の政府に對し、續々その要求を提起せしむるの俑を作つたものである。

次いで同年慶源、鍾城鑛山を露國人に、三十年金城鑛山を獨逸人に、三十一年殷山鑛山を英國人に、三十年稷山金鑛を日本人に、三十四年昌城鑛山を佛國人に、三十八年厚昌鑛山を伊太利人に、同年遂安鑛山を英國人に、四十一年甲山鑛山を米國人に各特許した。慶源、鍾城の兩鑛山は事業着手の機に至らずして消滅に歸し、金城及び殷山鑛山は鑛況不良の爲めこれを抛棄し、稷山鑛山は内外人共同組織の金鑛株式會社に讓渡し、同會社は更に鑛業令に依り鑛業權を取得すると同時に特許權を抛棄し、現在存續するものは雲山、遂安、昌城、厚昌、甲山の五鑛山であるが、有望なる金鑛が外國人の經營に屬して居ることは注目すべきである。

朝鮮に於ては各道に相當豊富に、各種の鑛産を埋藏して居るが、各道に於ける鑛産物の種類を示すと左表の通りである。

鑛産物一覽表

京畿道	金、銀、銅、鉛、亜鉛、鐵、硫化鐵、タンゲステン、水鉛、黒鉛、石炭、石棉、砂金
忠清北道	金、銀、銅、鉛、亜鉛、鐵、タンゲステン、黒鉛、石炭、砂金
忠清南道	金、銀、銅、鉛、錫、鐵、タンゲステン、水鉛、黒鉛、石炭、雲母、石棉、砂金
全羅北道	金、銀、銅、鉛、亜鉛、水鉛、黒鉛、砂金
全羅南道	金、銀、銅、鉛、亜鉛、鐵、水鉛、黒鉛、石炭、高嶺土、砂金

慶尙北道	金、銀、銅、鉛、蒼鉛、亜鉛、鐵、硫化鐵、タンゲステン、水鉛、砒、黒鉛、高嶺土、砂金
慶尙南道	金、銀、銅、鉛、蒼鉛、亜鉛、鐵、硫化鐵、滿掩、黒鉛、石炭、高嶺土、砂金
黄海道	金、銀、銅、鉛、水鉛、亜鉛、鐵、タンゲステン、黒鉛、石炭、雲母、高嶺土、砂金
平安南道	金、銀、銅、鉛、安質母尼、水銀、亜鉛、鐵、滿掩、黒鉛、石炭、雲母、砂金
平安北道	金、銀、銅、鉛、亜鉛、鐵、タンゲステン、砒、燐、黒鉛、石炭、雲母、砂金
江原道	金、銀、銅、鉛、亜鉛、鐵、硫化鐵、滿掩、タンゲステン、水鉛、黒鉛、石炭、石棉、高嶺土、砂金
咸鏡南道	金、銀、銅、鉛、亜鉛、鐵、黒鉛、石炭、雲母、高嶺土、砂金
咸鏡北道	金、銀、銅、鉛、亜鉛、鐵、水鉛、黒鉛、石炭、雲母、高嶺土、砂金

金

朝鮮に於ては古來金を産し、遠く三韓時代にも産金の歴史あり、新羅時代にはその産額大に増加したやうである。然るに高麗朝を経て李朝時代となり漸く衰微の徴を示し、その晩年には消極的政策の結果金鑛業の見るべきものなく、只僅かに砂金の採取業のみ營まるゝに至つた。日清戦役後韓國政府は鑛山の開發に着眼せしも、時恰も内治外交共に多端を極めたるを以てこれに着手するを得ず、加ふるに鮮内の有望なる鑛山は擧げて宮内府に屬して居たので、此の機に乗じて諸外國人は、各本國政府の後援の下に競つて鑛業權の獲得を企て、遂に雲山鑛山、遂安鑛山、昌城佛國人鑛山、及び稷山鑛山等、著名の金山は悉く外人

の有に歸した。明治四十三年韓國併合の舉あると共に、内地鑛業家にして鮮内の金山に着眼するもの増加し、漸次金鑛業の發展を來し、大正五年に於て最も盛況を見たが、最近數年間經濟界の變調に伴ひて著しく沈衰の状態に陥つて居る。金は主として前寒武利亞界、古世界、中世界及び花崗岩中の含金石英脈中に存し、時に遂安鑛山に見るが如く接觸鑛床中に産し、含金石英脈は朝鮮到る所に賦存し、殊に寒武利亞界の片麻岩類、及び花崗岩中に胚胎するものを主要なるものとする。鑛脈の多くは黃鐵鑛、方鉛鑛、黃銅鑛、閃亞鉛鑛、毒砂、磁黃鐵鑛等の硫化鑛物の一或は數種を隨伴し、この外時に長石、雲母、螢石、方解石、石墨、電氣石、赤鐵鑛、菱鐵鑛、輝水鉛鑛、滿俺鐵鑛、重石等の鑛物を含有することがあり、屢々自然金を隨伴した金鑛中には常に銀を含有する。脈石を成す石英の性状は種々にして、或は無色透明なるあり、白色なるあり、灰色乃至暗灰色を呈するあり、良好なる金鑛は一般に黃鐵鑛に富むも、硫化鑛物を缺ける部分に肉眼的自然金の存するものもある。含金石英脈の幅員は所在大なる相違ありて、延長の大なるものは二里以上に達し、幅も亦三十尺に達するものが少くないが、一般に大脈には含金貧弱なる部分多きを常とし、含金石英脈は朝鮮に於ける普通の金鑛である。今主要なる金鑛賦存地を列擧すると、

京畿道 楊平郡 驪州郡 安城郡 開城郡
忠清北道 清州郡 沃川郡 永同郡 陰城郡 忠州郡

忠清南道 燕岐郡 扶餘郡 保寧郡 青陽郡 洪城郡 瑞山郡 牙山郡 天安郡
全羅北道 全州郡 茂朱郡 南原郡
全羅南道 光陽郡
慶尙北道 高靈郡 漆谷郡 金泉郡 尙州郡
慶尙南道 統營郡
黃海道 延白郡 瓮津郡 長淵郡 松禾郡
平安南道 陽德郡 成川郡 平原郡
平安北道 義州郡 龜城郡 泰川郡 雲山郡 熙川郡 定州郡 宣川郡 朔州郡 昌城郡 江界郡
江原道 淮陽郡 通川郡 洪川郡
咸鏡南道 永興郡 安邊郡 新興郡

等にして、接觸鑛床を成す金鑛床はその數多からず、遂安鑛山の鑛床をその巨壁となし、古世代大石灰岩層に屬する石灰岩と花崗岩との接觸部に近く胚胎せる形狀不規則の鑛床である。而してその主要なるものを芴洞、及び楠亭に於けるものとし、鑛石は黃銅鑛、及び斑銅鑛より成り、脈石としては透輝石、硅灰鐵鑛、方解石等を含むし、楠亭の鑛石には方鉛鑛、閃亞鉛鑛、硫錫鑛、柘榴石、石墨等を含有する。合金品

位は十萬分の一内外である。

金鑛山の産額は、自家鑛山附屬の製鐵所に於て製出したる金地金と、製鍊の際淘汰蒐集せられたる合金硫化物たる汰鑛、及び原鑛の儘なる金銀鑛石の三種あり、汰鑛及び金銀鑛石は主として自山以外に搬出せられ、獨立製鍊所、又は他の鑛山附屬の製鍊所に於て處理せらるゝものである。

金地金は年々漸次産額増加し、併合當時年額三百七十四萬餘圓に過ぎなかつたものが、大正三年には六百五萬餘圓となり、大正五年には最も盛況を呈し七百三十七萬餘圓の最高産額を挙げたが、歐洲戰亂に依る鑛山用諸材料、運賃、勞銀等の騰貴に依り、生産費膨脹し、收支相償はずして休山の已むなきに至つたもの多く、大正六年より漸次減少し、大正九年には三百五十八萬餘圓、大正十年には約三百萬圓となつたが、物價勞銀の稍低落せる爲め漸次復活の曙光を見るに至り、大正十二年には三百九十一萬餘圓となり、大正十三年に入りて對米爲替の不利は漸次金の市價昂騰を來し愈々囁目せらるゝに至り、殊に同年十一月政府の金價政策の變更により金拂下げ値は對米爲替相場を標準とすることとなり、著しく金價の騰貴を見るに至つたので、帝國疆域中最大の金賦存地たる、朝鮮に於ける産金業の上に大なる刺戟を與へて居る。

金銀鑛石は大正二年迄は消長常なかりしも、大正三年以來漸次産額を増し、大正四年十月久原製鍊所の開設に依り小鑛山の開發を促進し、爲めに大正五年には六十三萬餘圓に増加し、大正八年には百四十六萬餘

圓に達し、大正九年及び十年には漸次減少して夫々七十七萬餘圓及び五十八萬餘圓を示したのである。

汰鑛は明治四十三年初めて二十四萬餘圓の産額を見、爾來漸次増加し、大正三年には五十一萬餘圓に達し、大正五年以降黃海道遂安郡楠亭鑛山の選鑛開始に依り産額著しく増加し、大正六年には二百九十七萬餘圓に達し、最も盛況を呈したが、大正七年以降漸次減少し、大正十一年には百十萬餘圓となり、大正十二年には少しく増加して百六十二萬餘圓を産したるも、大正十三年八月遂安鑛山は新に鑛脈を發見するに至らず、選鑛作業を休止し僅に探鑛のみを繼續することとなつた。また砂金鑛業は其の方法の容易なることと金鑛業の比に非らざるを以て、金鑛業の先驅として既に太古より存在して居たが、その採取方法は現今に至る迄極めて幼稚であつた。大正六年末稷山鑛山に於て、本邦唯一の砂金浚漉機を使用し大規模の探金を見るに至り、茲に朝鮮砂金鑛業界に一新軌軸を出すに至つた。砂金は全鮮到る所に産するが、金鑛分布と相關聯して北鮮に多く南鮮に少い傾向あり、就中京畿道安城郡、忠清南道天安郡に跨れる稷山砂金地、平安南道平原郡順安砂金地、咸鏡南道端川郡、長津郡の砂金地等は、砂金地帯として最も有望なるものである。

鐵

朝鮮に於ける鐵鑛業の起源は審かでないが、古代より佛像、巨鐘、鐵器の傳はつて居るのを見ると、其の起源亦遠きに在るべく、黃海道如きは上古既に漢民族と日本民族との鐵鑛採取地となつて、互ひに相競争角逐して居たやうである。前三韓時代には辰韓及び馬韓は日本に向つて鐵を輸出し、後三韓時代には百濟より日本に鐵を獻じた史實あり、其の稍隆盛を來せるは新羅時代にして、當時既に官營製鐵所を設けて製鐵事業を經營した記録がある。然るに李朝時代に入りて鐵鑛業も亦他の産業と等しく衰頽し、只一方の農具及び日用鐵器の原料を供給するに止るに至つたのである。明治三十八年日韓新協約成立後、内鮮の經濟關係益々密接となり、内地製鐵業の原料鑛石の供給を朝鮮に求むることとなり、後ち三菱兼二浦製鐵所の設立に依り鐵鑛業は從來の面目を一新した。鐵鑛は磁鐵鑛、赤鐵鑛、褐鐵鑛、菱鐵鑛の四種にして、磁鐵鑛中には「チタン」を稍々多量に含有するものあり、赤鐵鑛には堅實なる塊狀を爲せるものと、脆弱なる雲母鐵鑛とあり、塊鐵鑛には乳房狀、葡萄狀或は纖維狀の組織を有する結晶質のものと、粗鬆なる非結晶質のものとある。これ等の鐵鑛中現時製鐵用に使用せられつゝあるは、磁鐵鑛、赤鐵鑛、及び褐鐵鑛にして、悉く酸化鐵若くは水酸化鐵に屬し、含「チタン」磁鐵鑛は嘗て八幡製鐵所に於て試鑛に供せしことがある。鐵鑛床分布の狀況を見るに、大體に於て南鮮地方には鑛脈多く、江原道には接觸磁鐵鑛々床あり、平安南道、黃海地方には交代及び層狀褐鐵鑛並に赤鐵鑛、咸南北兩道には交代磁鐵鑛床多く、

鐵鑛の主要産地は、西鮮に於て黃海道載寧、殷栗、黃州、安岳の各郡、及び平安南道价川、江西の各郡、東海岸に於ては咸鏡南道利原郡等である。

從來朝鮮産鐵鑛の大部分は鮮外に給鑛せしを以て、鑛石の産額は相當の額に達せるも、鐵の生産額は見るべきものなかりしが、兼二浦製鐵所設立以來注目すべき生産を擧ぐるに至り、明治四十二、三年頃は鐵鑛石約十萬噸内外の移出に過ぎざりしに、大正元年頃より漸次増加して大正七年前後には二十四五萬噸乃至三十萬餘噸の移出を見、鑛石は獨り内地に移出せらるゝのみならず、大正三年以來支那にも亦輸出せられ、明治四十三年には十四萬餘噸、四十二萬餘圓に過ぎなかつた鐵産額が、同三年には十八萬餘噸、二十九萬餘圓となり、同九年には四十四萬餘噸、四百十八萬餘圓に増加せるも、同十二年には二十四萬餘噸、百八十萬餘圓に減少した。銑鐵の産額を見るに、大正六年に於て始めて江原道江陵郡に於て約二噸、同三陟郡に於て一噸、合計三噸の産額届出ありたるのみなりしが、大正七年以來兼二浦製鐵所に於て多量の鐵産額を見るに至り、即ち銑鐵は大正八年七萬餘噸、千十六萬餘圓、同九年八萬餘噸、八百二十餘萬圓に上り、爾來産額に於ては大差なきも價額は激減して四、五百萬圓程度となり、同十二年には稍々増加して約十萬噸、五百六十八萬餘圓を産した。鋼材は大正九年六萬餘噸、同十年約九萬噸を産したが、同十一年には僅に二萬餘噸を産したるのみにて製鋼を中止した。

黒鉛

朝鮮に於ける黒鉛鑛業の沿革に付ては何等記録の徴すべきものなきも、古くより黒石又は鉛石と稱し、減磨劑として機具又は車軸に塗抹せるものがあつたさうである。然るに明治三十七八年頃に至り、内地人中に黒鉛鑛業に著目する者を生じ、慶尙北道尙州郡、咸鏡南道永興郡に初めて土狀黒鉛の採掘を見た。鱗狀黒鉛にては明治四十年頃平安北道龍巖浦附近に於て採掘せられ、次て内地に移出せらるゝに及び、初めて朝鮮に於て鱗狀黒鉛の存在するを知られたのである。而して其の平安北道地方の石英脈と共に産するものに在りては、錫蘭産の如き優良品に匹敵する良質のものである。黒鉛分布の状況は、鱗狀黒鉛に在りては平安北道、咸鏡北道を其の主要産地とし、平安北道に産するものは花崗岩又は片麻岩を母岩とし脈狀又は扁桃狀を爲して存在するものあり、稀に水成岩との接解作用に依るもの、雲母片岩中に胚胎せるもの等種々あるも、咸鏡北道産は總て雲母片岩又は准片麻岩中に散布狀に含有せらるゝものである。花崗岩、片麻岩中に存するもの又は接觸に依るものは、鑛床の狀態甚だ不規則なるを常とするを以て採掘上困難なるも、品質優良なるもの多く、且つ選鑛比較的容易である。これに反し含雲母黒鉛は採掘作業なるも、黒鉛含有量少く且つ製鍊の際雲母の除去困難にして品質も亦前者に比し劣等である。土狀黒鉛の主要産地は慶

尙北道、忠清北道、咸鏡南道、江原道、平安南道、全羅南道等にして、古き變質水成岩に層狀又は扁桃狀をなして存在し、一般に品質優良である。

黒鉛が貨物として世の注目を惹くに至つたのは明治四十年以後に屬し、その産額は明治四十一年より大正四年に至る間に於ては、九百餘萬斤乃至二千萬斤、價額十五萬圓乃至二十三萬圓なりしが、大正五年千三百萬餘斤、三十九萬餘圓となり、同六年に至りて千四百餘萬斤、百餘萬圓に達し、明治四十三年の千三百萬餘斤十五萬餘圓に比し數量に於て一割強、價額に於て五十五割強を増加した。斯くの如く數量の増率に比し價額著しく増加せるは、歐洲戰亂の結果、鱗狀黒鉛の需用激増と價格暴騰に依るものなることは明かである。然れども此の好況は僅に一年にして早くも衰微し、翌七年には千百餘萬斤、五十九萬餘圓、大正十年には千二百餘萬斤、二十餘萬圓となり、再び戦前の産額に降下したが、その後土狀黒鉛が内地に於て需要せるゝに至つた爲め聊か産額を増し、大正十一年には二千五百萬斤、二十九萬餘圓、同十二年には二千三百萬斤、二十五萬餘圓を産した。從來鱗狀黒鉛は内地或は内地を経て外國殊に米國に輸出せられ、直接海外に輸出せられたるもの殆んどなく、内地に在りては戦前迄は錫蘭産の輸入があつた爲めこれと競争したが、戦時中錫蘭産の輸入杜絶の爲め一時内地市場を獨占した。されど近時再び錫蘭産の輸入を見るに至り、これが爲め少からず打撃を蒙りて沈衰するに至つた。土狀黒鉛は戦前に在りては内地に於て殆ん

ど需要なく、全部直接に内地を経て海外に輸出せられ、その輸出先は戦前に於ては主に獨逸、白耳義であつたが、戦後は英國、米國に輸出せらるゝに至り、戦時中は船腹不足、運賃昂騰等の爲め輸出を減じたる上に、大正七年以來、米國の黒鉛輸入禁止に遭遇して輸出の頓挫を來したるも、近來販路再び開け、殊に内地滿洲の需要増加に伴ひ、漸次好況に恢復しつゝある。

石 炭

朝鮮に於ける石炭鑛業は、李朝の末葉に至る迄は、只産地附近の里人により採掘せられたるに過ぎなかつたやうである。明治三十六年前後より無煙炭が漸く世に知られ、歐米人の採炭に關係するものあるに至り、また支那人によりて山東方面に輸出せられ、或は陶器製造の燃料としたことあるも振はず、主として日韓併合後その開發を見たものである。有煙炭に在りては明治二十九年、咸鏡北道慶源郡、鍾城郡の二郡に於て露人が採炭許可を得たが、著手するに至らずして止み、併合後内地人に依りて漸次開發せられて今日に及んだのである。朝鮮に埋藏せらるゝ石炭の種類は二種にして、發熱何れも大なる家庭用、煉炭用、及び海軍用燃料として著名なる無煙炭と、その質は優良でないが一部は工場用炭、及び鐵道用炭となり、大部分は暖房用に供し得べき褐炭とを産する。これ等石炭の地理的分布を觀るに、有煙炭は主として北鮮

に、無煙炭は主として西鮮地方に賦存し、未だ全く石炭の出でないのは全羅北道のみである。これ等兩種炭の賦存量に就いては、無煙炭は平壤炭田を除く外は未だ充分なる探鑛が行るゝに至らず、従つてその炭量は全く確實を缺くけれども、埋藏量大略五億噸を下るまいと稱せられ、有煙炭の量もまた甚だ多大なる見込である。

朝鮮の石炭鑛業は併合前後より漸次順調の發達を遂げ、大正三年歐洲大戰勃發後は、諸工業の活躍と海運の隆盛とに依り石炭の需要を喚起し、炭價の高騰に伴ひ炭田の開發を促進し、産額の激増を見るに至つた。即ち明治四十三年には七萬餘噸三十八萬餘噸に過ぎなかつたものが、大正三年には十八萬餘噸八十一萬餘噸となり、爾後數年間は二十萬噸内外を産したるも、大正九年には約二十九萬噸に上り、更に大正十二年には三十八萬餘噸二百七十五萬餘噸に増加した。石炭の販路には、有煙炭は殆んど全部朝鮮内の需要に供し、無煙炭は全産額の大部分を徳山燃料廠に輸送し、内地他方面の需要は極めて僅少であるが、大正十二年には三萬餘噸を移出し漸次増加の傾向あり、鮮内の需要亦漸増の趨勢を示し、尙ほ近來支那に輸出するもの年々千噸乃至四千噸あるに至つた。而して鮮内各種工業の勃興の結果は、自然石炭の採掘増加を來し、斯業の經營上極めて有利であると思はれる。

其他の鑛産品

以上は朝鮮に於ける四大鑛産の概況であるが、尙ほこの外、銅、亜鉛、タングステン、金銀銅亜鉛の混合鑛も亦四大鑛業に亞いで著名なるものであるから、簡単にその大勢を述べて見やう。

銅 既知の銅鑛を擧げると、咸鏡南道の甲山、慶尙南道の昌原、平安北道の厚昌等にして、甲山銅山は初め米國人が特許を得、明治四十三年以降引續き探鑛し、大正五年五月久原鑛業株式會社の經營に移り、一時盛況を極めたが歐洲戰後銅價暴落の爲め同年六月限り休業するに至つた。

亜鉛 亞鉛鑛床は銀鉛と共に生ずるを常態と爲すを以て、從來銀鉛鑛と認められ、その發見は實に近年のことに屬する。平安北道寧邊郡蘇民洞、咸鏡南道端川郡檢德に於ける鑛床はその主要なるものにして、共に往古銀鉛山として稼行し、共生せる多量の亞鉛鑛は遺棄せられて居た。それを前者は一時藤田鑛業株式會社に於て探掘し、後者は探鑛中に屬して居たが、現今に於ては二鑛山共休鑛の餘儀なきに至つた。その他黃海道載寧郡龍山面蒼川里、及び瑞興郡内德面勺詩里等に於ける鑛床も、また望を屬せらるゝものがある。

タングステン鑛 歐洲戰爭勃發後軍事上の必要に促されタングステンの需要増加したるを以て、これが

發見探掘に従事するもの多く一時盛況を極めたが、大正七年下半年以降市價低落し、加ふるに需要著しく減少したる爲め、一般に事業を緊縮して休山廢鑛するもの續出し、同八年末に於ては全部廢止するに至つた。既知鑛床中江原道金剛山附近、忠清北道忠州郡、及び忠清南道靑陽郡に存するものはその主要なるものにして、その他諸所に發見せられたものも亦尠くない。

金銀銅亜鉛の混合鑛 この種鑛床も亦昔時銀鉛として稼行せられたるものにして、朝鮮内各地方殊に南鮮地方に多く賦存し、鎮南浦製鍊所の開設せらるゝに及び漸次その開發を見るに至つたが、近時一般鑛業の不振と共にその探掘は減少した。

大理石

以上の諸鑛産の外に、大理石も亦著名なるものである。朝鮮各道に産する約五十種の大理石を見るに、朝鮮大理石の特色として擧げ得べきは、綠色系のものゝ多い點で、その色は濃淡の種々のもの、或は靑勝の綠、黃勝の綠等、種々のものを得ることが出来る。就中蛇紋石は内地のものに比し斑細くして質密に、遙に優れた良品であり、この外赤色系のものあり、平安南道順川郡より産出するものは、小豆色大理石と稱し、淡赤色に石質密に斑脈なく優美なるものである。咸北に産する紅霞大理石は、内地に於ても朝鮮大

理石の代表として古くより知られ、今までも多く用ひられた。また白及び鼠の霰石も優秀なもので、その斑點の所々光線を反射して美しい色を表し、その他、白色、淡雲、縞鼠等の優良なる石材を産出するが、只内地産のものに比し劣等なるは、更紗大理石及び黑色大理石である。試みに各地に亘り調査したる石材産出地、及び採取量見込、運搬難易の程度を示せば左の如くである。

純白大理石 平安南道江東郡馬山面下端里、採取面積約四十五町歩、採石大き二尺乃至二尺五寸、山元より大同江岸約五十間、帆船にて平壤迄約二十三里餘

淡鼠大理石 京畿道富川郡蘇來面食谷里、採取面積七百坪餘、山元より梧柳洞驛迄一里強、此間牛車運搬不可能

鼠雲大理石 黄海道金川郡古東面江亭里(岐灘)、採取面積二箇所にて一萬三千坪餘、採石大き五尺位、金郊南方鷄井驛より約二里

純白霰大理石 咸鏡北道城津郡鶴城面達利里長洞、採取面積三萬坪、城津港より西北三里十八町、楳、荷車、帆船にて城津に送る

淡鼠霰大理石 咸鏡北道城津郡鶴城面將峴里魚山洞、採取面積二箇所一萬坪、採石大き二尺乃至三尺、城津港より西方二里十八町、兩輪牛車、牛車にて運搬す

淡鼠霰大理石 咸鏡北道城津郡鶴城面達利里長洞、採石面積約三萬坪、城津港より西北三里半、楳、荷車、帆船にて城津に至る

鼠大理石 黄海道金川郡古東面江亭里(岐灘)、採取大き五六尺の見込、鷄井驛より約二里龍津江の水運に依る

藍縞大理石 京畿道開城郡楓川里、採取面積八千八百八十九坪、採石大き四、五尺以内、開城驛より二里南方、牛車にて運搬す

礬土石 全羅南道石水營黃山面、採石大き五、六寸角、現地は東方四里海岸に沿ひ運搬便なり

大理石(黑色に褐色) 咸鏡南道新興郡下元川面興慶里、採取面積約一萬坪、採取大き一尺角、現地より永興迄三十里間、擔軍荷馬、牛車、其より汽車輸送

青玉石 黄海道平山郡古之面鶴峴、採取面積二千坪採取大き二尺に三、四尺角、山元より助浦迄約二里半、牛車、助浦より禮成江に依る

水色大理石 黄海道黃州郡

青雲大理石 黄海道金川郡古東面江亭里(岐灘)、採取面積二箇所にて約一萬坪、採石大き五、六尺、鷄井驛より約二里龍津江の水運に依る

蛇紋縞石 全羅北道全州郡全州産

綠縞縞石 咸鏡南道新興郡下元川面興慶里小明太洞、採取面積約一萬坪、採取大き八尺乃至十尺、現地より永興迄三十里擔軍、荷車、牛車、其より汽車運輸

青蛇紋蠟石 咸鏡南道端川郡南斗日面梨下里新安村、採取大き十尺に六尺、現地より十八町餘にして端川街道に至るものである

綠色蠟石 咸鏡南道新興郡下元川面興慶里禁牌嶺、採取面積約一萬坪、採石大き四尺角

蓬色蠟石 咸鏡南道端川郡南斗日面梨下里

濃綠色蠟石 咸鏡南道端川郡南斗日面梨下里

蛇紋大理石 京畿道楊平郡湯平面、採取大き四尺角位、漢江により江口まで三里位

黃黒村雲蠟石 咸鏡南道端川郡南斗日面堡巨里梨上里、採取面積五千坪、採取大き四尺五寸角、採取地より端川港迄約十里間は荷車、牛車、元山港迄汽船とす

黃縞大理石 黃海道海州郡

黃玉石 咸鏡南道端川郡南斗日面堡巨里梨上里、採取面積約五千坪、採取大き四尺角位、山元より端川迄約十里荷車、牛車に依り搬出す

虎斑蠟石 咸鏡南道端川郡南斗日面堡巨里梨上里、採取面積約五千坪、採取大き四尺五寸角、端川迄約十里、荷馬、牛車にて其より元山港迄汽船

綠大理石 京畿道長湍郡長湍面社梅里、採取面積約五千坪、採取大き二尺角以内、山元より開城驛迄約四里を牛車に依りて運搬す

赤霞大理石 咸鏡北道咸津郡鶴城面將峴里魚山洞、採取面積二箇所にて約一萬坪、採取大き二、三尺角、咸津港より西方二里十八町牛車に依る

蠟石 全羅南道右水營黃山面、採取大き五六寸角

大和櫻大理石 平安南道順川郡慈山面青龍里、採取面積三千坪、採取大き四、五尺、山元より慈山迄約一里、帆船にて平埽迄約二十六里餘

赤縞大理石 黃海道金川郡古東面江亭里(岐灘)、採取大き二尺角、龍津江に依る

紅縞大理石 黃海道金川郡古東面舊邑里帝釋山、採取面積五、六百坪、採取大き二、三尺、鷄井驛迄十五六町牛車運送

濃綠色蠟石 咸鏡南道端川郡南斗日面梨下里新安村、採取大き六尺位、端川港より九里十八町荷馬車、牛車にて搬出す

黃縞大理石 咸鏡北道咸津郡鶴城面達利里細洞

黃綠色蠟石 咸鏡南道端川郡南斗日面堡巨里梨上里、採取面積約五千坪、採取大き四尺五寸位

綠色蠟石 咸鏡南道新興郡下元川面富興里九勝谷峯、採取面積一萬坪、採取大き四尺角位

黃霞玉石 咸鏡南道端川郡南斗日面堡巨里梨上里、採取面積約五千坪、採取大き四尺角位、端川港迄約十里、荷馬牛車にて搬出す

白村雲大理石 京畿道楊州郡伊淡面安興里、採取面積約四千坪、採取大き六尺乃至八尺、東豆川驛より西方十八町、楯、

渡船、人車にて運搬す

水色大理石

京畿道楊州郡伊湊面安興里、採取面積、運送方法等は前者に同じ

黄色村雲大理石

咸鏡南道端川郡南斗口面堡巨里梨上里、採取面積約五千坪、採取大き四尺五寸角、荷馬車、牛車、馬背等に依り端川港に出す

青斑大理石

咸鏡南道端川郡南斗口面堡巨里梨上里の河向ひ、採取面積不明、採取大き十尺位

蛇紋大理石

京畿道楊平郡楊平面、採取面積不詳、採取大き三、四尺、漢江に依り江口迄三里

黒大理石

黄海道金川郡古東面江亭里、採取面積約五六百坪、採取大き二、三尺位の板物、山元より四、五町にして龍津江により水運を利用す

青黄大理石

咸鏡北道咸津郡鶴城面達利里細洞

網目形蠟石

咸鏡南道新興郡下元川面富興里

高嶺土・硅砂

朝鮮半島は到る處に良好なる、陶土、磁土、陶石、硅砂、石灰石等を産し、陶磁器、硝子、耐火煉瓦、埴塙、セメント、瓦、土管、其他の窯業原料が頗る豊富で、就中最も著名なものは、慶尙南道山清、河東

等の諸郡に産する純白磁土、慶尙南道固城郡に産する白磁土、黄海道海州郡に産する白色陶土、咸鏡北道鏡城郡に産する強粘性磁土、平安南道の大同、成川、江西、黄海道の遂安、長淵、江原道の楊口、慶尙北道の慶山、青松、慶尙南道の金海、昌原等に産する陶石、平安南道平壤附近の木節、全羅南道及び慶尙南道の蠟石、全羅南道の大黒山島、黄海道の巡威島、九味浦等に産する硅砂等である。その他、素焼物、土管、瓦、煉瓦等の原料土は無限に採取し得、また黒鉛、石英、長石等も各地に産し、これ等窯業原料の産額豊富にして、品質の良好なることは遙かに内地を凌駕して居る。殊に窯業原料中著名なるは高嶺土及び硅砂であるが、最近に於けるその年産額は、高嶺土二千五百七十二噸、硅砂一億二千二百二十七萬四千五百五十七斤に達し、その埋藏量は頗る豊富にして、硅砂の如きは、大正五年以來年々輸移出を爲し、大正十三年には、その輸移出額五萬四千八百十噸、十八萬六千八百三十八圓に達して居る。

第二節 鑛産品産額

朝鮮に於ける主要鑛産品の説明をしたから、各種鑛産品の累年産額、及び各道別産額、並に鑛山別産額を左に示して見やう。

第八章 鐵產物

年次別	種別	明治四十三年		同四十四年		年	三					
		價額	數量	價額	數量		合	咸鏡北道	咸鏡南道	江原道	平安北道	平安南道
粗鉛	斤	101,770	4,463	163,968	4,771	4,500,331	1,400	1,900	4,400	3,800	1,200	
		101,770	4,463	163,968	4,771	4,500,331	1,400	1,900	4,400	3,800	1,200	
亞鉛	貫	42,463	1,000	42,463	1,000	7,180	3,150	900	4,450	1,000	1,150	
		42,463	1,000	42,463	1,000	7,180	3,150	900	4,450	1,000	1,150	
水銀	斤	101,770	4,463	163,968	4,771	3,933,368	1,971	26,177	20,090	17,899	25,290	
		101,770	4,463	163,968	4,771	3,933,368	1,971	26,177	20,090	17,899	25,290	
鐵	噸	101,770	4,463	163,968	4,771	1,770,791	1,550	1,400	1,400	2,600	4,950	
		101,770	4,463	163,968	4,771	1,770,791	1,550	1,400	1,400	2,600	4,950	
鐵	噸	101,770	4,463	163,968	4,771	453,363	1,971	26,177	20,090	17,899	25,290	
		101,770	4,463	163,968	4,771	453,363	1,971	26,177	20,090	17,899	25,290	
タンクス	貫	101,770	4,463	163,968	4,771	170,773	1,550	1,400	1,400	2,600	4,950	
		101,770	4,463	163,968	4,771	170,773	1,550	1,400	1,400	2,600	4,950	
水鉛	貫	101,770	4,463	163,968	4,771	101,770	1,550	1,400	1,400	2,600	4,950	
		101,770	4,463	163,968	4,771	101,770	1,550	1,400	1,400	2,600	4,950	
金銀銅鉛	貫	101,770	4,463	163,968	4,771	101,770	1,550	1,400	1,400	2,600	4,950	
		101,770	4,463	163,968	4,771	101,770	1,550	1,400	1,400	2,600	4,950	

朝鮮の物産

年次別	種別	大正十五年		昭和元年		年	大									
		價額	數量	價額	數量		合	慶尙南道	慶尙北道	全羅南道	全羅北道	忠清南道	忠清北道	京畿道	大正十五年	昭和元年
粗鉛	斤	101,770	4,463	163,968	4,771	4,500,331	1,400	1,900	4,400	3,800	1,200	2,863	6,379	2,863	6,379	
		101,770	4,463	163,968	4,771	4,500,331	1,400	1,900	4,400	3,800	1,200	2,863	6,379	2,863	6,379	
亞鉛	貫	42,463	1,000	42,463	1,000	7,180	3,150	900	4,450	1,000	1,150	7,286	1,150	7,286	1,150	
		42,463	1,000	42,463	1,000	7,180	3,150	900	4,450	1,000	1,150	7,286	1,150	7,286	1,150	
水銀	斤	101,770	4,463	163,968	4,771	3,656,600	1,971	26,177	20,090	17,899	25,290	3,656,600	1,971	26,177	20,090	
		101,770	4,463	163,968	4,771	3,656,600	1,971	26,177	20,090	17,899	25,290	3,656,600	1,971	26,177	20,090	
鐵	噸	101,770	4,463	163,968	4,771	1,770,791	1,550	1,400	1,400	2,600	4,950	1,913	3,495	1,913	3,495	
		101,770	4,463	163,968	4,771	1,770,791	1,550	1,400	1,400	2,600	4,950	1,913	3,495	1,913	3,495	
タンクス	貫	101,770	4,463	163,968	4,771	170,773	1,550	1,400	1,400	2,600	4,950	170,773	1,550	1,400	1,400	
		101,770	4,463	163,968	4,771	170,773	1,550	1,400	1,400	2,600	4,950	170,773	1,550	1,400	1,400	
水鉛	貫	101,770	4,463	163,968	4,771	101,770	1,550	1,400	1,400	2,600	4,950	101,770	1,550	1,400	1,400	
		101,770	4,463	163,968	4,771	101,770	1,550	1,400	1,400	2,600	4,950	101,770	1,550	1,400	1,400	
金銀銅鉛	貫	101,770	4,463	163,968	4,771	101,770	1,550	1,400	1,400	2,600	4,950	101,770	1,550	1,400	1,400	
		101,770	4,463	163,968	4,771	101,770	1,550	1,400	1,400	2,600	4,950	101,770	1,550	1,400	1,400	

大正元年	二年		三年		四年		五年		六年		七年		八年		九年	
	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量
三三、五三	二〇一、八四六	一四九、〇四九	三三、九七五	一八二、〇三四	二九三、一四四	三三九、一五七	三四七、〇八九	二四五、四八八	三六五、七四四	四〇〇、六三三	一九九、九七七	四〇六、六一	四、五二四	三、九四四	四、一九八	八、二六六、八三三
三三、五三	二〇一、八四六	一四九、〇四九	三三、九七五	一八二、〇三四	二九三、一四四	三三九、一五七	三四七、〇八九	二四五、四八八	三六五、七四四	四〇〇、六三三	一九九、九七七	四〇六、六一	四、五二四	三、九四四	四、一九八	八、二六六、八三三
三三、五三	二〇一、八四六	一四九、〇四九	三三、九七五	一八二、〇三四	二九三、一四四	三三九、一五七	三四七、〇八九	二四五、四八八	三六五、七四四	四〇〇、六三三	一九九、九七七	四〇六、六一	四、五二四	三、九四四	四、一九八	八、二六六、八三三
三三、五三	二〇一、八四六	一四九、〇四九	三三、九七五	一八二、〇三四	二九三、一四四	三三九、一五七	三四七、〇八九	二四五、四八八	三六五、七四四	四〇〇、六三三	一九九、九七七	四〇六、六一	四、五二四	三、九四四	四、一九八	八、二六六、八三三

同	同		同		同		同		同		同		同		同	
	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量
三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五
三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五
三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五
三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五	三、五〇四	三〇、五〇四	四、七九五

年次道別	累												種	合	咸鏡北道			
	同四年		同三年		同二年		大正元年		同四十四年		明治四十四年					計	價額	數量
	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量						
砒																		
鑛雲母													三、八六六	三、〇七四				
黑鉛													二、四一四	三、九四三				
石炭	九、一三〇、六六六	九、一三〇、六六六	一〇、八九五、九二八	一〇、八九五、九二八	二五、二八六、三三三	二五、二八六、三三三	二〇、四九九、三三三	二〇、四九九、三三三	一七、三三三、一六三	一七、三三三、一六三	一六、九〇六、五	一六、九〇六、五	二、二四一、九四一	三、九四三	九、九七五			
石綿																		
高嶺土																		
砂																		
價額合計	二、五〇七、七	二、五〇七、七	三、九一〇、七	三、九一〇、七	五、七〇〇、二	五、七〇〇、二	四、七〇〇、二	四、七〇〇、二	三、七〇〇、二	三、七〇〇、二	三、六〇〇、二	三、六〇〇、二	三、五二〇、二	六、〇一八				

年	正												種	合	咸鏡北道						
	咸鏡南道		江原道		平安北道		平安南道		黃海道		慶尙南道					慶尙北道		全羅南道		全羅北道	
	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量				價額	數量	價額	數量	價額	數量
砒																					
鑛雲母																					
黑鉛																					
石炭	二、七五、九六五	二、七五、九六五	五、五、一九七	五、五、一九七					一、七三、七六六	一、七三、七六六	一、七三、七六六	一、七三、七六六	一、七三、七六六	一、七三、七六六	一、七三、七六六	一、七三、七六六	一、七三、七六六	一、七三、七六六			
石綿																					
高嶺土																					
砂																					
價額合計	二、七五、九六五	二、七五、九六五	五、五、一九七	五、五、一九七					一、七三、七六六	一、七三、七六六	一、七三、七六六	一、七三、七六六	一、七三、七六六	一、七三、七六六	一、七三、七六六	一、七三、七六六	一、七三、七六六	一、七三、七六六			

種	年			三			種別	數量	價額	
	合	咸鏡北道	咸鏡南道	江原道	平安北道	平安南道				黄海道
鑛	計	價	數	價	數	價	數	價	數	
鑛山名	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	
鑛區所在地	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
鑛業權者	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
鑛別數量	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
鑛別價額	同	同	同	同	同	同	同	同	同	

鑛山別產額統計 (大正十三年)

鐵	江華鐵山	京畿道江華郡	朝鮮鐵山株式會社	鐵	四、九三三	三、〇六四
砂	稷山金鑛	忠清南道天安郡	稷山金鑛株式會社	砂	七、八七〇	四、〇六五
金	林川鑛山	扶餘郡	久原鑛業株式會社	金	三、六九〇	九六、五九一
金	九峰山金鑛	青陽郡	外城市郎	金	四、三〇〇	一四、四三〇
金	龍城鑛山	同	芥川將二郎	青	五、四三〇	一七、七二三
金	幡岩金鑛	全羅北道長水郡	朴勝民	青	一、九〇〇	三、三三五
金	光陽金鑛	全羅南道光陽郡	野口道	金	四、八、六六〇	二、一四〇
砒	七寶鑛山	慶尙北道英陽郡	朝鮮砒酸鑛業株式會社	砒	七、四八、七五五	一、三三、一二〇
金	高靈鑛山	同	佐藤周藏	金	三、五三三	五、二五三
金	明法金鑛山	同	谷口與四郎	青	一、五〇、〇〇〇	九、〇〇〇
金	鳳鑛山	慶尙南道陝川郡	高田鑛業株式會社	金	四、一〇、五〇〇	二、一三三
銀	統營鑛山	同	久原鑛業株式會社	銀	一、一七、八	二、四三七
統營鑛山	同	統營郡	同	銀	二、〇〇〇	二、一六六
統營鑛山	同	統營郡	同	銀	一、〇七、六	四、三三
統營鑛山	同	統營郡	同	銀	一、三九、一〇七	一、四、九六九

金	龍城鑛山	同	昌原郡	馬木辰次郎	同	三萬、九三六	一一、三三七
金	咸安鑛山	同	咸安郡	久原鑛業株式會社	金銀銅鑛	一萬、四六九	三六、三三一
一切鑛物	遂安鑛山	黃海道遂安郡	コレアン、シンヂケート、リミテツト	同	六、〇九八	二五、六二四	
金	栗浦金山	同	延白郡	谷口與四郎	金	一、四九、二〇三	一、九〇九、一五三
金	松禾鑛山	同	松禾郡	柴田鈴三	銀	一一、三三五	四三、九五六
銀鉛亞鉛鐵	銀華山鑛山	同	瑞興郡	日本金屬株式會社	亞鉛	二七、〇七〇	一七、四三三
鐵	兼二浦鑛山	同	黃州郡	三菱製鐵株式會社	鐵	一一、九三三	三三、九九四
鐵	黃州鑛山	同	同	朝鮮鐵山株式會社	鐵	一五、四二七	一八、七四九
鐵	南陽鑛山	同	載寧郡	三菱製鐵株式會社	同	六、一四七	三七、九三七
鐵	銀山面鑛山	同	同	同	同	二七、三五〇	二四六、一四九
鐵	載寧鑛山	黃海道載寧郡	同	商工省	同	四三、七六二	三、〇九二
鐵	股栗鑛山	同	股栗郡	同	同	三、〇三七	二五九、一〇四
鐵	安岳鑛山	同	安岳郡	朝鮮鐵山株式會社	同	二六、八四九	三三、八四二
金銀銅鉛	樂山鑛山	同	長淵郡	小瀧元司	金鐵鉛鑛	五、九六九	三、三五七
					銀	五、四〇三	八二四
					鐵	一八五、三三三	四七、九八八

金銀銅鉛	三德鑛山	平安南道成川郡	久保順吉	金銀鑛	三〇七、一八〇	二四、〇八九
鐵	价川鑛山	同	株式會社日本製鋼所	鐵	五六、〇二八	二六、二二六
一切鑛物	雲山鑛山	平安北道雲山郡	オリエタルコンソリテド、ツトマイニングコムパニー	金	五一、九四一	二、五六、〇三〇
金	日峰鑛山	同	宜川郡	池邊惣市	三九〇、六七七	六、二五〇
金	三成鑛山	同	龜城郡	崔昌學	一一、五八三	三、三三七
一切鑛物	昌城佛人鑛山	同	昌城郡	マリイ、エリザベージェ、イサルダレ	三〇〇、〇〇〇	八六、〇〇〇
金	桃花洞鑛山	同	宣川郡	金昇鉉	一〇一、七一八	三五五、九七七
金	泉浦金山	江原道旌善郡	崔應鎬	青金鑛	五四、〇〇〇	一六、五六六
金	北洞金山	同	金炳球	青金	四、八三五	二、五七七
金		同	金允玉	青金	二九、六七五	七五、四三七
金		同	金炳球	青金	二九、六七五	二、二六六
金		同	金允玉	青金	三七、六三二	一一、二六六
銀	輪洞里鑛山	咸鏡南道永興郡	藤田鑛業株式會社	青金	三、六〇〇	一〇、八〇〇
鐵	利原鑛山	同	利原鐵山株式會社	鐵鑛	一〇六、八三三	一、一三四
金	堀勒山鑛山	咸鏡北道會寧郡	堀交茂	鐵鑛	一、〇一三	一五、〇八六
黑鉛(土狀)	月明鑛山	忠清北道沃川郡	山野秀一	黑鉛	五五、一九七	二七、九九五
				鐵鑛	六、七三三	七、五〇〇
				亞鉛	二九、七四六	二、五五五
				鐵鑛	二六、一七〇	一、九七〇
				鉛	三、九九九	三九、五九九

石	炭	會寧炭礦	同	藤田好三郎	同	七四九、九五〇	七四、九〇〇
石	炭	羅南炭礦	鏡城郡	飯田繁藏	同	五、〇三九、九四〇	五〇、五九九
石	炭	浦社炭礦	同	浦社東策	同	二、七三六	一五、八六八
石	炭	生氣嶺炭礦	同	生氣嶺粘土石炭株式會社	同	二九、八七五	一七、四四五
石	炭	同	同	同	同	三七九	六、八八九
高嶺土	加沙島鐵山	全羅南道珍島郡	株式會社名古屋製陶所	同	同	一、六六一	一六、四〇〇
硅砂	大黑山島硅砂礦	同	旭硝子株式會社	同	同	二、四四五、六〇〇	二七、〇六〇
硅砂	九味浦硅砂礦	黃海道長淵郡	同	同	同	六、七四二、四〇〇	一六、一五七
硅砂	同	同	日米板硝子株式會社	同	同	一六、一九六、一五七	三三、〇三三
硅砂	同	同	笠原種吉	同	同	一六、八〇〇、〇〇〇	三三、二八〇
雲母	砲子礦山	咸鏡南道端川郡	關島吉雲	同	同	三七、五〇〇	三〇、〇〇〇

備考 本表は一箇年に於ける鑛産價額一萬圓以上のもののみを掲げた。

第三節 鑛産品貿易

大正十四年に於ける鑛産品の輸移出額中最も大なるものは、銑鐵の四百五十九萬九千圓にして、之に亞ぐものは石炭の二百十三萬一千圓、金鑛の百四十萬一千圓、鐵鑛の九十一萬八千圓、黑鉛の七十萬九千圓等である。また鑛産品の輸移入額中最も大なるものは石炭の七百六十七萬八千圓を筆頭とし、石油の五百

四萬八千圓、揮發油の百七十萬七千圓、鐵(條及竿)の百六十萬三千圓、機械油の九十五萬九千圓、銅の六十萬四千圓等の順序であるが、今試みに各種鑛産品の併合後の貿易狀況を示すと左の如くなつて居る。

鑛産品輸移出統計

年次	石炭	金	鑛
明治四十三年	七二七、七四		
同 四十四年	八六、八八五		
大正元年	八六、四三		
同 二年	九二、六二五		
同 三年	一一〇、四〇五		
同 四年	一六五、〇三五		
同 五年	一一三、六四〇		
同 六年	一一三、九三三		
同 七年	一一〇、三二五		
大正八年	三六二、四一九		
同 九年	三七六、四二七		
同 十年	三三四、三八一		
同 十一年	三五七、七九七		
同 十二年	四五八、一八四		
同 十三年	六二九、一七五		
同 十四年	四六八、八八八		
同 十五年	四七三、〇三三		
昭和元年	五七九、六四一		
大正八年	八七、八四六		
同 九年	一五、四九八		
同 十年	二九、六六七		
同 十一年	一一、九八七		
同 十二年	一一五、二四九		
同 十三年	一四六、八六七		
同 十四年	二二、六三二		
大正八年	六四〇、一〇六		
同 九年	一一〇、一八三		
同 十年	一、二八〇、七六七		
同 十一年	一、一三三、九九〇		
同 十二年	一、二二四、九九四		
同 十三年	一、四七四、九四八		
同 十四年	二、一三二、三六〇		

年次	鐵	鑛
明治四十三年	二、〇〇七、五九九	
同 四十四年	一、三三六、九七三	
大正元年	一、五三一、三三二	
同 二年	三、六二二、三九二	
同 三年	一〇、〇五九、七八八	
同 四年	一三、三四四、二七八	
同 五年	八、三三六、六五九	
同 六年	一三、八四九、〇三〇	
同 七年	三三、一〇六、〇五六	
大正八年	五、一七四、三二	
同 九年	二、三四、八八一	
同 十年	二、七四、九三六	
同 十一年	三、九二、四〇〇	
同 十二年	五、六九、七三三	
同 十三年	九、二九、六八九	
同 十四年	二、五三、五九六	
同 十五年	五、〇五、八八三	
昭和元年	一、五三八、二二五	
大正八年	三〇、一五一、七八六	
同 九年	二、八三二、五九五	
同 十年	五、六、三八五、七九〇	
同 十一年	二、六、〇三〇、九五二	
同 十二年	二、七〇、六七八、八三三	
同 十三年	三、四、三三四、二二七	
同 十四年	三、六、七八〇、八五	
大正八年	一、二、三、一、六三九	
同 九年	一、一、七、六、六五六	
同 十年	二、四、九、九、三三二	
同 十一年	二、五、五、三、一八一	
同 十二年	二、二、四、〇、七四三	
同 十三年	二、四、七、五、二二七	
同 十四年	一、四、〇、一、六五〇	

年次	鐵	鑛
明治四十三年	一、七、六、二、〇六六	
同 四十四年	一、六、四、〇、五七八	
大正元年	二、〇、四、一、五八一	
同 二年	二、二、七、六、八五三	
同 三年	二、八、八、六、八六五	
同 四年	三、三、九、八、九九二	
大正五年	三、三、九、八、六一	
同 六年	二、七、八、六、九二	
同 七年	三、一、六、八、八	
同 八年	三、四、八、五、九二	
同 九年	四、一、八、四、四四	
同 十年	五、〇、一、九、五〇	
大正五年	三、六、五、二、〇〇六	
同 六年	二、四、七、五、一七八	
同 七年	四、一、七、六、二五九	
同 八年	五、九、〇、六、〇八九	
同 九年	五、七、七、七、七五二	
同 十年	三、三、三、四、四三	
大正五年	五、六、八、六、一七	
同 六年	四、一、五、一、〇九	
同 七年	一、一、五、五、八〇六	
同 八年	二、四、三、三、四三六	
同 九年	三、四、七、七、六九〇	
同 十年	一、七、七、九、四六三	

朝鮮の物産

大正十一年	二四九七、二二一	七六七、九九九
同十二年	一五八九、八三一	一七、五七、一四
同十三年	二二七八、七九〇	九、四四、六〇八

四八六

銑

鐵

年次	數量	價額	年次	數量	價額
大正七年	七〇、一〇、八九一	一五、四三、二七五	大正十二年	一三七、三八、一二一	五、七三、六六三
同八年	一〇九、七四、八三一	一〇、二七、六三八	同十三年	一三三、八七、〇五一	四、五三、九二七
同九年	七〇、五三、六九六	六、〇四、五七五	同十四年	一四〇、六五、一六四	四、五九、九五四
同十年	八〇、三三、六〇六	四、〇八、八〇四	昭和十五年		
同十一年	一三三、九九、二八五	六、三二、一三四			

鐵條竿及び板

年次	數量	價額	年次	數量	價額
大正八年	五〇、九〇、五八七	八、八八、一六六	大正十二年	七五、三二、二〇三	七、三一、一八四
同九年	二五、三三、〇七八	五、三五、七七〇	同十三年	三九、六一、二三五	三、三六、五八四
同十年	三六、〇二、九五六	四、五五、七八八	同十四年	二〇、八〇、七九四	一、五三、六三四
同十一年	二〇、九四、八四八	二、六〇、〇二〇	昭和十五年		

黑鉛

鉛

年次	數量	價額	年次	數量	價額
明治四十三年	一一三、一六、二	一、四二、〇六	大正八年	二二五、三九〇	五、五〇、三五〇
同四十四年	一一三、〇、六	一、三三、二九	同九年	三〇三、八〇六	九、七一、一九六
大正元年	一五五、〇六三	一、六五、二七九	同十年	一三三、三六七	五、一〇、三三〇
同二年	二四一、九七三	二、四八、八五八	同十一年	三三二、一六九	一〇、一九、八七〇
同三年	一五三、二二六	一、九二、一八七	同十二年	二四六、二六九	六、〇五、〇三九
同四年	一七二、一九八	二、〇二、六九一	同十三年	二六七、一九七	七、七八、〇三五
同五年	二八二、二二六	五、七六、七九一	同十四年	二五〇、六七三	七、〇九、一三五
同六年	二六九、二七〇	一、五三、一三三	昭和十五年		
同七年	二二七、二七八	一、二六、四四三			
年次	數量	價額	年次	數量	價額
大正五年	一四、三三、九	二、四六、二四	大正十一年	四四、一〇、三	一、三三、七五六
同六年	一八、四二、二	六、〇七、八五	同十二年	一八、七、五五	七、二、三三九
同七年	三〇、七、九四	八、八三、二二	同十三年	六〇、四、九三	二、三〇、八二八
同八年	三三、三、三一	八、二七、四一	同十四年	七五、九、一六	二、四六、七〇七
同九年	三三、三、九一	六、四四、七九	昭和十五年		
同十年	三三、九、一〇	八、九四、四七			

第八章 鑛産物

四八七

鑛産品輸移入統計

年次	石炭		年次	鐵 (條及び竿)	
	數量	價額		數量	價額
明治四十三年	一三〇,三六七	七九四,九三七	同十一年	一八七,四〇三	一六〇,六五〇
同四十四年	二五五,四一	一,三三四,九三〇	同十二年	三三三,〇一九	二〇七,四五二
大正元年	三〇六,三三〇	一,五二五,三六三	同十三年	一六〇,一九七	一七五,五三三
同二年	三七三,一一五	一,七〇〇,二一九	同十四年	一七〇,〇九三	一六〇,三〇五
同三年	三五五,九九一	一,七四一,六三五	同十五年	一七〇,〇九三	一六〇,三〇五
同四年	三八二,六六七	一,七〇二,二八二	昭和元年	一四三,三五	一三〇,七六一
同五年	四〇二,二七一	一,八三九,六七八			
同六年	六二七,六〇〇	三,五九八,三七三			
同七年	七五〇,八四〇	八,三七六,〇二一			
明治四十三年	三,一八二,八八二	一,五四〇,〇三九	大正八年	一三,七三三,三五六	二,一〇六,三三四
同四十四年	四,九六九,七七七	二,三六二,一五	同九年	六,七五四,四七三	九七五,六〇六
大正元年	八,八六二,〇三五	三,九三二,一八二	同十年	一四,三三五,一八九	一三〇,七六一

年次	鐵 (板)		年次	銅	
	數量	價額		數量	價額
同二年	七,八二七,七八九	三,五二〇,四〇〇	同十一年	一八七,四〇三	一六〇,六五〇
同三年	一一,六五二,八四〇	五,四七七,七七	同十二年	三三三,〇一九	二〇七,四五二
同四年	四,六二〇,六三三	三〇〇,六八一	同十三年	一六〇,一九七	一七五,五三三
同五年	五,三七八,四〇九	六,二四二,七六	同十四年	一七〇,〇九三	一六〇,三〇五
同六年	八,一七〇,六六五	一,五三〇,二七六	同十五年	一七〇,〇九三	一六〇,三〇五
同七年	八,六八三,三二四	二,二一九,八二〇	昭和元年	一四三,三五	一三〇,七六一

年次	鐵 (板)		年次	銅	
	數量	價額		數量	價額
明治四十三年	一,一三三,七四八	六三九,九〇七	大正八年	二,九二〇,一八	六〇八,七三四
同四十四年	一,九九二,五二二	一〇一,五〇四	同九年	一,六六六,六〇〇	二六五,一〇二
大正元年	二,五五五,六〇〇	一,二七,三三四	同十年	三,四二四,〇六一	三五五,五六一
同二年	二,二四,二二〇	一,三三,五二五	同十一年	五,〇五一,六一九	四八,七二二
同三年	二,〇九三,二二八	一〇二,五八三	同十二年	五,〇八五,九六六	六〇六,四五三
同四年	一,五五四,八四六	一,一五二,三九	同十三年	四,〇七三,七二四	四九二,八九三
同五年	一,八九一,八三三	二,三三,三六三	同十四年	三,七九六,九二二	四三六,八〇四
同六年	一,六八八,〇六六	四一〇,八一九	同十五年		
同七年	一,四四九,四八五	六〇二,二二三	昭和元年		

朝鮮の物産

年次	數量	價額	年次	數量	價額
明治四十三年	三二七,九五九	二二,三四九	同十四年	二六九,四二一	一七,〇二二
同四十四年	五六〇,五七六	一九六,九二六	同十五年	一,八七五,二〇一	一,〇七二,〇二二
大正元年	六〇九,二二一	二四八,五二九	同十六年	一,五六一,六四三	八六八,一八七
同二年	五二八,五〇五	一九六,五八九	同十七年	一,八七二,八〇六	七七一,三六〇
同三年	三五〇,九六九	一四五,一三九	同十八年	二,三八五,六九八	一,〇六〇,九八一
同四年	二四三,三四九	一〇二,九三五	同十九年	一,八九〇,九八三	九四三,四一七
同五年	一七五,六二二	一七二,七七〇	同二十年	九五一,四〇九	五〇三,三九〇
同六年	一〇四,三〇七	一六五,八七七	同二十一年	一,〇四三,七六四	六〇四,四〇五
同七年	五八一,四七八	四〇六,八〇七	同二十二年		
明治四十三年	六三,五九一	四七,九二七	大正八年	三五二,四七四	四七二,九一六
同四十四年	一三五,七三〇	八六,三六八	同九年	二七七,三七五	四一四,五二五
大正元年	一一九,七八八	一〇四,五二五	同十年	四三三,九九三	三九四,九四四
同二年	一七〇,七七一	二〇,九七三	同十一年	三九四,五六九	三六四,〇八三
同三年	六四三,〇〇四	六二,九三〇	同十二年	三三五,八三三	三九五,四九七
同四年	四〇,一五一	三六,九二一	同十三年	三三三,二三四	五〇六,三三三

四九〇

年次	數量	價額	年次	數量	價額
同五年	六二,八三七	六二,三八九	同十四年	二六九,四二一	五二四,三九六
同六年	九五,四七五	一一七,八一五	同十五年		
同七年	二八,四九九	二四七,二九〇	大正八年	一〇〇,一九六	八二,〇九五
明治四十三年	七,九六,二八八	一,二六二,一六〇	同九年	一〇一,四一四	七九,三六三
同四十四年	七,九六,六四九	一,四三六,一五三	同十年	六六,九六八	四三,四一四
大正元年	九,〇七,九九一	一,七〇,三九九	同十一年	六六,七五五	三,五八四,九九七
同二年	九,二四,九七〇	二,〇三三,一九七	同十二年	九七,一六,三六〇	四,一七一,一七〇
同三年	七,四五,〇三五	一,四八六,八八五	同十三年	八九,一三,二三八	三,八五九,六〇三
同四年	八,一〇,二二二	一,七〇,一七八〇	同十四年	一一,六六,〇五七	五,〇四八,六三八
同五年	六,八七,〇一七	二,三三六,五〇九	同十五年		
同六年	六,六〇,四二八	二,六五一,二三三	昭和元年		
同七年	六,二五,八八三	二,六一〇,五七七	大正十四年	二,八九五,七七七	一,七〇七,六七二
大正十一年	八八六,〇六四	七九四,七二四	同十五年	一,〇六二,八三二	
同十二年	一,〇七四,三九四	一,〇六二,八三二	昭和元年	一,四六五,七六四	
同十三年	一,六五三,九〇六	一,四六五,七六四			

四九一

第八章 礦産物

年次	數量	價額	年次	數量	價額
大正三年	一九八、九七三	一四、一三三	大正十年	四三六、八九八	七一九、三五〇
同四年	一六九、一九七	九九、七六六	同十一年	九七九、〇七三	一、一三四、七四
同五年	二六五、五三〇	一八七、五四九	同十二年	五、五五七、五一〇	七七一、二六四
同六年	二六三、五四〇	二六〇、六三七	同十三年	七、六九八、〇四五	一、〇四四、九三三
同七年	三、九〇九、二七八	六三四、〇三六	同十四年	七、三四三、三六九	九五九、九九三
同八年	四、四九九、二二七	七八〇、四三〇	昭和十五年		
同九年	五、四四九、五六三	一、〇二二、三六三			

バラフィンワックス

年次	數量	價額	年次	數量	價額
大正三年	一、二四九、八三六	一三三、一六三	大正十年	六、七五八、九六	一、六六、三四
同四年	六、二五七、七五二	六三三、三六	同十一年	一、八七七、六二	三三九、一六三
同五年	一、三九九、一五四	一八九、〇四二	同十二年	一、〇一四、四六四	一九二、一八五
同六年	一、〇四三、八六二	一三二、九五二	同十三年	一、八五〇、一四	四〇〇、二七三
同七年	一、五四九、四六一	四一〇、七四四	同十四年	一、一六一、五三七	三四〇、三三
同八年	一、七二〇、八七九	五七六、七七	昭和十五年		
同九年	一、五一八、一五四	四五三、三三			

第九章 工業産物

第一節 主要工業産品

朝鮮の工業は昔時相當の發達を遂げた時代もあつたけれども、國力の疲弊と共に漸次衰退し、併合當時に在りては僅に家内工業又は小工場工業にその片影を留めたに過ぎない。しかもその技術は幼稚にして、使用の器具もまた不完全、従つてその製品も粗悪を極め、日常生活の必需品も大部分は輸入品を以て充當せられて居る状況である。明治三十九年統監府の設置せられるや、深く工業の奨励に意を留め、次いで總督府もまた地方廳と共に工業振興に關して大に施設計畫した。先づ中央試験所を設けて工業に關する各種の調査研究を行ひ、或は工業教育機關を創設して知識技術の養成に努め、又は補助金の交付をなして傳習指導の周到を期した。時勢の進展と相俟つて技術の進歩、製品の改良、産額の増加を促し、且つ鮮人の工業に對する思想も漸次啓發せられ、工場組織を以て事業を經營せんとするもの漸く増加の傾向を示し、一方内地實業家にして朝鮮に於ける工業經營に着目するものも次第に増加し、大正五年以來、紡績、製糖、硬質陶器、製絲、罐詰業等、相當大規模の工業經營を見るに至つた。特に最近に於ては、大日本麥酒株式會社、鐘淵紡績株式會社、日本燐寸株式會社が、朝鮮にその支工場を設置するなど、各種諸工業は漸く勃

興の機運に向つて居る。而してその發達の状況を見るに、明治四十四年に三千萬圓に過ぎなかつた工産の總額が、大正十三年に於ては二億九千餘萬圓の巨額に達し、實に約十倍に上つて居る。試みに併合當時と最近とに於ける朝鮮の工場工業の發達の状況を、内鮮外人別にして表示すれば左の通りである。

經營者別工場調

經營者別	工場數	資本金	従業者數	生産額
内地人工場	一八五	九八六千圓	一〇六二三	一六九、〇〇〇千圓
朝鮮人工場	六六	六七	二、三九七	一、九六九
外國人工場	一	一五〇	一、〇〇〇	七五〇
計	二五二	一〇、六二三	一四、一〇〇	一九、六三九
内地人工場	二、〇八五	三三、八六八	四、三五一	三六、九〇二
朝鮮人工場	二、〇〇五	一七、二九五	二一、三三三	六九、三三六
外國人工場	七八	九七三	四、三六三	四、二七九
計	四、一六八	二五、一三七	六八、〇〇六	一〇〇、三〇七

更に工業用必要なる燃料及び動力に就いて見るに、石炭は近時無煙炭、褐炭、泥炭等朝鮮産の燃料に關してその燃焼法に研究を進め、これを工業用に使用することを圖り、以て従來滿洲及び内地にその供給を仰いで居たのに代らせやうとして居るが、これが成績は頗る良好である。また工業用の動力に關しては、

發電水力調査の結果二百馬力以上の水力地點數八十、この馬力七萬六千餘馬力、この中で將來有利と認むべき主要水力地點三十九、この馬力三萬三千餘馬力を算し、該調査中に含まれない河川も少くない。更に生産原料も、總督府設置以來諸般の勸奨施設を加へた結果、これが品質も漸次向上し、その産額も亦増加し、殊に棉花、大麻、苧麻、繭、楮皮、バルブ、葡萄、牛皮、高嶺土、硃砂、石灰石、莞草、小麥、甜菜、棉實、荏、蓖麻等の製油原料、燐寸軸木、牛骨、貝殼、杞柳、蔓等の産額は著しく増加して居る。これ等の豊富なる原料及び燃料動力を大に利用し、殊に低廉なる勞力を用ふるに於ては、實に半島の經濟的開發に貢獻するのみならず、採算上より見るも極めて安全にして且つ有利である。されば内地の資本家は朝鮮の工業經營の爲めに、進んで大に投資せんことを希望する。

朝鮮に於ける主要工業としては、機業、窯業、製絲業、醸造業、鐵工業、莞草工業、製革業等がある。今これ等の概況を述ぶるに先ち、その最近に於ける生産額を擧ぐると左の如くなつて居る。

主要工業品生産額 (大正十三年)

品目	生産額	品目	生産額
精米	一五〇、一四〇千圓	釀造品	六一、三三七千圓
綿	二二、七九四	穀粉	一一、一〇六
糖	一〇、五五九	窯業製品	九、四三三

朝鮮の物産	油	脂
製材	六二七三	四九六
紙及び紙製品	四二〇八	皮革及び皮革製品
鐵製品	三九四一	柴草製品
		五六〇六
		三三〇八
		一七〇五

更に大正十三年末現在に於ける各種工場數、資本金、職工數、生産額を見ると左表の如くにして、工場數の最も多いものは、精穀業の一千五十八を第一位とし、鐵工業の三百三十四、瓦製造業の百七十五、印刷業の百七十四、製紙業の百五十三、陶磁器製造業の百二十六、金屬製品業の百二十五、清酒釀造業の百十四、木工業の百十二、炆器、素焼、土管製造業の九十六等である。

種類別工場表 (大正十三年)

種別	工場數	資本金	職工數	生産額
製綿業	六〇	三,七九四,七五〇	二〇六四	一,二七九,四九五
燃絲業	二	五〇,五〇〇	六〇	八,六五六
生絲業	一六	二,八六,一〇一〇	二,四〇八	五,六三,七〇二
染色業	四	一,一三,〇〇〇	二四	三,四,九八〇
織物業	五三	三,三四五,四八一	四,〇〇七	一,八九九,三九四
裁縫業	六二	一,〇一,一〇〇〇	一,〇五三	一,五八二,一七六
布帛加工品業	一九	八,一五〇〇	一〇	二,五五八三
編織物業	八	一,二四,〇〇〇	三三〇	一,五二,八三三

靴下製造業	二七	二一〇,一〇〇	一,一三〇	七,八八四,五七
製紙業	一五三	一,一九,四七一	一,一〇九	二,四七,八四六
紙製品業	二七	八四,〇一〇	三七二	二,三四,七八七
製革業	九	一,六九,二五〇	七一	二,四二,二六一
皮革製品業	五六	七,六八,五二一	八八六	二,二二,一六六
製材業	四八	四,二七,四〇〇	一,三〇九	六,二七,三三三
木工業	一一二	七,七〇,九八四	一,〇一〇	一,四九,六六〇
竹工業	三	四,〇〇〇	二五	七,二,五五〇
漆工業	二	二,八九,〇〇〇	七三	二,七,六四九
杷柳木通類細工業	七	七,二四,八五〇	一九一	八,六〇,五九九
石工業	五	四,二,五〇〇	三六	二,九八,一六
石粉製造業	八	二,四五,〇〇〇	一三二	二,四一,〇九九
製鐵業	一	二,五〇,〇〇〇	一〇三	七,三三,五五八
精鍊業	一三	一,一七,五三,五〇	三,三三二	三,八六,八四七
鐵工業	三四	五,一四,一七五	四,五二四	四,九四〇,六三二
金屬製品業	一五	三,七四,二五三	一,一五五	九,七〇,二七一
金銀細工業	一八	三,三六,一五	一七六	五,二一,八五五
車輛製造業	四三	七,〇五〇,八八六	一,九三五	三,三三,七,八五三

第九章 工産物

朝鮮の物産

船舶製造業	二	六三三,三〇〇	二四三	四七八,七六三
蓆製造業	六	四七一,一〇〇	一〇〇	八九,五〇四
織維細工業	一	一,三〇〇	三三	八,一三六
薬製品業	二	三,七六〇	三	七五,七九五
陶磁器製造業	二六	四,四二一,六二一	一八四二	一,〇九一,二六八
炆器素炆土管製造業	九六	一七〇,六三五	六六五	三三三,八二〇
瓦製造業	一七五	一,二一三,三四四	一,五三二	七二〇,五九六
煉瓦製造業	四	一,八八〇,七三〇	二四三七	一一九,一九五七
硝子製品業	三三	一四四,五〇〇	二七五	二五,一五四
其他の窯業	二四	八,五四七,八〇〇	七五八	二,三三三,一八一
製油業	三三	八〇八,八九三	三二	一,四六〇,四七四
石鹼製造業	二四	一,一〇一,〇〇〇	一九二	七四三,七九九
化粧品製造業	五	一四〇,五六六	二四	一,一〇〇,〇五
製薬業	三三	三,四九七,五〇〇	七六三	三,四七九,〇一六
蠟燭製造業	五	五三,九五〇	五四	四六七,六九七
燐寸製造業	二	六〇〇,〇〇〇	二八九	三〇一,二四八
染料製造業	七	一六六,六八二	八九	四三〇,一五二
煙草製造業	二	二五,〇〇〇	二三八	二,二九九,九六六

ゴム靴製造業	二六	一,二四九,五〇〇	一八二	一四,一六一
精穀業	一〇八	一九,五四七,一〇五	一七,三七八	一五〇,一四〇,一四八
製粉業	一〇	一,五四二,三〇〇	八七	三,四四〇,九二
其他の穀粉製造業	四	一三,五〇〇	二〇	三七,五六〇
製麵業	一九	九四,九〇〇	一一	三七八,二二六
寒天製造業	三	六〇,〇〇〇	七九	一〇九,八〇〇
清酒醸造業	二四	五,九七四,六二四	八五一	四,五五一,三〇八
朝鮮酒醸造業	二四	五,六四〇〇	七二	二六〇,五八二
燒酎醸造業	八三	二,一六六,一三〇	五七五	二,五四五,六六五
其他の醸造業	六	一三六,五〇〇	三五	九三,四一五
醬油醸造業	八	三,五二二,一一八	五四一	三,二二五,五三〇
味噌製造業	九	八三四,五〇〇	四五	二四六,六七四
麴及麴子製造業	七	六九,一〇〇	八	二四,七三三
菓子製造業	八二	五,三三八,八五〇	五三	一,三九三,八九八
清涼飲料製造業	二四	二,五二〇,〇〇〇	一九二	三二七,五三二
製氷業	三	七八〇,〇〇〇	二五	一七九,四九五
製鹽業	五五	一,六四七,九〇〇	六四	一,三三三,九一五
製糖業	一	五,〇〇〇,〇〇〇	一三八	一〇,五五九,一八九

第九章 工産物

朝鮮の物産

罐詰製造業	四六	八六四、三〇〇	六六四	八二二、八二三
ボタン製造業	一〇	一八五〇〇	一三三	一六、八二八
水産肥料製造業	四	一一、五〇〇	四三	一一、九四五
其他の肥料製造業	四	一五、〇〇〇	四一	一八、〇〇〇
印刷業	一七四	六、一三三、〇一六	三、三六九	六、三三二、九八九
製炭業	一〇	一、〇〇四、〇〇〇	二六	七四一、六一五
瓦斯及電気業	三五	二二、九一七、八九四	六四五	八三三、五二六
其他	一三八	一、〇七九、三七一	五、二六五	四二五、二二六
合計	三、八四五	一、六六四、〇九四六	七三、一六五	二九三、八二二、三九〇

各種工場の状況は右の通りであるが、以下工業生産品中の數種に就いて概略を説明して見やう。尤もこれは必ずしも朝鮮の主要工業品を網羅して居る譯ではなく、比較的特色あるものを挙げたのである。

綿布

綿布は各地到る處に産出されるが、就中全羅南道務安郡、高興郡、慶尙北道義城郡、慶尙南道晋州郡、平安南道龍岡郡、江西郡、京畿道京城府及び江華郡はその主要産地である。その多くは農家に於ける婦女子の副業的産物なるも、近來動力織機に依りて製造するもの漸次増加し、特に大正十一年に於て一紡績會

社の設置を見た。最近に於ける生産は年額尙ほ僅に一千餘萬圓にして、未だ鮮内の全需要を充たすに足らず、三千五百萬圓はこれを輸移入に俟つの状態に在る。農家に於て婦女子の手に依つて行はるゝものは、従來實棉を製織者自ら繰綿打綿を行ひて紡績の用に供して來たが、實棉を原料とする在來木綿はその紡績に日數を要すること多きを以て、近來經絲に紡績綿絲を用ひ工程の進捗に努め、僅に緯絲にのみ従來の實棉原料の手紡絲を用ひて、在來木綿の特色を保存するの状态である。改良木綿は全然従來の手紡絲を用ひず、經緯共に機械紡績綿絲を使用して居る。製品の種類はその原料絲又は加工方法等に依り、在來木綿、新式木綿、改良木綿、紡績木綿の四種に類別し得べく、在來木綿は上述の如く經緯共實棉を原料とせる手紡絲を用ふるものを謂ひ、新式在來木綿は經絲に紡績綿絲、緯絲に手紡絲を用ひ、改良木綿は經緯共紡績綿絲を使用せるものを云ふのである。此等の木綿中には單に白木綿のみならず、近來染絲を用ふるものも在り、また紋織木綿を製織するものも出て來た。

在來木綿の製織法は、實棉を乾燥し塵芥を除去せる後、手廻繰綿器を以て種子と繰綿とに分別し、その繰綿を木製弓と打弦棒とにて打ち、纖維を解杼柔軟ならしめ、斯くして得たる打綿を適宜の大きに擴げ、筒狀に卷いた撚綿となし、これを紡車に懸けて紡ぎ絲とする。この絲の適當數を取りて中庭等の空地に樹てた十數個の杭に掛け整經し、同時に糊付をなして乾燥し、經卷板に巻き取り在來織機に裝ひ、緯絲は前

同様の糸を交叉巻して杼に装ひ織込むのである。改良木綿の製織は、紡織綿糸を煮沸して乾燥し、次に麥粉又は蕨粉を煮たる糊液に浸して乾し、その糊付したるものが経緯であつて、これを坐繰器に依り小杼に繰返し立杭整経機にて整経する。而して後ボタン装置ある改良手織機に装置し、緯糸は糊付せない紡績綿織を竹管に巻いて織込むのである。紋織木綿の製織は匹縷飛の如きハトビー織機を使用し、襦布の如きは四百口位のジャカード織機を使用するのである。製品の取引に付ては、多くは生産者がこれを附近市場に持出し直接又は仲介人を経て需要者たる地方商人に賣捌くのであるが、同業者の組合等を造つて居るものに在りては、組合に於て總て販賣の斡旋をして居る。京畿道の江華郡の如きは生産綿布を郡内の行商者に委託し、道内外の市場に巡廻販賣せしめるものもある。

絹 布

朝鮮に於ける絹布の種類は生紬、明紬、元羅、熟紬、班紬の五種にして、生紬は経緯生絲を用ひ製織せる平織物を云ひ、明紬は生紬を精練加工せるもの、元羅は経緯生絲を使用せる紹織物を稱し、熟紬、班紬は経緯の一方に練絲又は染絲を用ひたるものである。慶北の尙州、平南の順川、徳川、成川、平北の寧邊、泰川、江原の春川、鐵原、咸南の永興の諸郡は絹布の主産地として世に著はれて居る。製織方法は、生紬

及び明紬に在りては在來の織機を以て行ひ、元羅は紹織の爲め特殊綜統を用ふるの外は生紬と同様に織られ、改良絹布に在りては生糸を坐繰器にて繰返し、更に同一の繰返器にて糊付をなし、立杭整理器にて整理して改良機にて織る。生紬を精練して明紬となすには在來法は植物性灰汁にて煮たる後、水洗乾燥し槌打により仕上するも、改良法にては石鹼、曹達等を用ひ煮沸し、水洗乾燥後伸張又は槌上仕上する。蠶繭は從來殺蛹、乾繭等の処理方法適當ならず、繰絲法も亦幼稚であつた爲め生絲の品質劣等であつたが、近來殺蛹乾繭、繰絲法の改良に伴ひ、生絲の品位が向上した。また絹布の製織に就ては總督府は始政以來種々施設を行ひ、斯業の改良發達に努めた結果、優良なる絹布の生産を見るに至つた。

麻 布

朝鮮に於ては古來衣料として麻布、苧布及び絹布のみを使用して居たが、五百年前より漸く綿布をも用ふるに至つたのである。されば麻布の製織は如何なる地に於ても自家用として行はれ、自家用以外に他の需要に應せんが爲めに織るものも少くない。現今之が主要産地としては、全羅南道谷城、求禮、和順、慶尙北道安東、義城、慶尙南道居昌、陝川、咸鏡南道北青、豊山、咸鏡北道鍾城、鏡城、明川の諸郡がある。麻布製織の原料は大麻にして普通朝鮮在來種と稱する。近來南鮮地方に於ては、内地麻布の標準品た

る野州麻の種子を移入し、漸次これが改良を見んとしてゐる。従来朝鮮に於ける麻布製品は、平織小幅の在來麻布にして、各地に於て幅、長、品質を異にし甚だ雜駁であつたが、主要地中には、近來組合を設けて製品検査を行ひ、品質幅尺等の統一改良を圖るものもある。麻布の取引方法は、概して在來綿布の取引と等しく、生産者自ら市日を利用し、市場に參集の仲買人の手を経て他地方の商人に販賣されて居る。慶尙北道安東郡に於ては各地方の商人は、生産季節の間邑内に來り滞在數十日、麻布組合の仲介に依り、日々來集する生産者より所要數量の麻布を購入して、大邱その他の市場に搬出販賣する。また地方により綿布や海産物と物々交換をなすものもある。

苧 布

苧布の製織も古くより行はれたもので、現今著名なるは、忠清南道の舒川、扶餘、保寧、靑陽、全羅北道の井邑、高敞、全羅南道の長城、長興等の諸郡である。苧布の原料は苧麻にして、朝鮮に於て現今栽培せらるゝは、(一)支那煙台種にして、眞苧又は南苧と稱し、南鮮各地に多く栽培せられ、その質最も優良である。(二)臺灣種之に亞ぎ主として慶尙南道南海郡の一部に栽培され、段當りの收量は煙台種に優るも、纖維粗硬にして色澤不良の缺點がある。(三)次は常苧と稱する雜種にして、品質は甚だ劣等である。

従来朝鮮にて製織さるゝ苧布は、平織小幅の在來布にして、地方に依り丈尺組織一様でなかつたが、近來各産地に於て組合を設けて製品の検査を行ひ、品質の改良統一を見るに至つた。品質の最も優良なるは忠清南道舒川、韓山附近に産する薄地物にして、これに亞ぐは同道靑陽郡産の物であり、その他は多く太地物である。苧布の取引方法は、木綿又は麻布の取引と等しく、生産者自ら市場に持出し販賣するを普通とするも、苧布主産地たる忠清南道に於ては、各市場に苧布組合の製品検査所ありて、生産者は一應これに提出してその検査を受け、合格品に限り仲買人又は小賣商人に販賣取引される。京城その他大需用地の商人は、苧布主要産地の市場に店員を駐在、又は隨時出張させ、或は仲買人に委託して苧布の仕入をなし、更に各地に移出販賣してゐる。就中京城に於ける商人は生苧布を購ひ、漂白加工して販賣してゐるが、他の地方は多く漂白苧布を購買する。苧布の主産地に於ける漂白業者は同時に仲賣商を兼營し、他地方商人の委託により又は自己の思慮にて苧布の買入をなすものも多い。

紡 績 絲

朝鮮に於ては棉花の産出豊富なるにも拘はらず、従來、資本、技術等の關係上、手紡絲の産出以外は、その原料たる棉花は主として内地へ移出せられて居た。然るに大正六年十一月に至り、慶尙南道釜山に於

て朝鮮紡績株式會社が設立されて、爾來紡績工業品の生産を見るに至つたのである。同社の資本金は五百萬圓、大正八年四月工場の建設、機械の購入据附を爲し、同十年十二月より操業を開始した。而してその紡績職工は殆んど朝鮮人にして、原料は主として朝鮮産品を用ひて居る。紡機は英國ツイーデル、スモレー社製最新式一萬五千二百錘を据附け、綿糸十番手、十六番手、二十二番手等を紡出して居る。最近の調査に據れば一箇年の生産數量五十六萬餘貫、その價額二百七十餘萬圓に達して居る。製品は主として朝鮮内の需要に應じて居るのであるが、滿洲方面へも販路の擴張を圖つて居るから、今後の發展は刮目して見るべきであらう。双鳳票綿絲、長鼓票、葉錢票粗布、鷄籠票細布等は何れも同社の製品であつて、今や鮮内到處の市場に好評を博しつゝある。朝鮮に於ける紡績工業は未だ盛んではないが、近く内地の大紡績會社に於て、新に操業を行ふものがあるとのことであるから、朝鮮の紡績業は今後大に發達を遂ぐることを思はれる。

繰 綿

全羅南道を中心として、南鮮各地に於て陸地棉の栽培獎勵せらるゝと共に、原棉の産出額増加したる爲め、規模大なる繰綿工場の各地に於て企畫せらるゝもの頗る多く、特に木浦は斯業の中心地として殷盛を

極め、米の群山に對し、綿の木浦と稱せらるゝ程である。最近の繰綿工場數は六十、その年産額一千二百餘萬圓に達して居る。棉花の生産増加、及び紡績工業の經營に伴ひ、繰綿工業は將來大に發達すべき見込がある。

精 米

朝鮮人の收穫米は初の儘にて賣買せられ、稀に食用として白米の賣買せらるゝもの無きにあらざるも、粃より直ちに精白したる一種の中白米に過ぎない。然るに粃は輸移出に不便多く、且つ中白米は内地人の口に適せざるのみならず、滿洲方面に對しては精白の上輸出する方が利益である。されば京城、仁川、木浦、群山、釜山、平壤、鎮南浦等の主要集散地に於ては、内地人にして粃摺業、或は同業を兼ねたる精米業を營む者が尠くない。殊に群山は米の移出港として全鮮中第一位を占め、世人呼んで米の群山と稱する程で、その精米工業は頗る盛大である。最近に於ける精米工場數は一千五十八の多きに達し、その年産額一億五千餘萬圓の巨額を占め、工場工業中の筆頭に据つて居る。

麥 粉

朝鮮は麥粉原料たる小麥の産出多く、農家に於ては粉として食用に供し、又は菓子、麵類等に用ひらるゝものは年々増加して來た。その産額の如きは八百餘萬圓に達するが、尙ほ需要を充すに足らず五百餘萬圓の輸入をなして居る。從來本品の製造は家内工業を主として居たが、大正七年以來機械操業を行ふ者も現はれて來た。平安南道鎮南浦府に於ける滿洲製粉株式會社鎮南浦分工場、及び京畿道京城府龍山に於ける豊國製粉株式會社の如きは其の最大なるものである。小麥の産地たる朝鮮に於ては、原料、勞銀、運賃等の點より見て、斯業の經營は將來有望なるものに屬して居る。

砂糖

朝鮮は大體に於て雨量少く乾燥して居る關係から、甜菜の栽培に就いては夙に世人の注意を惹き、勸業模範場は既に明治三十九年頃より全鮮各地に亘りて甜菜の試作を行ひ、その結果平南及び黄海の兩道が成績良好であつたから、大正六年には朝鮮製糖會社が平壤に創設さるゝに至つた。これが今の大日本製糖株式會社朝鮮支店の前身である。大日本製糖會社朝鮮支店は朝鮮に於ける唯一の製糖會社にして、平安南道及び黄海道に亘りて産出する約三千町歩の原料甜菜を、毎年十一月より翌年二月の間に於て製造して居る。而してその他の時期には臺灣、瓜哇より粗糖を輸入して精糖に従事するもので、大正十三年中の砂糖製造

數量三千八百六十六萬八千三百六十四斤、その價額一千四十四萬四百五十八圓に上つて居る。同社製品の販路は朝鮮内は勿論のこと、内地、南支那方面へも輸出を行つて居る。因に同社製品は神戸の鈴木商店に於てこれが一手販賣を行つて居るのである。

朝鮮紙

朝鮮の製紙は起源古く、北鮮の一部を除くの外全道に亘り、慶尙北道慶州、盈徳、慶山、慶尙南道宜寧、陝川、忠清北道堤川、全羅北道全州、鎮安、黄海道遂安はその主要産地である。製紙業に關する組合は、京畿、忠北、忠南、全北、慶北、慶南、黄海の各道に設立せられ、名稱は製紙契、製紙組合、紙業組合等區々に亘るも、その内容は大同小異にして、その數約二十を算する。朝鮮紙はその質強靱にして窓紙用、包装紙用等特殊の用途を有し、その中主要なるものは白紙、貢物紙、見様紙、窓戸紙、油衿紙等である。就中貢物紙は古くより支那政府に貢獻せる爲め、その需要を喚起し、早くより支那に輸出されて居たが、現時は製品の大部分が鮮内に於て消費されるのである。その生産額明治四十四年には三十八萬圓であつたものが、最近に於ては約二百餘萬圓を産するに至つた。

然るに朝鮮紙と均しく楮を原料とせる和紙類の、朝鮮に於て生産せらるゝものは少くないが、尙ほ内地

より移入せらるゝ額は少からず、最近に於ては數量二百八十餘萬斤、價額百七十餘萬圓の移入を示して居る。故に朝鮮に於けるこの種の製紙事業は、楮の獎勵と相俟ちて將來有望なる事業である。朝鮮紙の取引は製造業者と卸賣商間に仲買人ありて、仲買人は自己一箇年の取扱高を、卸賣商よりの注文又は豫約によりて豫測し、それに依つて製紙業者に注文し、前拂又は手附金を交附する。卸賣商中直接製紙業者と取引する向もあるが、斯かる方法は極めて稀で多くは現金取引が行はれ、仲買人及び卸賣商間に於て、月末拂その他の契約を爲すものである。而してその取引は輸出先商人に委託すること少く、大部分は派出員を遣し、現金取引を爲して歸鮮する様である。

釀造品

朝鮮に於て在來製造せらるゝ酒は藥酒、濁酒、白酒、燒酎、過夏酒、梨薑酒、甘紅露、及び松筍酒等種類多きも、一般的に嗜飲せらるゝものは藥酒、濁酒、燒酎である。藥酒は小麥麴、糯米を以て短期醸造したるものにして、他酒に比し品質稍々良好なるもので、黃海道以南殊に京城附近に於て多く生産し、主として中流以上に飲用せられ、大正十三年の産額七萬五千餘石、四百二十萬餘圓に達し、濁酒は小麥麴と粳米を以て醸造したる濁酒にして、一般下層社會の嗜飲物たるが故に需要頗る廣く、大正六年以降年々約

十萬石を増加し、大正十三年の産額百三十七萬六千石、三千三百八萬餘圓を算した。燒酎は米、粟その他の雜穀を原料とし、これに麴を加へて醸造したもので、從來主として極めて小規模に醸造せられしも、近年相當規模の下に鮮人向燒酎の製造を企つる者も尠からざるに至り、燒酎の生産額は大正十二年に於て九萬石三百萬圓餘なりしに、大正十三年には二十萬餘石、一千四百二十七萬餘圓に増加し、從來北、西鮮地方に於て最も多く産し、京畿道より南するに従ひ漸次その生産額を減少し、近年南鮮に於てもこれを醸造するものが次第に増加するの傾向がある。

清酒の需要は内地人の移住増加に伴ひ激増し、且つ朝鮮に於ては醸造期間長く、原料及び職工賃金低廉なると腐造の虞少なき爲め、夙に釜山、仁川、京城等に於て清酒醸造業を開始したる者多く、明治四十二年頃に於て既にこれに従事するもの七十九戸、その醸造石數一萬五千餘石に及んだ。而して一面當局に於ても、或は醸造に關する試験成績を發表して當業者の参考に資する所あり、或は酒造技術員を配置して實地指導に當るあり、その他品評會、啣酒會等の開催に依り、著しく品質の昂上せらるゝと共に、内地人の移住増加、鮮人のこれに對する嗜好の推移等に刺戟せられ、鮮内の生産も逐年増加して、明治四十四年に於て二萬四千餘石、價額七十四萬圓なりしもの、大正十三年には倍加して五萬七千餘石、五百三十四萬九千餘圓に増加し、年々幾分内地酒の移入量を減少すると共に、大正十三年に於ては支那、西伯利亞方面に

輸出せられたるもの約一千五百石、二十萬圓を算するに至つた。

朝鮮に於ける醬油の醸造高も増加し、明治四十三年に造石高二萬石、その價額七十萬圓なりしもの、大正十三年には六萬三千餘石、二百六十四萬餘圓に達した。これに反し移入は明治四十三年に八千餘石であつたものが、大正十三年には三千餘石に減少するに至り、更に輸移出は明治四十三年に九百石、一萬五千圓であつたものが、大正十三年には二千四百餘石、十三萬三千餘圓に増加し、今や醬油の醸造は鮮内の需要を充して輸移出を爲すの餘力を有する迄に發達したのである。

鐵 工 品

朝鮮人に依り製造せられた在來鐵器は、鍋釜類、刀物、農具等にして、多くは副業としてこれら營み、その製造も極めて幼稚なもので、僅に破損器具の修理、簡單なる日用品の製作等を爲し得るに過ぎなかつたのである。近時京城その他都會地方に於て新式の鐵工業を營むもの増加し、在來の工場に比すると規模稍大に、設備亦整頓し、技術材料共に良好なるを以て、その製品は外觀佳良、その質堅牢なるが故に、これに對する需要は近年大に増加して居る。斯くて鮮内に於ては新式經營鐵工場は、漸く在來工場を凌駕するに至り稍見るべきものがあるが、それでもその生産する所のものは、炊爨器、農具、その他簡單なる機

械の製作に止まり、彼の鐵道、船舶用、その他近年勃興しつゝ、ある各種工場工業、水利事業に要する優等機械類の製作修繕に至りては、その資力微弱、その設備不完全なるが故に、これに當るの能力なく、是等各種の文明的鐵工製品は、總てその供給を内地又は外國に仰ぎ、その價額毎年數千萬圓に達するの狀況である。而して鮮内に生産せらるゝ各種鐵工製品の産額は、大正十三年に於て鐵器額三百四十三萬圓、機械類五十一萬圓併せて三百九十四萬圓である。

金 屬 品

朝鮮人は古來眞鍮製の食器、金盃、火鉢、便器等を使用するを以て、その製作に従事する者は各所に少くない。鐵器類は鍋、釜、及び農具を主要なるものとし、就中釜は堅牢なるを以て名高い。内地人にして近時機械工場組織を以て各種の器具を製造する者も多い。婦人の裝飾品たる指環、筭、簪等の金銀又は眞鍮製品は各所に於て製造が行はれ、近時それ等細工品に美麗なる彫刻を施すものも現はれて來た。最近に於ける金屬製品の産額は九百三十餘萬圓に達し、また金銀細工品の産額一百四十餘萬圓に及んで居る。朝鮮に於ける生活程度の向上に伴ひ、金屬品の需要は増大し行くべきを以て、斯業の經營も亦有望なるものに屬して居る。

窯業製品

朝鮮は至る處に優良なる窯業原料土石を多量に包蔵せるを以て、原料の上より見るときは最も有望なる窯業地と謂ふことを得べく、古來高麗焼の如き、その名聲噴々たるものありしも、李朝中葉以降陶磁器業も亦廢頽し、併合當時に於ては各地方に小陶器場點々と散在し、僅に附近住民の需要に應ずべき粗笨なる製品を出すに過ぎざるの状態にあつた。總督府に於ては始政以來これが原料の調査を爲し、奨勵及び試験の施設を充實した結果、時勢の進歩と相俟つて、品質の向上と産額の増加を來した。最近朝鮮に於ける窯業製品中の主なるものは、陶磁器、セメント、素焼物、瓦、煉瓦、土管、硝子、硝子製品、石灰等にして大正十三年中の産額九百四十二萬二千八百六十圓にして、工業生産額中重要な地位を占めて居るが、尙ほ其輸入は年々巨額に達して居る。朝鮮人は近時日用の金屬器を漸次陶磁器に代ふるの傾向があり、加ふるに優良なる陶土に富めるを以て、内地人にして鮮内各所に窯業を營むものが出て來た。釜山牧の島に於ける朝鮮硬質陶器株式会社はその尤なるものにして、海外輸出向品の製造を目的として居り、その外古雅なる高麗焼を復興して内地人の嗜好に充てんとするものもあり、全羅南道、黃海道海岸、竝にその附近島嶼に豊富なる珪砂は、皆内地に移出せられて硝子製造の原料に供せられる。煉瓦、瓦及び土管も全土到

る處原料に富み、刑務所作業として煉瓦、土管の經營せらるゝものあるの外、永登浦等に於ては内地人の經營せるもの多く、その他各地に於て相當の生産を見、建築業の進歩と共に有望なる一事業である。朝鮮に於けるセメントの需要は逐年増加せるも、これが供給は内地及び滿洲に仰いで居たが、小野田セメント株式会社は、平安南道江東郡勝湖里附近に於て石灰石粘土の豊富に賦存せるに着眼し、大正八年工場設備を竣へ、一箇年の生産セメント四十五萬樽に達し、鮮内の需要を充した上支那方面へ輸出するに至つた。

皮革製品

皮革製品に關する起源は詳ではないが、内地と等しくその初めに於ては一種の賤業として、特殊階級者に依つて加工せられしもの、如く、且つその用途も狭く、これが製法も亦極めて幼稚であつた。朝鮮産牛皮は、早くより内地筋の製革者に依りその價值を認められ、年々多量の移出を示して居たが、元來朝鮮に於ては舊式工場のみで、甚だ幼稚な製法であつた。そこで、近年新式大規模の組織にて製革及び皮革製品の製造に従事するものが現はれるに至つた。即ちその主要なるものは、京畿道永登浦の朝鮮皮革會社、忠清南道大田の大田皮革會社の二にして、その他平安南道には鎮南浦皮革製造所があるが、前二者に比しその規模に於て遜色がある。主なる皮革製品は、洋靴、鮮靴、調帶、鞆、牛馬具等である。靴の産額は皮革

製品總生産額の八割餘を占めて居るが、近年低廉にして相當の耐久力と、防水力を有するゴム靴の爲め、次第に侵蝕されつゝある。朝鮮産の調帯は、牛皮が強靱なるを以て、各方面の需要頗る多く、内地支那方面の工業界に於ては大なる勢力を有して居る。

護 謨 靴

護謨靴の移入は大正八年頃より弗々行はれたるも、當時は洋靴型のものにして、極めて僅少の數量に過ぎなかつたが、大正十年頃朝鮮靴型のもの現はるゝや忽ち朝鮮人の歡迎する所となり、都會より田舎へと漸次普及して、今や寒村僻地に至る迄雜貨商の店頭に、護謨靴の見えぬ所が無くなつた。この護謨靴需要の激増は同品製造工場の簇出を促し、同業者間の競争激烈となり遂には生産過剰に陥り、大正十一年上半期の下頃には半値以下に低落したが、その後漸次回復の歩を辿りつゝある。斯業の現状は以上の如きも、鮮靴型の護謨靴は他の履物に比し價格廉きと、鮮人の嗜好に適するとに依り、將來猶ほ需要増加の状態に在る。内地製品と朝鮮製品との價格を比較するに、目下各地區々なるも、概して都會地に於ては朝鮮製品よりも内地製品低廉に、その他に在りてはこれに反し、品質並に型狀に對する批評は各地區々なるも、大體に於て品質は内地製が優り、型狀は朝鮮製の方が喜ばれる。而して朝鮮在來型最も需要多く、色合及び

品質に於ては地方に依り多少異なるも、大體に於て夏季は白色、その他の時季に於てはチョコレート色が最も喜ばれ、婦人用としては水色、青色も相當の賣行があり、品質は柔軟なるものが好まれる。取引方法は各地區々なるも、内地製造元對朝鮮代理店又は特約店間は、發送後一箇月乃至一箇月半の延取引を普通とし、代理店小賣店間に在りては、代理店所在地に於ける小賣店に對しては四、五十日の延取引はれ、他地方との間は主として代金引換に依つて居る。朝鮮産品は生産地に在りては一箇月後拂を普通とし、その他の地方との取引は多く代金引換に依つて居る。

燐 寸

朝鮮に於ける製燐業は、明治四十二年大邱に於ける明燐社の創業を以てその嚆矢とする。後ち大正六年仁川に朝鮮燐寸株式會社創立せられ、主に黃燐燐寸製造に従事した。朝鮮に於ける勞銀の低廉なると、原料軸木資材の有望なるとは漸く斯業に着目する者を生じ、特に歐洲開戦以來財界の好況となり、一段の發展を見るに至り、大正九年清津に日新商行、新義州に朝鮮燐寸株式會社附屬軸木製造工場の起るあり、また大邱の明燐社は組織を變更して東亞燐寸株式會社と稱し、仁川の朝鮮燐寸株式會社は從來の黃燐燐寸の製造を安全燐寸に變更し、孰れもその面目を一新した。然しながら朝鮮の製燐業は今尙ほ創業時代にあり

て、その生産額の如きも僅に朝鮮需要額の約一割二分を充すに過ぎない。即ち大正十三年に於ける生産額は二十二萬圓にして、同年の移入総額は百六十一萬餘圓に上つて居る。

漆器

朝鮮漆器中主要なるものを螺鈿漆器、硯箱等の生地塗漆器及び雲峰椀の三種とする。螺鈿漆器は古來慶尙南道統營の特産なりしが、近時京城に於ても製作さるゝに至つた。膳、硯箱等の生地塗は、全羅南道光州地方に於て製作せられ、雲峰椀は全羅北道南原及び慶尙南道咸陽地方が主産地である。以上各種の漆器中螺鈿漆器は現今朝鮮に於ける漆器中最も優良なるものにして内外の賞讃を博せるのみならず、歴史的由緒ある美術工藝品に屬する。統營に於ける漆工の起源は詳かでないが、遠く新羅時代に於て漆典の官職あり、また高麗朝に於て鈿函造成都監を置いたのを見ると、當時政府が大に奨勵を加へその隆盛であつたことを窺ふに足る。然るにその後内憂外患相踵で起り、李朝に臻り鈿漆の業も漸く廢頽に傾き、一時殆んど廢絶の状態なりしも、文祿の役前後に迫り、朝鮮水軍の本據たる三道統制使をこの地に置き、その權威半島の海上を壓するに至り、工官の保護を得て鈿漆の製作を開始したが、その製品は多く宮中獻上品であつた。爾來數百年、明治二十七年統制使の廢止と共に再び衰微し、職工四散して産額著しく減少し、只僅

かにその殘影を留むるに過ぎざりしを、明治四十三年、時の郡守之が挽回策として郡立工業傳習所を開設し、大正二年寺内總督より奨勵金を下附せられ、同時に地方費の補助を受け事業を繼續して來た。大正五年に至り全然これを地方費の經營に移し、大に奨勵を加へられた結果、近時漸く優良品を出すやうになつた。大正七年十一月、螺鈿漆器製造販賣を目的とする漆工株式會社の設立を見、地方費の事業全部を會社に於て繼承することとなり、爾來同社は意匠圖案等に朝鮮古代の様式を採り、髹漆法にも改良を加へ大に精巧優雅の製品を出すに至つた。然しながら漆工會社の製品を除くの外は、未だ從來の粗製品多く、椽地の乾燥不充分的なもの、または髹漆不完全なるもの、若くは意匠圖案の幼稚なるもの等、幾多改良の餘地多きに鑑み、地方廳は新に當業者をして漆工組合を組織せしめ、補助金を下附してその事業を援助し、以て奨勵を加へて居る。統營に於ける漆工及び内地の製造業者は約六、七十戸にして、一漆工會社を除くの外全部個人の經營に屬する。生産額は年額八、九萬圓に上り、就業者二百餘名と稱せられる。惟ふに螺鈿漆の製作は、技術の普及に伴ひ、家庭工業として頗る有利なる事業である。

莞草製品

朝鮮に於て在來生産せらるゝ葦蓆中、その品質と用途とに於て重視すべきものは莞草蓆である。その原

料莞草は朝鮮特有の生産物にして、表皮を剥ぎ、これを細裂して日光漂白を爲したるものを緯となし、麻糸を經とし織成せるものは即ち莞草蓆にして、外觀高雅、素質頗る強靱である。近年に至り莞草を利用して新規に蓆蓆、並に鞆、スリッパ及び内地人向疊表等の製造を開始し、これを内地及び外國に輸出しつつあるが、將來益々有望なる貿易品となるであらう。産額は明治四十四年に於て三十四萬五千餘圓なりしものが、最近に於ては實に百七十餘萬圓に達するに至つた。

杞柳製品

朝鮮は古來野生杞柳の生育するもの多く、これを原料として各種の器物の製造が行はれたが、本業は白丁の仕事なりとして鮮人は一般に賤視するの風習があつたけれども、大正五、六年頃より漸次普及するに至り、現在に於ては京畿、忠南、慶北及び平南等の各道に産出し、大邱杞柳工業會社を初めとし、個人經營のもの十餘箇所にして居る。製品の種類はバスケット、柳行李、煙草盆、火鉢、炭取等にして、その加工及び製作は、當初内地より技術者を聘して技術の傳習に努めたが、現今に於ては殆んど地方民の家庭工業となり、前途有望な事業である。

扇子、團扇

扇子及び團扇は主として竹の主産地たる全羅南北の兩道にて製作され、全羅北道の全州及び南原、全羅南道の潭陽及び羅州よりは最も多く産する。この製作は格好の家庭工業にして、その大部分は副業として行はれる。朝鮮在來の扇子は骨に最も力を注ぎ、内地産品に比し著しく堅牢にして耐久性を有するも、その價格は廉くない。また團扇はその色彩に於て多分に朝鮮味を有するため、内地人間に於ても珍重され、土産品として相當の賣行きがある。

梳櫛

梳櫛は鮮人間に於て男女共に使用せられ、その需用極めて多く、これが製品は鮮内の需要に應ずるのみならず、内地及び滿洲方面へも輸出せられ、南鮮に於ける主要なる手工業の一である。梳櫛の製作は稀に專業となすものもあるが、多くは農家の副業として農閑期を利用して製作され、従つてその製作期は十一月より翌年五月に至る七箇月間にして、二月より四月迄を多産期とする。その主産地は全羅南道靈巖、潭陽、長興、順天及び和順の五郡にして、最近の産額二百餘萬個、價額三十萬圓に達する。その中靈巖産

のものは品質優良を以て著はれ、潭陽郡は産額多きを以て有名である。當業者の利益擁護の爲め、潭陽及び靈巖には組合を組織して居る。

石 鹼

従來化粧石鹼及び洗濯石鹼は殆んど輸入に俟つの状態であつたが、近來漸次その需要の増加を見、加ふるに朝鮮は一面豊富なる原料を抱容するを以て、京城、平壤、釜山等に於て、盛んにこれを製造して居る。就中洗濯石鹼は鮮人間の需要を増し、將來頗る有望の事業である。石鹼の大正十三年の産額は六十三萬六千九百四圓に上つて居る。

寒 天

寒天は漂白したる石花菜を煮熟して製したる心太を更に凍凝乾燥せる製品にして、日本獨特の産物である。需要地は内外に涉り、用途も亦數種に及び、食料としては支那人、その他の嗜好に適し、工業用としては歐洲諸國に於てその用廣く、殊に支那の如きは國內何れに於ても珍重措かざるも、未だ供給洽からずして深く奥地に入るに至らない。これが需要は今後益々増加すべき趨勢に在る。而してその主要用途は食

用、醸造用(清澄材料)、藥劑用(オブラート)、糊料、絹子紡績原料精練用、模型製造用、印刷用、學術研究用(細菌培養)等に及んで居る。寒天の内地に於ける大正十年の製造狀況は、製造戸數二百八十六戸、これに従事する職工二千七百人、産額二百三十萬圓にして、同年の輸出額は百八十萬圓に及び、輸出水産物中重要な位置を占めて居る。原料は主に内地太平洋沿岸及び朝鮮沿海の産を混和調合して使用する。朝鮮に於ける石花菜の産額は大正十三年中には一百二十四萬貫、價額五十二萬圓を降らず、その品質の如きも内地の一等品に匹敵すべきものも尠くない。斯くの如く良質の原料を多量に生産するに拘はらず、朝鮮に於ては未だ斯業の見るべきもの、無いのは頗る遺憾とする所である。元來寒天の製造は、その用水及び氣象を以て主なる條件とするを以て、慶尙南北道、全羅南北道の如きは最もその製造の適地で、農家の副業として冬期閑散期を利用し行はゞ最も有利なる事業である。殊に朝鮮に於ける本業の經營は内地に比し、原料の割安なること、製造期間長く、内地に比し三割以上生産力多きこと、燃料、人夫賃、公課等が廉いこと、製品は凝固力強く、並に光澤良好なること、乾燥地なるを以て製造中に腐敗の虞の尠い等、種々なる利點がある。

パ テ ン 細 工

朝鮮に於ける「バタン」事業は、朝鮮婦人従來の無爲閑居の弊習を矯正し、その家計を資け生活の向上を圖らむとする趣旨を以て、内鮮人有志に依り、朝鮮勸業協會の事業として創始された。同協會は横濱市役所の紹介に依り同市屈指の「バタン」業者合資會社笠原商店と取引の特約を結び、資本金數千圓を以て大正二年九月本業を開始したが、經營の方法宜しきを得ず失敗し、その後、笠原商店出張所が布帛加工傳習所を京城府内堅志洞に設け、内地より優良なる教師數名を招致し、最も簡易なる「バタンレース」の傳習を開始し、専ら女工の訓練に努め、翌年優良なる鮮人女教師養成の爲め數名を内地に送り、傳習所を擴張すると共に女工優遇の途をも講じ、極力鮮人間に事業の性質と就業の利益を宣傳する處があつたが、婦人勞働賤視の因襲と、事業に對する理解の充分ならざると、勞銀の豫期に反し鮮少なる等の理由にて、中途退所するもの多く、従つて製品粗雜にして、取引を阻碍せらるゝのみならず、自宅加工者の製品回収に意外の經費を要する等種々の困難に遭遇したが、大正五年には往十里に派出所を設け、また臨時蘆島方面部落民に傳習を行ふ等、不撓の努力は漸次事業進展の曙光を認むるに至り、大正三年に於て僅に一千圓に過ぎざりし仕拂工賃が、四年には三千圓に達し、五年には五千圓に及び、著しく事業進展の度を示したのである。大正六年従來獨逸獨特の製品なりし「モザイック」即ち獨逸藤カサネを試作して紐育に輸出した所が、技工の優良なると價格の低廉なる點に於て獨逸品を凌駕して大に聲價を博し、同年更に京畿道坡州郡汶山に

一箇所、七年に高陽郡崇仁面に四箇所を派遣し殺到せる注文に應じ、大正七年には「モザイック」工賃二萬二千圓、「バタンレース」工賃三千圓を拂ふやうな好況を呈し、多數の女工をして内職の有利なることを覺らしめたのである。歐洲戰亂の爲め一時打撃を受けた斯業も、戦後に及び多量の注文あり、購買力の膨張は生産の増加を促し、惹いて工賃は従前の倍額に上つたので、就業希望女工踵を接するの盛況を呈し、一時京城附近のみで二千を算するに至つた。それでも尙ほ注文殺到し生産増加の必要を認め、大正九年五月には清州に、九月には公州に出張所を設け、前者には四百名後者には三百名の工女を收容するに至つた。斯くして本業の基礎安定し、財界不況の時に於ても尙ほ依然として作業を持續し、大正十年に於ては京城附近に二千名、忠清北道に一千名、忠清南道に六百名の女工を使役し「モザイック」工賃九萬圓、「バタンレース」工賃二千圓、計九萬二千圓の巨額を仕拂ふの盛況を呈し、大正十一年に至りては、「モザイック」の主要輸出先たる米國の購買力漸次不況に陥り、爲めに生産過剩を誘致したるを以て、先づ忠清南道公州出張所を閉鎖し、清州の女工を五百名、京城附近の女工を一千五百名に減少の止むなきに至つた。茲に於て同店は米國向「モザイック」の注文減に對し、需要最多く且つ幼年者にても容易に習得し得らるゝ加工容易なる英國向「バタンレース」の増産を策し、特約店なる「サイモン」商會員と共に各地を視察し、その結果咸鏡南道より一千圓の補助金を受け、同年十月新に咸興に出張所を設け、工女を養成

し製作に従事して居る。

その他の工産品

以上に掲ぐるもの、外、製材、電気及び瓦斯、荏、蓖麻、大豆の製油、編組物、漁網等の生産は未だ盛んではないが、或は將來需要の増加を來すもの、或は原料の産出からざるもの、或は家内工業としての素地あるもの等に係り、いづれも將來有望であり、またその發達を企圖すべき物産に屬して居る。

主要工場一覽表

製綿 朝鮮總生産額三四、六五〇、一九六圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
朝鮮製綿株式會社	京畿道京城府青葉町二丁目	朝鮮製綿株式會社	綿	七、九一	一四三、四八四
鈴木製綿株式會社	忠清北道永同郡永同面稽山里	鈴木合名會社	綿	八五〇、〇〇〇	七三、〇〇〇
南北製綿株式會社	忠清南道鳥致院	南北製綿株式會社	綿	七〇〇、〇〇〇	六四、〇〇〇
朝鮮棉花株式會社	全羅南道木浦府海岸通	朝鮮棉花株式會社	綿	四、五七、八〇〇	三、六七、二〇〇
南北製綿株式會社	同	南北製綿株式會社	綿	二、七〇〇、〇〇〇	二、二〇、〇〇〇

大正十三年製造高

渡邊製綿工場	同	祝町	渡邊彌太郎	同	二二、五〇〇	三九、〇〇〇
森製綿工場	同	幸町	森酒井	同	三〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇
立花製綿工場	同	務安通	立花豊次郎	同	一一〇、〇〇〇	九、〇〇〇
内谷製綿工場	同	幸町一丁目	内谷萬平	同	二〇〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇
太田製綿工場	同	祝町	太田彌三郎	同	二二〇、〇〇〇	一七、〇〇〇
藤森製綿工場	同	海岸通	藤森文祐	同	九、〇〇〇	八、〇〇〇
文允製綿工場	同	木浦臺	文允淑	同	七五、〇〇〇	五、〇〇〇
鄭淳珏製綿工場	同	壽町	鄭淳珏	同	八三、〇〇〇	六、〇〇〇
黄良宜製綿工場	同	旭町	黄良宜	同	一〇〇、〇〇〇	八、〇〇〇
金德仁製綿工場	同	柳町	金德仁	同	一〇〇、〇〇〇	七、五〇〇
徐炳南製綿工場	同	海岸通	徐炳南	同	七〇、〇〇〇	五、〇〇〇
朴成柱製綿工場	同	羅州郡羅州面北内町	朴成柱	同	一〇、〇〇〇	一六、〇〇〇
緒方製綿工場	同	務安郡二老面	緒方惠藏	同	一〇〇、〇〇〇	八五、〇〇〇
大邱製綿工場	同	慶尙北道大邱府七星町一五三	小川徳長	同	六五、〇〇〇	四八、〇七五
晋州製綿工場	同	慶尙南道晋州郡晋州面	清水佐太郎	同	六三〇、〇〇〇	五三、五五〇
馬山製綿工場	同	馬山府上南洞	本田安五郎	同	一、三〇〇、〇〇〇	一、〇二〇、〇〇〇
平壤製綿工場	同	平安南道平壤府柳町	孫洪駿	同	一、一五、〇〇〇	九五、〇〇〇
白山製綿工場	同	叙貫里	李乘均	同	七〇、〇〇〇	六五、〇〇〇

朝鮮の物産

五二八

齊藤織綿工場 同 鎮南浦府龍井町 齊藤久太郎 同
 朱永線綿工場 同 三和町 朱永淳 同

綿糸 朝鮮總生産額二、七二一、四〇〇圓

工場名 所在地 經營者
 朝鮮紡織株式會社 慶尙南道釜山府凡一洞 朝鮮紡織株式會社
 釜山工場

品名	數量	價額
綿糸	五九、八六六貫	二、七二一、四〇〇圓

生絲 朝鮮總生産額八、八二六、八二三圓

工場名 所在地 經營者
 京城製絲場 京畿道京城府杏村洞 京畿道
 朝鮮製絲株式會社 同 崇仁洞 朝鮮製絲株式會社
 藤原製絲工場 全羅北道全州郡上關面大聖里 藤原彦七
 片倉製絲紡績株式會社 慶尙北道大邱府大風町 代表者 古田忠衛
 大邱製絲所
 朝鮮生絲株式會社 同 東雲町 尾澤福太郎

品名	數量	價額
生絲	一、五五〇貫	一、五五〇圓
生皮	三、八三三斤	三、八三三圓
生皮	七九貫	九、六六〇圓
生皮	二七六貫	三、五〇〇圓
生皮	八五、〇〇〇斤	一、七〇〇圓
生皮	八、四三六斤	一、四〇六、九六六圓
生皮	四七五貫	四、七五〇圓
生皮	九五貫	五、五三三圓
生皮	二、〇〇〇貫	八、七五五圓

今組大邱製絲所 同

小口今朝吉 生絲

102,000斤 1,120,000圓

染色 朝鮮總生産額二七、八三〇圓

工場名 所在地 經營者
 岩淵染色工場 京畿道京城府黃金町 岩淵精次郎
 清水染色工場 同 漢江通 清水卯吉
 山野染色工場 慶尙南道釜山府富平町 山野重義

品名	數量	價額
染物、洗濯	1	一、六八三圓
染物	七、七〇〇反	六、〇〇〇圓
染物	7,000反	5,000圓

織物 朝鮮總生産額二四、〇九〇、〇四一圓

工場名 所在地 經營者
 西大門刑務所 京畿道京城府觀底洞 西大門刑務所
 京城紡織株式會社 同 始興郡永登浦面 京城紡織株式會社
 松都高等普通學校實業場 同 開城郡松都面高麗里 松都高等普通學校

品名	數量	價額
洋服	三、七六三反	七、六七六圓
和服	九七四反	三、九三三圓
綿布	六四、七二一反	七、六五三圓
綿織物	四三、〇〇〇打	五、四〇〇圓
刺繡	二、五〇〇打	二、四一五圓
刺繡	一、五〇〇打	七五〇圓
刺繡	二、五〇〇打	一、八七五圓
刺繡	六、〇〇〇打	一、五〇〇圓

第九章 工産物

五二九

朝鮮の物産

大田 刑務所工場	忠清南道大田郡外南面	大田 刑務所	木綿 縫	10,105反	5,236
湖西織物公司	同 牙山郡温陽面	李 完 榮	洋裁 縫	6,466	9,366
舒川郡苧布組合	同 舒川郡廳	舒川郡苧布組合	指物 縫	3,333	3,566
扶餘郡苧布組合	同 扶餘郡廳	扶餘郡苧布組合	網 柳 細工	4,736	1,366
全州監獄工場	全羅北道全州郡伊東面	全州 刑務所	交 織 布	5,500反	3,500
木浦 刑務所	全羅南道務安郡二老面	木浦 刑務所	綿 布	1,000	11,000
			甲 秋 綢	2,000反	18,000
			平 巾	100	600
			蚊 帳	100	600
			苧 布	14,600反	6,600
			同 布	70,000	320,000
			木綿 縫	9,100	27,600
			夕 服	7,600	6,000
			洋 服	5,500	8,000
			指 物	2,300	2,700
			麻 裏	10,000	62,000

五三〇

井邑郡苧布組合	全羅北道井邑郡廳	井邑郡苧布組合	苧 布	5,000反	14,000
朝鮮棉花株式會社	全羅南道木浦府海岸通	朝鮮棉花株式會社	粗 布	6,760	17,700
安東郡苧布組合	慶尙北道安東郡廳	安東郡苧布組合	苧 布	14,265	17,400
高瀨合名會社機業所	慶尙南道釜山府草梁洞	高瀨合名會社	白 木 布	6,000	18,000
朝鮮紡織株式會社	同 凡一洞	朝鮮紡織株式會社	紺 木 綿	5,598	13,193
釜山刑務所晋州支所	同 晋州郡晋州面	釜山刑務所支所	浴 衣 地	7,084	17,001
朝鮮染織合名會社	平安南道平壤府下水口里	朝鮮染織合名會社	綿 布	6,505	3,903
大同染織所	同 上需里	大同染織所	綿 布	25,769反	2,300,000
栗山染織所	同 安州郡安州面	栗山染織所	圓 綿	9,739	15,850
			製 久留米 紙	4,080反	3,600
			絹 布	1,071	3,500
			同 布	5,000	7,000
			花 頭 紗	3,660	45,675
			官 紗	1,800	17,100
			金 俵 濟	3,000	40,000

布帛加工品 朝鮮總生産額一四、〇一六、九七三圓

朝鮮の物産

工場名	所在地	経営者	品名	数量	製造高
合資會社中テント商會	京畿道京城府南大門通	中西三子吉	天幕類	一、二四五	三六、七九〇
海龍商會工場	公平洞	李基煥	風帽耳	三、八六三	九、六五五
萬豐號	同	李英煥	其他	一、四四五	九、四八五
李完植毛物工場	同	李完植	同	三、二四	七、七五
漢昌商會工場	同	張俊明	同	八〇七	四、三七八
鍾路毛物商會工場	同	張俊明	同	四、一〇〇	一〇、五〇〇
村松工場	元町	村松武八	天幕類	二、九〇〇	七、三三〇
防水布製造工場	高陽郡漢芝面	船崎誠一	雨合羽	三、〇〇〇	三、七七七
合資會社早川防水布工場	慶尙南道釜山府富平町	早川防水布工場	合羽	一〇、〇〇〇	三、〇〇〇

編組物 朝鮮總生産額二、七三四、九九二圓

品名	数量	製造高
天幕類	一、二四五	三六、七九〇
風帽耳	三、八六三	九、六五五
其他	一、四四五	九、四八五
天幕類	三、二四	七、七五
雨合羽	四、一〇〇	一〇、五〇〇
合羽	一〇、〇〇〇	三、〇〇〇

工場名	所在地	経営者	品名	数量	製造高
盧洪錫靴下工場	京畿道京城府竹添町	盧洪錫	靴下	一〇、五六打	二六、一五
松都高等普通學校實業場	同 開城郡松都面	松都高等普通學校	同	七、〇八三	五九、五〇〇
朝鮮製網株式會社	慶尙南道統營郡統營面	朝鮮製網株式會社	漁網	二〇、〇三五	八三、二四
朝鮮製網株式會社分工場	同 同面朝日町	朝鮮製網株式會社	同	五、三三三	二〇、九七二
三星洋襪織造所	黃海道海州郡海州面南本町	金星	靴下	二、〇〇〇	三〇、〇〇〇
共信商會	平安南道平壤府巡營里	李鎮淳	同	五、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
世昌織造商會	同	朴台泓	靴目	三、〇〇〇	六〇、〇〇〇
共和洋襪所	同 上需里	林彌康	靴下	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
大元商會	同 下水口里	方潤	同	二〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
三共洋襪工場	同 雞里	朴泰堯	同	六、五〇〇	一五、六三〇
新成洋襪工場	同 上水口里	朴仁寬	同	八、〇〇〇	一〇、〇〇〇

紙 朝鮮總生産額二、二〇三、九九四圓

工場名	所在地	経営者	品名	数量	製造高
忠北紙物同業組合	忠清北道堤川郡廳	忠北紙物同業組合	朝鮮紙	五、〇三六	二四、〇九
全州郡製紙組合	全羅北道全州郡廳	全州郡製紙組合	朝鮮紙	三、一四〇	一〇、六〇
			溫突紙	一、三九六	一〇、六〇
			和紙	一、九八〇	一〇、六〇

第九章 工業物

朝鮮の物産

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
鎮安郡製紙組合	全羅北道鎮安郡廳	鎮安郡製紙組合	朝鮮紙	一、八五三塊	六、四四六
任實郡製紙組合	任實郡廳	任實郡製紙組合	朝鮮紙	二、九三三塊	八、六六〇
慶州郡製紙組合	慶尙北道慶州郡廳	慶州郡製紙組合	朝鮮紙	四、〇〇〇塊	八、三三〇
盈德郡製紙組合	盈德郡廳	盈德郡製紙組合	朝鮮紙	二、二二七	五、四〇八
宜寧郡製紙組合	慶尙南道宜寧郡廳	宜寧郡製紙組合	朝鮮紙	九、九六六	一四、六五七
陝川郡製紙組合	陝川郡廳	陝川郡製紙組合	朝鮮紙	二、八六六	一〇、六四七
山清郡製紙組合	山清郡廳	山清郡製紙組合	朝鮮紙	一、五三三	五、四七四

紙製品 朝鮮總生産額二、〇〇四、〇六七圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
合資會社京城荷札製造所	京畿道京城府本町	合資會社京城荷札製造所	荷札	—	一三、一〇六
馬場製本場	永樂町	馬場製本場	帳簿	—	一五、三九三
清田紙面製作所	長谷川町	清田製紙	紙	—	一三、〇〇〇
淺野製本所	林町	淺野製本	製本	—	一五、〇〇〇
越智封筒製作所	舘底洞	越智封筒	封筒	二、三三〇、九六六枚	三、三五一
奇西製紙工場	全羅南道長城郡西三面	奇西製紙	油紙	三、五〇〇枚	三、五〇〇

製革 朝鮮總生産額四八七、二六七圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
製革工場	京畿道高陽郡崇仁面	尹泰英	煙草入革	一、一〇〇枚	一〇、三三〇
皮革工場	忠清南道燕岐郡鳥致院里	山澤福之助	羊皮	一、一〇〇	一、五〇〇
大田皮革製造工場	大田郡外南面	大田皮革株式會社	青皮	一、〇〇〇	三、〇〇〇
大東皮革所	平安南道平壤府橋口町	武田丑次郎	牛皮	二、〇〇〇	三〇、〇〇〇
合資會社小林商會	京畿道京城府明治町	小林良禪	ボックス	一、九三三	一、九七九
中島製靴所	岡崎町	中島市次郎	セヒヤ	六、五九五	四八、一〇八
岩田製靴所	本町	岩田常吉	青底	一五、六六七	一五、六六七
大塚製靴所	同	大塚三四	ボックス	八三、八五〇	三、四六七

皮革製品 朝鮮總生産額二、八二一、五〇九圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
合資會社小林商會	京畿道京城府明治町	小林良禪	靴	二、三〇〇	一七、五七二
中島製靴所	岡崎町	中島市次郎	靴	二、五〇〇	三、五〇〇
岩田製靴所	本町	岩田常吉	靴	三、〇〇〇	三〇、〇〇〇
大塚製靴所	同	大塚三四	靴	四、二〇〇	三三、二〇〇

朝鮮の物産

吉田製靴所	同	吉田順三	同	1,100	10,000
池尾皮革製品店	同	池尾好太郎	旅行具	1,500	15,000
金川製靴店	同	金川才吉	靴	1,510	13,510
大昌製靴店	同	金泰龍	靴	4,966	39,466
朴德裕製靴店	同	朴德裕	靴	8,991	76,491
大昌洋靴店	同	崔在煥	靴	6,404	48,644
韓敬善製靴工場	同	韓敬善	靴	1,733	13,133
世昌洋靴店	同	梁世鎮	靴	2,000	15,000
天野製靴工場	同	天野百藏	靴	3,000	22,000
朝鮮皮革株式會社	同	朝鮮皮革株式會社	靴、靴其他の革製品	8,170	63,870
平野製靴場	同	平野新太郎	靴	3,000	22,000
平和堂洋靴店	同	李根澤	靴	1,000	7,000
朴正錄洋靴店	同	朴正錄	靴	700	5,300

五三六

製材 朝鮮總生産額産額六、四六七、九六四圓

岩田製靴店	平安南道平壤府大和町	岩田朝次郎	洋靴	1,000	10,000
岩野製靴店	同	岩野宇多二郎	同	1,000	10,000
平壤洋靴店	同	金觀淵	洋靴	1,700	13,000

工場名	所在地	經營者	品名	大正十三年製造數量	價額
株式會社石崎商店	京畿道京城府漢江通	株式會社石崎商店	製材	—	105,300
株式會社大二商會	同	株式會社大二商會	同	—	164,500
本明製材工場	同	本明卯平	同	—	56,000
株式會社大工商會	同	株式會社大工商會	同	—	75,000
仁川支店	仁川府濱町	仁川支店	同	—	75,000
湊製材所本工場	全羅南道順天郡松光面	湊京吉	建築材	10,000	1,000
杉原製材工場	慶尙北道大邱府元町	杉原新吉	木材	9,000	90,000
藤田製材工場	慶尙南道釜山府榮町	藤田富藏	製材	3,750	37,500
若狹製材工場	同	若狹榮市	同	9,000	90,000
目加田製材工場	同	目加田平三郎	同	6,000	60,000
總督府營林廠	平安北道新義州大和町	營林廠	木製品	193,533	2,377,768

五三七

朝鮮の物産

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
新義州木材株式會社	平安北道新義州大和町	新義州木材株式會社	製材	三、六七〇	二八四、〇〇〇
滿鮮製材株式會社	鴨川町	滿鮮製材株式會社	同	一四、四三三	一〇一、八三三
石崎商會製材所	同	石崎商會製材所	同	五、三五五	八一九、一五六
鴨綠江製材所	同	增田光平	同	三、一六〇	三六五、〇〇〇
淺見製材所	同	淺見市治郎	同	六、〇〇〇	七三、〇〇〇
三葉商會製材所	本町	蛭子井正信	同	四、七五〇	六五、〇〇〇
渡邊商會製材所	同	渡邊喜三郎	同	六、〇〇〇	五〇、〇〇〇
東商會	濱町	東文次	同	八、〇六四	一三三、七六〇
大陸木材工業株式會社	咸鏡北道清津府浦項洞	大陸木材工業株式會社	板及捲材	一、四四一、六三二	三六、二四五
製滿江林業株式會社	會寧郡會寧面	豆滿江林業株式會社	製材及捲材	三、三三三	二六、二六七〇
岩村組製材工場	同	岩村長市	角材	二、〇〇〇	一三三、〇〇〇
			捲材	二、〇〇〇	三三、〇〇〇

五三八

木製品 朝鮮總生産額五、四三〇、二五六圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
合資會社森山製作所	京畿道京城府若草町	合資會社森山製作所	和洋家具	五、七五〇	五九、五〇〇
雜賀建具工場	岡崎町	雜賀元勝	建具	四、八〇〇	一三、〇〇〇
松本製作所	同	松本太造	學校用具類	八、九七〇	七二、九〇〇

大正十三年製造高

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
楠本自動車ボディ修理工場	同	楠本吉太郎	自動車修理	一	一五、〇〇〇
戸田農具株式會社	北米倉町	戸田農具株式會社	農具	三、六五五	二九、一三五
合資會社小山商店	永樂町	合資會社小山商店	和洋家具	四、三七五	一〇、五五〇
野村桐製履製作所	同	野村千太郎	桐製履原形	六、〇〇〇	三〇、〇〇〇
橋本洋家具工場	本町	橋本國松	洋家具	八、〇〇〇	八〇、〇〇〇
新井家具工場	櫻井町	新井六一	卓子	三〇〇	九、〇〇〇
文鳳鎗籠工場	寬勳河	文鳳鎗籠	籠	六〇〇	一八、〇〇〇
德永家具工場	同	德永増兵衛	家具	五、八〇〇	三〇、〇〇〇
楠本建具工場	元町	楠本徳松	建具	三、三〇〇	一〇、四〇〇
築産木工所	鍾路	具準浩	喪具	三〇〇	一一、一〇〇
中央基督教青年會工藝部	同	具禮九	家具	四〇〇	一一、〇〇〇
旭屋工場	漢江通	森田政次郎	折箱	一〇〇、〇〇〇	七、〇〇〇
松田薄板工場	同	松田太六	薄板	一〇、〇〇〇	四、〇〇〇
草刈農具製造所	仁川府仲町	草刈久太	農具	一、〇〇〇	一、〇〇〇

第九章 工産物

五三九

朝鮮の物産

大山工 作 所	同	水原郡水原面	大山才次郎	家具類	六〇〇	10,000
湖南農具株式會社	全羅北道群山府荳町	湖南農具株式會社	農具	二,三〇〇	14,000	
梯農具製造所	同	梯吉次郎	同	六,三〇〇	41,000	
森井製作所	慶尙北道大邱府大和町	森井齊	卓子の椅子	四,五〇〇	15,000	
西井履物工場	同	西井留吉	其の他	10,000	10,000	
備福履物工場	慶尙南道釜山府辨天町	藤澤次郎	同	20,000	10,000	
山田製箱所	同	山田領太郎	鮮魚箱	10,000	10,000	
			乾魚箱	10,000	10,000	
			サイダー箱	五,〇〇〇	2,500	
			海苔箱	五,〇〇〇	5,000	
			素麵箱	10,000	1,000	
			其他	10,000	8,000	
釜山丸魚合資會社製箱所	同	佐藤町	魚箱	四,〇〇〇	3,000	
			煎子箱	四,〇〇〇	4,000	
			雜子箱	三,〇〇〇	1,100	
			板戸類	一,一〇〇	4,035	
			硝子戸類	一,一〇〇	4,310	
			襖骨	九,五〇〇	9,975	
			其他	七,150	7,500	
				一,六〇〇	四,351	
日本建具株式會社	同	釜山支店	其の他	一,六〇〇	四,351	

五四〇

小林工 作 所	同	大廳町	小林松一郎	樽	二,四〇〇	16,800
松下商店	平安南道平壤府旭町	松下一衛	家具	二,800	10,000	
垣内商店	同	垣内由之助	指物	10,000	10,000	
三國屋和洋家具	同	山本辰三郎	家具	10,000	10,000	
齊藤酒造會社	同	齊藤久太郎	酒樽	七,〇〇〇	4,000	
附屬製樽工場	同	黃金町	家具	四,〇〇〇	2,780	
三成商工社	同	巡營里	家具	二,〇〇〇	1,600	
福永商會下駄工場	平安北道新義州府眞砂町	福永シヤナ	下駄	一四八,〇〇〇	1,600	
木履工場	同	其阿彌眞次郎	同	六,〇〇〇	六,000	

竹製品 朝鮮總生産額一、三三〇、二六四圓

工 場 名	所 在 地	經 營 者	品 名	大正十三年製造高
藤井工場	京畿道京城府旭町	藤井清次郎	竹籠	10,000個 5,000圓
羅州工藝品製造所	全羅南道羅州郡羅州面	山崎喜造	竹細工	二六,000個 六萬,三〇〇圓

漆工器 朝鮮總生産額二〇〇、七〇三圓

工 場 名	所 在 地	經 營 者	品 名	大正十三年製造高
統營漆工株式會社	慶尙南道統營郡統營面	統營漆工株式會社	螺鈿漆器	三,六三三個 二一,100圓

第九章 工 産 物

五四一

朝鮮の物産

五四二

杞柳木通類細工品 朝鮮總生産額 五〇三、八四五圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
高澤行李製造所	京畿道始興郡北面鶯梁津	高澤藤子	柳行李	一、八五〇	10,000
朝鮮興産株式會社	忠清南道公州郡公州面	朝鮮興産株式會社	柳行李	九、三七五	六、二二五
杞柳工場	慶尙北道大邱府鳳山町	杞柳工場	バスケット	九、三三〇	一三、九九五
東洋杞柳株式會社	慶尙北道大邱府鳳山町	大橋松太郎	同	一三、九六三	三〇、一一〇
清川杞柳細工工場	平安南道安州郡安州面	大石佐一	行李	三、〇〇〇	九、〇〇〇
			靴	五〇〇	二、五〇〇
			バスケット	二〇〇	五〇〇
			箕	一〇〇	五〇

石工品 朝鮮總生産額 一八七、七三八圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
合資會社 京城大理石製造所	京畿道京城府岡崎町	合資會社 京城大理石製造所	大理石細工	一	一四、二〇〇
李最呂工場	同	李最呂	石細工品	四〇〇	五、〇〇〇
崔斗榮工場	同	崔斗榮	同	三〇三	七、九七六

石粉 朝鮮總生産額 一九八、六九九圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
合資會社 京城石粉製造所	京畿道京城府岡崎町	谷口小次郎	石粉	三、〇〇〇	一八、九〇〇
日下部石粉製造所	同	小畑豊七	同	三〇、〇〇〇	一六、五〇〇
吉川石粉製造所	慶尙南道釜山府藏前町	吉川伊八郎	同	三、八八〇	一七、四九六
中央石粉工場	黃海道金川郡古東面	増田熊雄	同	九、〇〇〇	七、六〇〇
朝鮮石粉製造所	同	谷口源次郎	同	五、八五五	四、四六四

銃鐵 朝鮮總生産額 五、五六五、七一〇圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
三菱製鐵株式會社 兼二浦製鐵所	黃海道兼二浦	三菱製鐵株式會社	銃鐵	九、七七五	五、五六五、七二〇

精鍊 朝鮮總生産額 三、八六八、四七三圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
谷田鐵業所	黃海道延白郡海月面	谷口與四郎	純金	二二、三五五	四三三、九六六
樂山鑛山第二製鍊所	同	久原鐵業株式會社	純銀	五、六六六	三、三三七
		小瀧元司	純化銀	七〇、七〇〇	八、三三六
			金銀鉛鐵	五九、六〇〇	三、一四三

第九章 工産物

五四三

朝鮮の物産

柴田黒鉛製錬所	平安南道安州郡安州面	柴田次郎平	黒鉛	一〇噸	一七,〇〇〇
雲山金鑛大岩洞工場	平安北道雲山郡北鎮面	アルフ、エル、ヘヴ イン	金塊	二四三、三五	七九、一〇
雲山金鑛橋洞工場	同 橋洞	同	同	五七、七五	一、八三、一七
佛國人特許鑛山	同 昌城郡東倉面	ルイ、ロントソ	同	一七六、〇〇〇	六六、五〇〇

五四四

鐵工品 朝鮮總生産額三、四五〇、三八九圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
渡邊鐵工所	京畿道京城府岡崎町	渡邊政藏	建築金物	一九、五〇〇	四、〇〇〇
合資會社洪淳敏鐵工所	同	洪淳敏	粗摺機	三臺	三、三三〇
京城鑄物製作所	同 京町	石井久作	鑄物	一七、八〇	一八、九四〇
島田工場	同 漢江通	島田忠作	建築金物	三〇,〇〇〇	三、七四〇
宮崎組	同	宮崎吉太郎	宮崎式 パイカ バイ パ	九〇	八九,〇〇〇
京城電氣株式會社	同	京城電氣株式會社	瓦斯計量器 修理器 其他	二、七〇	三、三三〇
龍山工作株式會社	同	龍山工作株式會社	ボイラシ グ グ 其他	二四〇	九、九六
龍山工作株式會社	同	龍山工作株式會社	石油發動機 ポン ボ 其他	二四	二、五二〇
二宮機械工場	同 西界洞	二宮常一	製材機其他 諸機修理	一	六、五〇〇
魚座機械工場	同 古市町	魚座マサ	朝鮮製 船及用具 修機製作	一	一、〇〇〇
雙和祥鐵工廠	同 孝悌洞	宋智明	朝鮮製 船及用具 修機製作	一	二、七〇〇
仁川造船鐵工所	同 仁川府港町	緒方久	朝鮮製 船及用具 修機製作	一	三、三〇五
絳谷鐵工所	同 濱町	絳谷道平	朝鮮製 船及用具 修機製作	一	八、〇〇〇
京仁鐵工所	同	阿關幸十郎	朝鮮製 船及用具 修機製作	一	八、〇〇〇
龍山工作所永登浦工場	同 始興郡永登浦面	龍山工作株式會社	橋桁	一	三、〇〇〇
鑄物工場	同 忠清南道燕岐郡鳥致院	齊同福	釜	一〇、五〇〇	二六、二五〇
河野鑄物工場	同 論山郡江景面	河野竹之助	釜	一、〇〇〇	二八、〇〇〇
鐵工場	同 天安郡天安面	宋亮明	釜	一五、〇〇〇	三〇,〇〇〇
朝鮮鐵道株式會社	同 慶尙北道大邱府東雲町	朝鮮鐵道株式會社	火針	一	七、四三六
大邱工場	同	朝鮮鐵道株式會社	諸機修理	一	二八、八〇〇
林鑄物工場	同 達城郡達西面	林兵馬	朝鮮釜	一〇、四〇〇	二八、八〇〇

大正十三年製造高

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
崔台根工場	同 竹添町	崔台根	建築金物	一〇〇	四〇,〇〇〇
二宮機械工場	同 西界洞	二宮常一	製材機其他 諸機修理	一	一、〇〇〇
魚座機械工場	同 古市町	魚座マサ	朝鮮製 船及用具 修機製作	一	二、七〇〇
雙和祥鐵工廠	同 孝悌洞	宋智明	朝鮮製 船及用具 修機製作	一	三、三〇五
仁川造船鐵工所	同 仁川府港町	緒方久	朝鮮製 船及用具 修機製作	一	八、〇〇〇
絳谷鐵工所	同 濱町	絳谷道平	朝鮮製 船及用具 修機製作	一	八、〇〇〇
京仁鐵工所	同	阿關幸十郎	朝鮮製 船及用具 修機製作	一	八、〇〇〇
龍山工作所永登浦工場	同 始興郡永登浦面	龍山工作株式會社	橋桁	一	三、〇〇〇
鑄物工場	同 忠清南道燕岐郡鳥致院	齊同福	釜	一〇、五〇〇	二六、二五〇
河野鑄物工場	同 論山郡江景面	河野竹之助	釜	一、〇〇〇	二八、〇〇〇
鐵工場	同 天安郡天安面	宋亮明	釜	一五、〇〇〇	三〇,〇〇〇
朝鮮鐵道株式會社	同 慶尙北道大邱府東雲町	朝鮮鐵道株式會社	火針	一	七、四三六
大邱工場	同	朝鮮鐵道株式會社	諸機修理	一	二八、八〇〇
林鑄物工場	同 達城郡達西面	林兵馬	朝鮮釜	一〇、四〇〇	二八、八〇〇

第九章 工産物

五四五

朝鮮の物産

吉岡鑄物工場	同	金泉郡金泉面錦町	吉岡庄藏	同	新製釜	一六、〇〇〇	一〇、〇〇〇
佐藤鑄造所	慶尙南道釜山府瀛仙洞	佐藤兼吉	丸釜	三、〇〇〇	京釜	七、〇〇〇	一五、〇〇〇
大林鐵工所	同	富平町	大林一雄	朝鮮火鉢	八、〇〇〇	五、〇〇〇	四、五〇〇
西條鐵工所	同	西條利八	西條利八	船舶修理	二、五〇〇	一〇	三、七〇〇
橫江川鐵工所	同	橫江川定市	諸機	船舶修理	九、五〇〇	三五	三、〇〇〇
尾崎鑄物工場	同	草梁洞	辻本久吉	其他工事	七、〇〇〇	七	三、六三〇
釜山鍋釜製作所	同	大新洞	新納良一	同修理	八、五〇〇	一〇〇	一〇、〇〇〇
雙華興、王敬五鑄物工場	黃海道海州郡海州面	王敬五	丸釜	朝鮮釜	五、六〇〇	三〇〇	三、〇〇〇
			火犁	釜	七、〇〇〇	七〇〇	一六、〇〇〇
			火鉢	鉢	五、〇〇〇	一〇〇	四、〇〇〇

第九章 工業物

雙華興、王敬五鑄鐵廠	同	鳳山郡沙里院	千德泉	釜火	六、二〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
朝鮮商工株式會社鐵工所	平安南道平壤府柳町		朝鮮商工株式會社	水道機械	四、〇〇〇	一六、〇〇〇	一六、〇〇〇
合資會社丸鑄商工鐵工所	同		合資會社丸鑄商工	風呂釜	七、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
中福鑄造所	同		金元福	火鉢	一、五〇〇	七、〇〇〇	七、〇〇〇
東洋鑄物工業所	同	橋口町	李載泓	釜農具	七、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
清水工務製作所	同	八千代町	清水由太郎	諸機	二、五〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
朝鮮商工株式會社	同	鎮南浦府億兩機里	朝鮮商工株式會社	鑄鐵	一、四〇〇	一、四〇〇	一、四〇〇
鎮南浦製釜工場	同	碑石里	魯起元	釜、諸機	六、〇〇〇	四、一四〇	四、一四〇
新義州鐵工所	平安北道新義州府濱町		中込精一	鑄鐵	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇
東島鐵工所	同		東島要作	鑄鐵	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
釜鑄造所	咸鏡南道咸興郡北州東面		宋萬朝	鑄鐵	一六、〇〇〇	八、〇〇〇	八、〇〇〇
昌盛工場	同	北青郡北青面	閔德俊	鑄鐵	四、三六〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇

朝鮮の物産

宮崎鐵工所會寧支店

咸鏡北道會寧郡會寧面

小林 雅 雄

諸機械製
造及修理

一三、六〇〇

三、四、五五

金屬製品 朝鮮總生産額九、三三七、六七九圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
木庭刀鋸工場	京畿道京城府永樂町	木庭 錦治	刀鋸	五、〇〇〇	一三、五〇〇
鳴神工場	元町	鳴神 重太郎	染料	六〇〇	一〇、〇〇〇
朴煙竹管工場	芳山町	朴 春煥	煙管	二、〇〇〇	一四、〇〇〇
伊藤商行第二工場	漢江通	伊藤 大二郎	量器	三、五〇〇	五、九三三
金 鑰器工場	同	金 漢明	衡器	一、二五五	三九、四六九
李 鑰器工場	同	李 相玉	同	四、六〇〇	三三、〇〇〇
群 山鐵工場	全羅北道群山府榮町	張 相玉	同	二、五〇〇	一三、五〇〇
眞 鑰器工場	任實郡聖壽面	尹 乘禧	鑰器	一、三〇五	二二、九六〇
同	同	尹 乘奎	同	一、八〇〇	三〇、〇一〇
河成玉鑰器工場	慶尙北道大邱府明治町	河 成玉	同	一〇、〇〇〇	一五、一六〇
朴逸相鑰器工場	奉化郡乃城面	朴 逸相	同	一〇、〇〇〇	一五、〇〇〇
吉田バケツ工場	慶尙南道釜山府本町	吉田 久吉	バケツ	一〇、〇〇〇	一三、〇〇〇
			ルケツ	一、〇〇〇	四、一〇〇

大正十三年製造高

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
ライジングサシ 石油株式會社釜山油槽所	同	瀛仙洞	石油	一四、〇〇〇	五七、六〇〇
眞 鑰 工 場	黃海道瑞興郡瑞興面	安 卿雲	食器	七、〇〇〇	一四、〇〇〇
同	同	洪 宗承	同	一、〇〇〇	一〇、九〇〇
池田金網工場	平安南道平壤府櫻町	池 田 卯八	金網	一、〇〇〇	一〇、〇〇〇
今池銅工場	同	今池 昇松	銅板	一、〇〇〇	六、〇〇〇
同	同	同	同	一、〇〇〇	五、五〇〇
同	同	同	同	一、〇〇〇	四、五〇〇
同	同	同	同	一、〇〇〇	四、〇〇〇
平川鑰器工場	同	金 重鉉	大盆	八〇〇	四、〇〇〇
同	同	同	同	二〇〇	二、〇〇〇
同	同	同	同	一、八〇〇	二、一〇〇
同	同	同	同	一、八〇〇	二、一〇〇
同	同	同	同	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同	同	同	同	一〇、〇〇〇	七、〇〇〇
同	同	同	同	七〇	三、五〇〇
同	同	同	同	六〇〇	六、〇〇〇
同	同	同	同	五	一、一七
同	同	同	同	八、〇〇〇	一、三〇〇

五四九

第九章 工産物

同

同

同

同

同

同

朝鮮の物産

崔 鎭 器工場	平安北道定州郡馬山面	崔 昌 元 眞 鎭 器	一、八九九	二〇、九五一
林 鎭 器工場	同	林 鐘 變 同	九、一八三	一九、八九七
朴 鎭 器工場	同	朴 昌 益 同	五、三三六	一〇、二〇四
林 鎭 器工場	同	林 東 燁 同	二、〇五〇	二、二四八
朴 鎭 器工場	同	朴 尙 薰 同	一、八八四	一〇、八九六
朴 鎭 器工場	同	朴 吉 祚 同	五、三三七	一〇、一〇三
金 鎭 器工場	同	金 義 詰 同	二、五〇〇	三、〇〇〇
咸昌商會眞鎭器工場	咸鏡南道咸興郡咸興	朴 華 祚 同	四、〇〇〇	三九、〇〇〇

五五〇

金銀細工品 朝鮮總生産額一、四一八、二〇五圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
美術式會社製作所	京畿道京城府大平通	美術式會社製作所	金銀製品	九、〇五九	一六、一三三
			青銅製品	六、七二七	一九、九六二
			漆器製品	五、〇六七	一七、九四四
			筆墨製品	一、八〇一	八、〇三三
			石製品	三、三七八	二、四四五
			木製品	一	三、八〇一
			指環	四三〇	八、〇〇〇
			帶止	一五〇	四、一〇〇
林貴金屬店	本町	林 禎 藏			四、一〇〇

車輛 朝鮮總生産額一、六六三、八四三圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
元信商會工場	鐘路	金 熙 東	其他	七九〇	二、三六五
元信商會工場	同	同	金細工品	三六	三、〇〇〇
元信商會工場	同	同	銀細工品	三六	六、〇〇〇
元信商會工場	同	同	同	三六	二、五九八
元信商會工場	同	同	同	三六	三、九一〇
金運商會工場	公平洞	金 商 運	金銀細工品	九、四〇六	一六、一一〇
三光商會工場	鐘路	金 同 圭	同	四、六〇〇	四、〇〇〇
和信商會工場	同	申 泰 和	同	六、四〇〇	三、三〇〇
和信商會工場	同	同	同	六、四〇〇	三、三〇〇
和信商會工場	同	同	同	六、四〇〇	三、三〇〇
金銀細工店	南大門通	金 漢 斗	金細工品	二、〇〇〇	三〇、〇〇〇
金銀細工店	同	同	銀細工品	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇
吉川鐵工所	京畿道京城府元町一丁目	吉川平吉	自動車客車修理	七	一八、三〇〇
吉川鐵工所	同	同	同	七	七、〇〇〇
京城電氣株式會社	同	同	電車修理	一三三	一四三、九一〇
京城電氣株式會社	同	同	鑄鐵	一四、六七	二六、四七四
京城電氣株式會社	同	同	砲金	一、〇八一	六、三三四
京城電氣株式會社	同	同	其他	一	三、三七、九二〇

第九章 工產物

五五二

朝鮮の物産

三備商會工場 同
 榮山浦蘭蓮生産組合 全羅南道羅州郡榮山浦

白神京次郎 壘表
 榮山浦蘭蓮生産組合 蘭壘表

織維細工品 朝鮮總生産額 一一六、一三八圓

工場名 所在地 經營者

朝鮮産業貿易株式會社 工場 京畿道高陽郡漢芝面

古賀貞周 壘表

青野麻裏草履工場 同 京城府岷底洞一〇一

青野儀八郎 麻裏草履

葦製品 朝鮮總生産額 一九、二一四、六九五圓

工場名 所在地 經營者

二宮商會 京畿道京城府旭町

二宮勇 壘

加藤壘表工場 同 明治町

加藤佐太郎 同 壘

金崎壘表工場 同 黃金町

金崎仁三郎 同 壘

藤山壘表工場 同 同

藤山繁一 同 壘

平野壘表工場 同 本町

平野兼松 同 壘

五五四

大正十三年製造高

品名	數量	價額
壘表	八〇,〇〇〇枚	一七,〇〇〇圓
カパン地	一三,〇〇〇	三,一六〇圓
麻裏草履	一七,〇〇〇	三,七〇〇圓
同	三,九〇〇足	八,二六圓

大正十三年製造高

品名	數量	價額
壘	七,五〇〇枚	一三,〇〇〇圓
同	五,六六七	九,六〇〇圓
同	五,四〇〇	九,六〇〇圓
同	四,〇〇〇	五,〇〇〇圓
同	四,〇〇〇	三,〇〇〇圓
同	四,〇〇〇	八,〇〇〇圓

陶磁器 朝鮮總生産額 二、九六三、四八二圓

工場名 所在地 經營者

大串陶器工場 京畿道始興郡永登浦面

大串龜八 陶器

菲塚陶器工場 同

菲塚兵助 素燒物

鄭陶器工場 同

鄭啓根 陶磁器

松旨製陶工場 全羅南道海南郡松旨面

朴禮準 陶磁器

辛製陶工場 同 長城郡森溪面

辛德兼 陶磁器

李製陶工場 同 南面

李啓玉 陶磁器

日本硬質陶器株式會社 慶尙南道釜山府瀛仙洞

日本硬質陶器株式會社 洋皿

徐陶器店 同 昌寧郡釜石面

徐盛基 朝鮮食器

朝日窯業合名會社製陶所 平安南道大同郡古平面

代表者 十川甚吉 砂鉢

瓮 平安北道泰川郡西邑内面

李尙烈 瓮

城南洞陶器製造場 咸鏡北道會寧郡雲頭面

城南洞陶器組合 陶器

大正十三年製造高

品名	數量	價額
陶器	三三,〇〇〇	一五,〇〇〇圓
素燒物	一,〇〇〇	一五,〇〇〇圓
素燒物	三六,〇〇〇	三六,〇〇〇圓
陶磁器	六,〇〇〇	四,〇〇〇圓
陶磁器	九,五〇〇	一,一〇〇圓
陶磁器	四,〇〇〇	三,〇〇〇圓
陶磁器	四,三〇〇	三,〇〇〇圓
陶磁器	八五,〇〇〇	一,一〇〇圓
洋皿	三,一〇〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇圓
朝鮮食器	四〇〇,〇〇〇	一五,〇〇〇圓
砂鉢	一五,〇〇〇	三,一〇〇圓
瓮	一〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇圓
陶器	三,八五〇	一〇,〇九六圓
陶器	三,八五〇	一,一五三〇圓

朝鮮の物産

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
土器製造所	京畿道水原郡台章面	尹仁炳	土器	二五,〇〇〇	二,二五〇
大田製陶工場	忠清南道大田郡外南面	荒瀬長重	土管	三,八二四	一四,五二
◎土管工場	慶尙南道釜山府瀛仙洞	坂野喜一郎	土管	五〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
稻葉土管工場	平安南道大同郡大江面	稻葉組	土管	八〇,〇〇〇	一四〇,〇〇〇

五五六

瓦 朝鮮總生産額一、二七二、七六八圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
特許セメント瓦製造株式會社	京畿道京城府漢江通	特許セメント瓦製造株式會社	瓦	一七,八八〇	二九,七六
株式會社三ツ輪租	京町	望月憲磨	瓦	二六,〇〇〇	三〇,〇〇〇
瓦製造工場	京畿道高陽郡延禧面	濱崎頼吉	瓦	一七,〇〇〇	一〇,六〇
同	同	濱本寅吉	瓦	三〇,〇〇〇	三三,〇〇〇
長島瓦工場	同 始興郡永登浦	長島綱吉	瓦	一〇〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
岡田瓦工場	同	岡田久藏	瓦	一〇〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
竹原瓦工場	同	竹原初藏	瓦	一〇〇,〇〇〇	一八,〇〇〇
朝鮮企業株式會社	全羅南道光州郡松汀里	朝鮮企業株式會社	瓦	一七,九〇〇	二二,七九
セメント瓦製造工場	慶尙南道東萊郡西面	佐藤勝藏	瓦	一〇〇,〇〇〇	三三,〇〇〇

大正十三年製造高

煉瓦 朝鮮總生産額一、〇九四、七五〇圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
金永玖製瓦工場	同	金永玖	煉瓦	二五,〇〇〇	一七,五〇〇
特許セメント瓦製造株式會社平壤分工場	平安南道平壤府若松町	前田孫平	煉瓦	一〇,〇〇〇	一七,〇〇〇
松田製瓦工場	咸鏡北道鏡城郡羅南面	松田長作	煉瓦	一〇〇,〇〇〇	一一,〇〇〇
煉瓦製造工場	京畿道高陽郡延禧面	田中秀一郎	煉瓦	五〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
同	同 崇仁面	新井爲三郎	煉瓦	二〇,〇〇〇	五,〇〇〇
森田煉瓦工場	同 始興郡鷲梁津	森田寅造	煉瓦	六〇,〇〇〇	三三,〇〇〇
窯業工場	同 永登浦	京城窯業株式會社	煉瓦	二〇,〇〇〇	八,〇〇〇
山野井窯業工場	同 富川郡多朱面	山野井倉次	煉瓦	一五〇,〇〇〇	三六,〇〇〇
煉瓦工場	忠清北道清州郡清州面	公州刑務所清州支所	煉瓦	四六,〇〇〇	一三,〇〇〇
大田煉瓦工場	忠清南道大田郡外南面	安井金之助	煉瓦	五〇,〇〇〇	一一,〇〇〇
全州監獄工場	全羅北道全州郡伊東面	全州刑務所	煉瓦	五七,〇〇〇	一六,一六
光州刑務所	全羅南道光州郡光州面	光州刑務所	煉瓦	六七,一〇〇	一四,四六
大邱刑務所煉瓦工場	慶尙北道大邱府南山町	大邱刑務所	煉瓦	九七,一九〇	二二,七五
◎煉瓦工場	慶尙南道釜山府瀛仙洞	中山平助	煉瓦	一〇〇,〇〇〇	二七,〇〇〇
藤勝煉瓦工場	同 昌原郡鎮南面	藤勝作之進	煉瓦	九〇,〇〇〇	二二,〇〇〇

大正十三年製造高

第九章 工産物

五五七

朝鮮の物産

工場名	所在地	経営者	品名	数量	製造高
釜山窯業株式會社	慶尙南道東萊郡西面	釜山窯業株式會社	煉瓦	五,000,000	100,000
朝鮮商工株式會社	平安南道大同郡大江面	朝鮮商工株式會社	同	一,100,000	四六,000
稲葉組煉瓦工場	同	稲葉組	同	二,000,000	八〇,000
平壤煉瓦工場	同	平壤新拓會社	同	一,900,000	三〇,000
原田煉瓦工場	同	原田伊助	同	八〇〇,000	一六,000
新義州窯業株式會社	平安北道義州郡光城面	新義州窯業株式會社	同	五〇〇,000	六〇,二一〇
谷煉瓦工場	同	谷口煉瓦工場	同	七〇〇,000	一三,九〇〇
刑務支所煉瓦工場	江原道春川郡春川面	西大門刑務所	同	五三六,〇〇〇	一四,四七三
煉瓦製造所	咸鏡南道咸興郡北州東面	崔基瑞	同	一,〇〇〇,〇〇〇	五〇,〇〇〇
中村工場	同 德源郡赤田面	中村卯三郎	同	五〇〇,〇〇〇	一三,六〇〇

五五八

硝子 朝鮮總生産額 一二二五、一五五圓

工場名	所在地	経営者	品名	数量	製造高
畑硝子工場	京畿道京城府古市町	畑詮之助	投薬瓶	七〇〇,〇〇〇	三三,〇〇〇
藤原硝子製造所	同 三坂通	藤原正市	菜子瓶	五〇〇,〇〇〇	二二,〇〇〇
			硝子製品	二七〇,〇〇〇	四一,七五〇

セメント、石灰 朝鮮總生産額 二、三三三、四八八圓

工場名	所在地	経営者	品名	数量	製造高
小佐硝子工場	慶尙南道釜山府賈水町	小佐助一郎	火の取器	三六〇,〇〇〇	七,五〇〇
			蠟の取器	一五〇,〇〇〇	七,五〇〇
			蠟取器	九二,〇〇〇	五,九二〇
			蠟取器	八〇,〇〇〇	四,八〇〇
			火燈屋	三六〇,〇〇〇	九,六〇〇
			洋傘	一三〇,〇〇〇	五,〇〇〇
			菜子瓶	八,〇〇〇	二,四〇〇
			酒瓶	一五,〇〇〇	三,〇〇〇
			其他	二四〇,〇〇〇	一一,〇〇〇
西鮮硝子製造所	平安南道平壤府櫻町	五味幸次郎	硝子製品	—	二六,一五三

工場名	所在地	経営者	品名	数量	製造高
原收商店鐵筋コンクリート工業所	京畿道京城府漢江通	原收	コンクリート管	六、四三三	三九、四四三
平井石灰工場	同 桃花洞	平井九一郎	石灰	二五、〇〇〇	三〇,〇〇〇
加藤石灰工場	平安南道江東郡晚達面	加藤貞治郎	同	四〇,〇〇〇	二六、〇〇〇
小野田セメント製造株式會社平壤支社	同	小野田セメント製造株式會社平壤支社	セメント	四三、五〇〇	二、一七、五〇〇
			石灰	九七、〇〇〇	三六、八〇〇

製油 朝鮮總生産額五、六〇六、二〇九圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
京城製油所	京畿道京城府南米倉町	山岸富雄	胡麻油	三〇石	四三、〇〇〇
漢城製油所	同 禮智洞	栗林直登	同	七五	一〇、〇〇〇
湖南製油所	全羅北道全州郡全州面	幸田健造	同	—	五、一〇〇
朝鮮製油株式會社	全羅南道木浦府海岸通	朝鮮製油株式會社	棉實油	三、〇七五、〇〇〇斤	六九、三四五
			同 粕	九、八四三、五〇〇	五、六七五

石鹼 朝鮮總生産額六三六、〇九四圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
朝日石鹼株式會社	京畿道京城府同崎町	朝日石鹼株式會社	化粧石鹼	五、八七〇打	三六、四〇〇
			洗濯石鹼	七、三三五打	九六、四〇一
合資會社井上宜壽堂	同 元町	合資會社井上宜壽堂	化粧石鹼	五、三三〇打	一一五、二七五
			洗濯石鹼	一五、四〇〇打	一九、四三三
生田組石鹼製造所	同 仁川府松坂町	太田峻太	洗濯石鹼	三、〇〇〇打	三三、〇〇〇
東洋畜産興業株式會社	同 始興郡永登浦	東洋畜産株式會社	洗濯石鹼	一七、四〇〇打	三、四三〇

化粧品 朝鮮總生産額四七、三一八圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
加茂石鹼製造所	全羅北道群山府榮町	加茂爲治	石鹼	三〇、〇〇〇打	三、〇〇〇
釜山商工株式會社工場	慶尙南道釜山府草梁洞	釜山商工株式會社	化粧石鹼	三、〇〇〇打	一八、〇〇〇
			洗濯石鹼	六、〇〇〇打	七六、〇〇〇
手島曹達製造所	同 大新町	手島近江	洗濯石鹼	五、七三三打	四、三〇三

製藥 朝鮮總生産額三、二三五、七九七圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
合資會社朝鮮人蔘製劑所	京畿道京城府西小門町	久松彦四郎	人蔘エキス	一六、〇七八	七、一八三
			其他	一〇、〇九九	一一、〇四三
朝鮮製藥合資會社	同 長谷川町	須藤久左衛門	人蔘製藥	—	三三〇、〇〇〇
樂天堂製藥株式會社	同 旭町	樂天堂製藥株式會社	藥	五〇五、九九一圓	一一九、八四一
和平堂藥房	同 瑞麟洞	李應善	同	—	三三、〇〇〇
李製藥工場	同 太平通	李庚鳳	同	—	三三、〇〇〇

朝鮮の物産

大正製藥株式會社工場	京畿道高陽郡龍江面	大正製藥株式會社工場	朝鮮亞砒酸	モルヒネ	三七	六三、六九一
七寶嶺山鑛業所	慶尙北道英陽郡首比面	朝鮮亞砒酸株式會社	亞砒酸	苦味他	二四七	七、五三
手島曹達製造所	慶尙南道釜山府大新洞	手島近江	洗曹達	二六、六八	二、三六〇	一八、〇五三
竹中化學工業所	平安南道平壤府橋口町	竹中佐治郎	炭酸カルシウム	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	三七、二四五
三菱製鐵株式會社副產物工場	黃海道兼二浦	三菱製鐵株式會社	硫酸	一、四三三	一、四三三	四〇、〇〇〇
			タコ	四、三五	四、三五	一〇八、九七五
			其	四〇、五九	四〇、五九	一八、五〇〇
			他	四〇、五九	四〇、五九	一九、二六

蠟 朝鮮總生産額 三八四、〇五七圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
生田組洋蠟製造所	京畿道仁川府松坂町	太田峻太郎	蠟	三〇〇、〇〇〇斤	一三〇、〇〇〇圓
加藤洋蠟工場	慶尙南道釜山府富平町	加藤吉太郎	洋蠟	二七〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇圓
立石洋蠟工場	同	立石直作	同	三〇〇、〇〇〇	一三〇、〇〇〇圓

燐寸及軸木 朝鮮總生産額 燐寸 二二二、三四八圓 軸木 八〇、〇〇〇圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
朝鮮燐寸株式會社	京畿道仁川府松林里	朝鮮燐寸株式會社	安全燐寸	一九、三〇〇 (100打入)	一八、三〇六圓
朝鮮燐寸株式會社支店	平安北道新義州府鴨川町	同	燐寸軸木	八、〇〇〇	八〇、〇〇〇圓

染料 朝鮮總生産額 四三一、三九二圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
合資會社福壽洋行	京畿道京城府漢江通	山田龜太郎	染料	二、五〇〇	一〇〇、〇〇〇圓
合資會社喜壽洋行	同	宮脇正一郎	同	二、八〇〇	七二、〇〇〇圓
朝日洋行	同 仁川府内里	鬼頭進	同	三、五〇〇斤	一八〇、〇〇〇圓

護謨靴 朝鮮總生産額 一、九三三、八五九圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
大陸護謨工業株式會社	京畿道京城府元町	大陸護謨株式會社	ゴム靴	一七二、九五	一八六、〇二六圓
京城織紐株式會社	同	京城織紐株式會社	ゴムスリッパ	二四二、九七	一五、九五七圓
合資會社京城ゴム工業所	同	同	ゴムスリッパ	一九〇、〇〇〇	一六、〇〇〇圓
第一ゴム工業工場	同 高陽郡漢芝面	合資會社京城工業所	同	三三、五五	一八、〇三毛
		谷雄太郎	其	十	二六、九五七
		同	靴	一〇三、〇〇〇	九二、〇〇〇圓

朝鮮の物産

五六四

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
内徳ゴム工業所	平安南道平壤府柳町	内徳吉次郎	ゴム靴	三、六五	六〇、九三
西鮮ゴム工場	同 橋口町	李承斗	同	一〇、〇〇〇	九〇、〇〇〇
正昌ゴム工場	同	崔亨俊	同	一〇、八〇〇	五九、四〇〇
大同ゴム工業所	同 大同郡古平面	韓用高	同	一、二〇〇〇	九、一〇〇
平安ゴム工場	同	金東元	同	三、五〇、〇〇〇	二五〇、〇〇〇
朝鮮ゴム工業株式會社	咸鏡南道元山府館橋洞	代表者 小田村廣助	同	二、六六、七五五	一九二、〇六三

製粉 朝鮮總生産額八、一七七、一〇七圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
豐國製粉株式會社	京畿道京城府京町	豐國製粉株式會社	穀粉	四四〇、〇〇〇	一、五二六、〇〇〇
滿洲製粉株式會社	平安南道鎮南浦府港町	滿洲製粉株式會社	小麥粉	三、七四、六六六	一、四九〇、八六二
鎮南浦分工場	同	同	同	四六、一〇四	一、七〇、六四四

製麵 朝鮮總生産額一、一〇〇、〇〇八圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
合資會社達光商會	京畿道京城府黃金町	合資會社達光商會	麵類	一八、〇〇〇	二、〇〇〇
廣池製麵工場	同 櫻井町	廣池寅子	同	一六、〇〇〇	一六、五〇〇
木村製麵工場	同 南米倉町	木村佐馬治	同	三、五〇〇	三、五〇〇

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
小谷製麵所	慶尙北道大邱府東城町	小谷勝藏	素麵	一、七、四〇〇	一、七、四〇〇
中村製麵工場	慶尙南道釜山府草梁洞	中村末吉	ソドメ	一〇、〇〇〇	八、〇〇〇
釜山阿部製麵工場	同 富平町	阿部彦治	ソドメ	二、七〇〇	二、七〇〇
上野製麵所	同 新町	上野玄一	ソドメ	一、五〇、六五五	一四、六三三
支那素麵製造所	平安南道平壤府若松町	前田孫平	ソドメ	五、〇〇〇	四、八七

寒天 朝鮮總生産額一〇九、八〇〇圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
木浦殖産株式會社	全羅南道長城郡長安面	木浦殖産株式會社	細寒天	三、三、〇〇〇	五五、七五〇
長城寒天製造所	同	長城寒天製造所	角寒天	三三、八〇〇	七八、三三
中谷寒天製造所	慶尙北道達城郡壽城面	中谷長太郎	細寒天	一六、〇〇〇	四五、〇〇〇

清酒、燒酎類 朝鮮總生産額一九、六二九、〇九七圓

工場名	所在地	經營者	品名	數量	價額
三巴酒造株式會社	京畿道京城府蓬萊町	三巴酒造株式會社	清酒	八、五三	五九、六四〇